
ノブ、それって空耳

奈備 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノブ、それって空耳

【Nコード】

N7147L

【作者名】

奈備 光

【あらすじ】

豪華なペントハウスで行われたあるパーティ。参加者は、成功を収めた税理士、建築家、不動産ブローカー、おでん屋の女将、コンビニエンスストア経営者、イベントプロデューサー、税理士の愛人、そしてピアニストになる夢を捨てざるを得なかった女性などの面々。そこで交わされた会話の数々と「音の世界」を紐解いていくと、何が見えてくるのか。

多くの出会いが明らかになるにつれ、小さな記憶が次々と蘇り、三十年前のある事件へと収斂していく。

悲しく驚くべき結末の中に、新しく芽ばえた情。

建築家生駒延治と自称歌手のプー太郎ー三条優がコンビを組む長編ミステリーシリーズ²。

（シリーズ物ですが、当然のことながら1からお読みくださる必要はありません）

ブローグ

じつとりと汗をかいていた。

ある意味で晴れがましい席にいるし、周りの多くのものは微笑み、舌鼓を打ち、朗らかに会話を楽しんでいる。

しかし、中には婉曲な言い回しで、あるいは微妙な話題の選択によつて、冷たい油を背中に一筋流すような嫌がらせを仕掛けてくるものもある。

そもそもの始まりは、たいしたことではなかった。
つまらない会話の中に出てきた一言。

思い過ぎだと思っていた。

思いもかけない出来事が起きることはある。奇遇ですね、まさかこんなところでお会いするとは、というやつだ。

もう記憶の彼方になってしまった出会いや出来事。
今になって誰がそんなことを……。

しかし、不思議な出会いが度重なるにつれ、最初に感じた小さな違和感は軽い不快な感触に変化し、今や嫌悪にまで至っていた。

それでもポジティブに日々を送り、傍目にはなんら変わったところなく、この日を迎えたはずだった。

今日、彼らが一堂に会しているということを考えるだけで、耳鳴りが聞こえそうな気になる。

いや、実際に耳鳴りがしていた。

冷たいトカゲが耳道に頭を突っ込み、舌をちよろりと鼓膜に届かせているような恐怖とともに。

今にも意識が吹き飛ぶのではないか、というようなざわついた感触を伴って。

とはいえ、常にそんな想念に囚われているわけではない。妄想もここらあたりで押しとどめておかないと、ということも承知している。

しかも、この負の感情はまだまだ小さいものだ。広い無限の意識の中に転がり込んできたちっぽけな砂のひと粒。そんなものだ。気にする方がどうかしている。

会場では、人々がそれぞれのキャラクターや才能をフルに発揮して、互いに親交を作り、絡め合い、確かめ合っている。

ワインやケーキやすばらしい料理の数々が豊かな空間を彩り、楽しそうな顔を更にほころばせている。

さあ、妄想を捨てるのだ。

また人の輪の中に入っていき……。

しかし、あえてそのように意識しなくてはいけないということが、この企画がとんでもない結末を迎えることを、早々と警告していたのかもしれない。

事態は恐れていた方向に突き進んでいた。

ああ、またあの話だ。

どうしてこうも……。

なぜなのだ。

メッセージ？

どういう意図の？

まさか、まさか、まさか。

もしかすると？

あいつも、こいつも。

そもそも、なぜこれだけ同じようなやつが集まったのだ。
あてつけのように。
そうか、あてつけ？

果たして！！

こいつがささやきかけてきた。
思わせぶりの目配せまでして！

嫌な音が鳴り続けていた。
もうこれは耳鳴りでもなんでもない！

じつとりとした汗は、背中だけではなく、腋の下や胸を濡らしている。

外は横殴りの雨。
激しい雨音。

にもかかわらず、聞こえ続けている音！

人々が行きかう。

音、音楽、車の音、せせらぎ、波の音、列車の轟音、ディスコミュージック、靴音、そんな音、音、音。

そしてあの歌！

話す、話す、しゃべる、そして静寂の話……。

ラの音でチューニング。

酒、ピザ、プリン、夕焼け、プール、インテリア、ジャグジー、ブログ、インタビュー、海の家……。

そんな話はもう……。

めまいがした。

立っていることさえ苦しい。それでも立ち続けている。
そうしなくてはならないから。

弱さを見せてはいけない。見透かされてはいけない。

しかし、ますます「音」の刃は鋭利になり、心の奥底に隠された弱点に焦点を絞って、キリキリと切っ先を突きつけてくる。

いつしか膨張しきった嫌悪感。

いや、もう憎悪だ！

敵意だ！

かろうじて薄皮に包まれてはいるが、すでに赤い雫が滴り始めている。

黒く膨れ上がったその塊に、音の刃が迫っている！

十分前より一分前の方が、なにかがより正確に近づいている。

ああ、まだ一分しか経っていない！

しかし、まだだ。

まだ大丈夫だ。

苦痛に身をよじっている場合ではない。

こわばった笑顔を振りほどき、愛される笑顔を取り戻せ！

女性にはケーキを、男性にはスコッチを！

そうだ。

自分のこの強烈な意思の力に、まずは乾杯だ。

そして、膨れ上がった黒い塊に刃が触れずに済むことを祈って、

乾杯だ！

音はますますその力を誇示し始めていた。

その刃は、まさに憎悪の塊に触れんとしていた。

そのときだった。

唐突にそれは起きた。

あの呪われた忌まわしき名が語られるときが来たのだった。

そして、あの女の台詞。

刃が薄皮を突き破った瞬間を感じた。

己の体の中に、赤黒いなにかが大量にほとばしった。

胸が急に冷たくなった。

今の今まで苦しめられてきたあの音が、ずっと聞こえなくなった。

身が軽くなった。

自然な笑みがこぼれた。

ぼやけかけていた人の顔が眼底に像を結び、まともりのある思考が戻ってきた。

実行するときが来た。

漠然とした恐れが、確信に変わった。

1 須磨

「懐かしいなあ」などと、隣に立っている優は、潮風になぶられた髪を押さえながら深呼吸までしているが、生駒は気乗りしない目で海を見ていた。

台風が近い。時折、ビンツと音をたてて強い風が髪を乱す。濁った灰青の海原。

無数の三角波が白い波頭を見せては消えていく。

水平線は空と混じりあつて判然とせず、行き交う大型船も動きを見せない。

「学生時代は毎年、海水浴に来てたんよ。須磨浦」
「焼けるのにか」

大阪から西へ姫路方面に向かうJR西日本の電車は、神戸の中心街を過ぎた後、この駅の直前、水族館の辺りから海岸線を伝う。

プラットホームに滑り込んだ電車のドアが開くやいなや、強い潮の香りが車内に流れ込んでくることで、いやでも、あ、須磨に着いたんだなということがわかる。

残念ながら、ホームからは、線路際に連立する広告看板に遮られて海を見ることはできないが、改札口への階段を登るにつれて、瀬戸内の穏やかな海が視界に広がってくる。

この駅に着けば、人によつては一種の郷愁に似た感覚を持つ。

少なくとも生駒にとってはそうだ。

遠い昔のことになるが、毎日何度となくこのコンコースを行き来したことがあった。

それは、すばらしい思い出の日々、というジャンルに入れてよいものだった。

たったひとつの出来事を除いては。

その事件によって刻まれた生駒の心の中の小さな傷は、今でもかすかな痕跡を残している。

もはや普段、その傷が疼くということはない。

しかし、この駅に降り立つたびに思い出されてしまう。そんな傷だった。

「あのころは日焼けなんて、気にもしてなかったなあ」

三条優。二十五歳。

ここ十年ほどの間に、楽しい思い出をひとつふたつ、この海岸で作ったのだろう。

生駒たちは駅のコンコースから突き出たテラス、砂浜へ通じる階段の降り口に立っていた。

無粋なアルミの手すりには、塩と水分をたっぷり含んだ風に運ばれてきた、細かな砂が粘りついていていた。

階段の下では、制服姿の女子高生がふたり。しゃがみこんでタバコを吸っている。

その脇には打ち捨てられ、裾が切れ切れになった緑色の幟。色あせ、フィルムという白抜きの文字がかるうじて読める。

「ね、あれ、もう撤去されたんやね。須磨浦のトレードマークやったのに」

視線の先には、海に突き出た巨大な構造物の基礎が残されていた。埋め立てのために山から削り取った土砂を、平底の運搬船に積み込むためのベルトコンベア。

神戸市はこの運転をすでに終了していた。

生駒は砂浜を目でなぞっていった。

波打ち際ではなく、砂浜の奥の辺りを。

つい先日まで、多くの「海の家」が軒を連ねていたことだろう。
毎年変わらぬ須磨浦の夏の風景。

今日、九月二日。ちょうどそれらの建物が解体された直後だ。
砂浜は無数のわだちで覆い尽くされている。

ムーミンのような形をした青いゴミ箱が砂浜の中ほどにぽつんと
設置されているが、その周りは溢れかえったゴミの山。

九月の声を聞けば、波が、風が、雨が、ゴミやわだちを消し去り、
青春や家族愛を謳歌した数十万人の喧騒の名残さえも、ばったり消
え失せる。

見た目だけは静まり返った秋の海岸へと装いを変えるのだ。
思い出として、一旦は心の中に納められた幾千万の出来事。

出会いやおしゃべりや、水の生暖かさや太陽のきらめき、波の音、
砂の熱さ。

それらはすぐに忘れ去られてしまうとしても、いくつかは記憶と
して、ラベルを貼られた小さな引き出しにしまい込まれるのだ。

ルル、ルル……。

「金谷さん、出ないな」

「まだ、寝てるんとちがう？」

「いくら酔ったからって、もう昼過ぎだぞ」

仕事仲間と、今夜会う約束になっていた。場所はいつもの店だが、
時間を決めていなかった。

「ファックスした？」

「ああ」

生駒の経歴書を送ってくれと言われていたのだ。

「見かけと違って、いい人なのかもね。仕事を紹介してくれるんや
から」

「先々、自分も仕事になればって思ってるんだろ」

「暑苦しいから、私、あの人、好きじゃないけど」

硬い髪を背中の中あたりまで伸ばした金谷を、優はいい印象で受け止めていない。

「でもさ、金谷さん、それとは別に話したいことがあったみたいやね」

そう。昨夜、金谷はパーティ会場でこう伝えてきたのだった。

「へへ、とんでもないことに気がついたぞ。あんたにも関係したところや。明日の晩、ゆっくり話そう。おもしろいことになるぞ」

その陰気な酔った声が体に沁み込まないよう、生駒はひとつ肩を回した。

「よつ、待ったかな」と、上背のある中年男が現れた。

ごつい体躯にふさわしく、声がやたら太く大きい。

暑い中にもかかわらず、背広を着込んでいる。トレードマークのスキンヘッドにソフト帽までのせている。

ただ、まさしく不動産ブローカーらしいダークスーツに派手なネクタイ、といういでたちではない。水色のラフな麻のスーツにノーネクタイだ。

「なんとか雨があがってくれてよかった。早速、行くか」

立成清次は目の前の海岸を一瞥することなく、くるりと背を向けた。

「昨夜のパーティは大成功でしたね。立成さん、大活躍でしたよ。あれから、どうでした？」

生駒と優はパーティが中締めとなった後、早々に引き上げたのだった。

「いや、たいして」

すでに立成は、コンコースを歩き始めている。

橋上駅であるＪＲ須磨駅の階段を、海岸と反対側に下りるとタクシー乗り場がある。

立成は後部座席に生駒と優を座らせると、自分は窮屈そうに助手席に乗り込んだ。

「近くてすまんが、須磨寺の交差点を西へ」

向かうのは、ある古い洋館である。

所有者がこれを立成に売り、立成は賃貸マンションを建てようというのだ。

そのマンションを立成自身が経営するわけではない。資産運用物件として、どこかの会社かファンドに丸ごと売却する予定なのだ。あの立地なら買い手はすぐに見つかる、とは立成の読みである。

生駒はそのマンションの設計を立成から依頼されていた。
今日は現地視察。立成が案内するというのだった。

「じゃ、私たちはここで失礼します」

視察が終わり、当然のように一緒に大阪まで帰ろうとした立成に、生駒は断りをいった。

「ん？」

立成の鋭い目にさらされると、たいていの人はいわれなき緊張を強いられる。

立成は六十前後。本物の貫禄がつく年齢である。

そしてその貫禄をさらに大きく見せているのが、迫力ある体に太い声。こわもての面構えにスキンヘッド。派手なスーツ姿で街を行けば、道を譲らないものはいない。

「寄りたいところがあるので」

生駒は慣れているからそれほどではないが、一緒に帰ろうという

申し出を断るといふ、ただそれだけのことで、少々勇気がいることだ。

ただ、立成は乱暴な男というわけではない。

知り合つて十年足らず。まだ生駒が本当の立成を知らず、恐れ入る体験をしていないからかもしれない。

「散策か。それなら須磨寺なんかが近い。源平一の谷合戦の銅像なんかもある」

須磨には海水浴場や水族館があるだけではない。

神戸の街を海際に追いついて立っている六甲山系の西端部にあたり、鉢伏山という小高い山が須磨の地で、その裾野を海に浸している。

神戸や大阪に住む人なら、夕日を受けてシルエットとなったその稜線を、幾度となく目にしたことがあるだろう。

鉢伏山は海岸から山頂まで公園として整備され、ロープウェイに乗ったことのある人も多いはずだ。

遠来の客を集めるというほどの観光地ではないが、関西の行楽地のひとつとしてならリストに掲載される、というような街だ。

立成が須磨寺の歴史を解説している。

「須磨によく来られたんですか？ 詳しいですね」

「昔はな」

生駒の言い方には、忘れられかけた行楽地というニュアンスがあったが、立成の応え方にも同じような響きがあった。

「若いころ、この近くに知人が住んでいた」

「へえ」とは言ったものの、とりたてて話題にすることでもない。

立成も次回の打ち合わせ日時だけを確認すると、台風がまもなく九州に上陸するらしいと忠告を残して、ひとりで駅への細い道を下っていった。

2 思い出話をする

「どう？ こんな感じでよかった？」

「上出来」と、生駒は微笑んだ。

生駒延治。大阪市内で建築設計事務所を営んでいる。

住宅や店舗の設計が中心だが、小規模なマンション設計の仕事も時にはある。数年前に大手設計事務所を飛び出して以来、比較的气楽な毎日を送っているといっているだろう。

もちろん継続的に新しい仕事があるわけではないから、収入はサラリーマン時代に比べて大きく減少したし、それさえ来年も続くという保証はない。

しかし食わせるべき家族もなく、給料を支払ってやるスタッフもないので、自分が死なない程度の収入さえあればいい。そんな呑気な考えを、心配してくれる周囲の人たちにはばら撒いているのだった。

「なあ、今度のスタッフ仕事も給料はなし？」

「悪いな」

かろうじてスタッフらしき者といえば、三条優だけ。

生駒四十八歳。三条優とは二十以上の年齢差。さすがに恋人同士というのははばかれるが、優は生駒の部屋に泊まっていく仲だ。

本業は歌手だと称しているものの、たまにクラブやイベントで歌う仕事が入るだけで、時間を持て余している。

それをいいことに、生駒は今日のようにひとりではやりにくい仕事、つまり現場でなにかの寸法を測るといような作業に、優をスタッフとして駆り出したりするのだ。

「いつかきつと、この大きな労働に報いてもらうからね」

生駒は黙って、洋館と山の緑をバックに優をカメラに収めた。

優のポーズはどんなときも不自然なところがない。もちろん、撮

られることに微塵も抵抗はない。

「でもさ、社長って呼びにくいんやなあ。ね、ノブ、今から須磨寺？」

「まだ、社長って呼べ」

「ええー、まだ仕事中なん？」

「叔父の家。このすぐ近く。昔からとてもよくしてもらってる」

「甥がたまたま近くに來たからって、女子社員を連れて顔を見せに行くっていう構図ね」

優がこれ見よがしのため息をついた。

「それより須磨寺に行きたいか？」

「ううん。お寺参りはどうもね。ね、ね、ロープウェイに乗ってさ。

明石海峡大橋に沈む夕日を見ながらソフトクリームなんかを」

「台風」

「はあー、しかたない。ノブの小さいころの話なんかを聞きに行くとするか」

「いらんこと言つなよ」

叔父の住まいは目と鼻の先だ。

事前に連絡を入れておいたので、玄関先に打ち水をして待つてくれている。

互いに近況の報告などをした後は、生駒が今、敷地を見てきたばかりの新築マンションの話になった。

「とうとうあの芳川さんのお屋敷も取り壊しか」

芳川とは、立成にその土地を売る現在の所有者である。

「親しくされてたんですか？」

「昔、先代とはな。でも、今はもう。息子さんの代になってからは、あの家に誰も住んでなかったし。屋敷、相当、痛んでたやろ？」

「ええ。実をいうと、あまりこの仕事には乗り気じゃなかったんで

す。立派なお屋敷だと聞いていましたから、それを取り壊すのはどうかなって。でも、それは杞憂でした」

見てきた屋敷は、保存に値するものではなかった。

雨漏りが激しく、吹き抜けとなった広い玄関の床は抜け落ち、きらびやかな輝きを放っていたであろう水色の外壁タイルも、いたるところで剥げ落ちていた。凝った階段の手すりや天然石のマントルピースが、昔の栄華を寂しげに物語っているだけだった。

「かれこれ二十年も空き家やったら、そうもなるわな」

叔父が自分の家の具合を改めて確認するように、天井を見上げた。

「芳川さんというのはどういう人だったんですか」

「亡くなった先代か？　そうやな、海産物の加工会社をやってた。

息子は跡を継いでいない。その会社、当時は相当な羽振りで、須磨区の長者番付でもトップクラスやった」

「了輔さんのことは覚えてますか？」

「息子か？　いや、覚えていないな。延治君はその人に会ったんじゃないのか？　その仕事をするようになったんなら」

「ええ、何度かは」

数ヶ月前に紹介されている。

二、三度食事をし、昨夜のパーティの主催者も芳川了輔その人だった。

「叔父さん、ブログってご存知ですか？」

「なんじゃ、それ」

芳川は思いつきで始めた自分のブログを、インタビュー形式でまとめた。

生駒はその十八回目のインタビューを受けたのであり、昨夜のパーティはインタビューを受けた人が二十人になったひとつの区切り、ということが開かれたものだった。

生駒は話題を変えた。

叔父の息子や娘のこと、つまり生駒の従兄弟たちの近況。
おのずと話題は昔話へと向いた。

生駒と従兄弟たちが一緒に遊んだ子供時分のことへ。

夏休みのたびに生駒は須磨に滞在し、まだ健在だった祖母に連れられて須磨の海岸で海水浴をしたときのこと。

姫路の方まで、潮干狩りに連れて行ってもらったときのこと。
そんな話をしながら、再び須磨浦のある夕方の情景が脳裏に浮かんできた。

高校二年の夏休み。

須磨浦海水浴場の海の家で、生駒は殺人事件の現場を目撃してしまふという、とんでもない経験をしてしまったのだった。

被害者は海水浴に来ていた女性。

生駒がアルバイトをしていた海を家の更衣室でその事件は起きたのだった。

「あれは結局、迷宮入りになってしまったな」

と、叔父は屈託なく笑ったが、その話題が出るたびに、生駒の心の中の小さな傷が疼くのだった。

3 プレゼント

台風一過、大阪市内は久しぶりに秋らしい澄み切った青空となった。

瀬謡佐知子はいつものとおり開店準備を整えると、コの字型になったカウンターの内側で丸椅子に座り、携帯電話を取り出した。

背後の厨房では、夫が人気メニューの「今日のご飯」である蛸飯を作っている。

「少し足りないかもしれんなあ」

「今日のご飯」とは余った食材を使って、ご飯ものを日替わりで作っているものだ。都心のオフィス街から微妙に外れたこの一角には、賃貸マンションもポツポツと見られ、単身赴任の勤め人などが住んでいる。

ここの晩飯は旨いと、若い客の中には瀬謡をお母さん呼ばわりするものもいる。

一方で瀬謡を魔女と呼ぶ男たちもいた。

立成など古参の常連客の一部である。

瀬謡は背が高く、黒い服を好んで着るからというのが彼らの言い分だが、真の理由を瀬謡は知らない。

「余るよりいいさ」

「そうやな。しかし、なんだな。伊知さん、どうしたんやろなあ」

瀬謡も数日前から気になって仕方がなかった。

「ほんとに馨ってやつは」

友人の伊知馨。

娘の結婚披露宴に来てくれる約束になっていたのだが。

「台風で飛行機が欠航したんかな」

夫が何度も同じことをいう。

北海道では一泊するだけということだった。

披露宴は九月四日の午後。

台風が日本列島を襲ったので心配はしていたのだが、日本海に抜けてから熱帯低気圧に変わり、飛行機は無事に飛んだはず。

ところが警は姿を見せなかった。

予定通り三日夜に帰阪しなかったのだろうか。

無断欠席の上、事後連絡もくれないし。今日はもう八日。

まさか忘れて……、そんなことはないはずだけど。

瀬謡は、心に浮かんだ小さな怒りと胸騒ぎを押し込めると、再び店内に眼をやった。

ステンレスのおでん鍋からは薄い湯気が上がっている。

湯温が高くなりすぎてはいないかと、小さな温度計に目を凝らす。カウンターにはメザシやポテトサラダなどを盛り付けた大皿が並んでいる。

そんな定番メニューに加えて、今日はマグロのカルパッチョを用意しておいた。サツパリした口当たりのものが欲しいという客の要望に応えてのものだ。

その皿が目につきやすいようレイアウトを変えてみる。

天井に吊られたテレビからは甲子園のプロ野球中継が始まっていた。

「なんだ、いきなり一回の表に二点も取られてるよ。エースが頼りないとダメだね」

瀬謡は再び丸椅子に腰掛けると、バッグから数枚の名刺を取り出した。

小さい字だね、とブツクサ言いながら老眼鏡をかけ、メールアドレスを打ち込んでいった。

まずは立成さん。

初めてのメールです。驚いた？

パーティではお疲れさま。

おかげさまでとても楽しいひとときを過ごすことができました。
ありがとうございます。

また近々、お顔を見せてくださいね。

取り急ぎ御礼まで。

すみよし・瀬謡佐知子

追伸 魔女の宅急便、一日の午前中に滞りなく届けまして候。
で、首尾はいかが？

立成はパーティの司会者であって主催者でないが、こういうメールを送られてうれしくない人はいないだろう。

魔女の宅急便とは、わけがある。

十日ほど前、立成から妙なことを頼まれていた。

瀬謡の友人、伊知馨に届けて欲しいものがあるというのだった。

「六十男が五十半ばの中年女に贈り物かい？」

そういつて瀬謡は茶化したが、立成はいつになく慎重だった。

じゃかましい！とカウンター越しに睨みつけてきそうなものだが、
なんとなく不安そうな目で瀬謡の反応を確かめていた。

立成は五年ほど前に妻を亡くしている。

子はない。やもめ暮らしだ。

伊知馨は瀬謡の二十数年来の友人で、夫とは別居中。

こちらもひとり暮らし……たぶん。

立成の頼みはプライベートなことに違いない。

いつの間にふたりは……。

「自分で直接渡しゃ、いいだろ」

「住所も連絡先も知らん。やってくれるんか、くれんのか」

「ふん」

とはいったものの、届けてやろうかという気持ちが顔に出ていたのだろう。

「詳しいことは聞くな。詮索厳禁や」

と、立成が注意事項を述べたてる。

「なんだよ。他人にものを頼んでおいて」

「わしはこの日のために、ここに通い詰めてきたんや!」

「はあ? そうだったのかい。そりゃ、おあいにくさま。あたしは、そんな無責任な役割はごめんだよ」

「なんやと! なんの責任や」

「そりゃそうさ。譬を不幸に陥れるようなことはできないね」

「わしが不幸を、ってか!」

「違うのかい? じゃ、なんなんだよ」

「けっ、やっぱり、あんたじゃ、あかんか」

「ふう! 埒があかないね」

というような問答を繰り返しながら、瀬謡は立成の頼みを聞いてやることにしたのだった。

客のひとりとして立成と付き合っていたが、信頼できる男だということはわかっていた。

ガラは悪いし、あのごつい顔だ。

本気で恐ろしいと思ったこともあるが、一方で頼りになる男でもあった。

渡されたものは、なにも書かれていないマチつきのA4茶封筒ひとつ。

ガムテープで封をしてある。色気もそっけもない。

中には大きさ数センチのコロリとした箱が入っているようだった。

「中身は？ 聞いても無駄か」

「聞くなと言つとるだろうが」

「指輪かな」

立成が凄みのある目で睨みつけてくる。

「ブローチ、あ、香水。そだ！ チョコレート！」

「うるさい！ なにも詮索するな。先方に渡してからもや。ええか、それから、このことを誰にも話すな。この店の中でも外でもや。きれいさっぱり忘れるんや」

「はいはい。やたら注文が多いね」

「向こうには、わしからや、ということも言うな。知り合いから頼まれたとでも言ってくれ」

「そんなものは受け取れない、と返されたら？」

「だからこそ、魔女の瀬謡さん、あんたに頼むんや。なんとか受け取ってもらってくれ」

「あんたの脳みそは、つくづく都合よくできているんだねえ」

その立成からの届け物を、パーティの日の午前中に、伊知馨に手渡したことを報告する意味で、魔女の宅急便のくだりを記したのだ。つた。

で、結局、あれはいつたいうことだったのだろう。

立成も立成だが、馨も馨だ。

これっぽちも話しやしない。

どいつもこいつも何を考えているんだか。

いつのまにか瀬謡の口から、愚痴が言葉となって出ていた。

「やれやれ。さ、次はつと」

声に出して、気持ちを切り替える。

「それにしても芳川さんに、すぐにメールを出しそびれたのは不覚

だったねえ」

厨房では、すべての下ごしらえが終わったのだろう。夫が鍋を洗う音が聞こえてくる。

「ええやないか。向こうから電話をくれたんやから」

「そうだね。やっぱり週末も営業していてよかったわ」

先週は娘の結婚式があり、あわただしかったせいでパーティの主催者、芳川への礼のメールを出しそびれてしまっていた。

ところがまんが悪いことに、結婚式のあった四日の夜、芳川の方から予約の電話が入ってきたのだった。

いつもは予約など入れてくる客ではないが、商談相手を連れて来ようとしているのだろう。

九月十日に四人ということだった。

「ありがたいね。うちの店も、あんな立派な先生の接待場所として使われるようになったんだね」

瀬謡は弾んだ声を出した。

神棚に向かって拍手を打ち、

「暖簾、出すよ」

と、立ち上がった。

4 ニュース番組

「社長、打ち合わせは五時からですよ」

「お？ もう社長か？」

須磨での現地視察からほぼ一週間が経っている。

「今からそう言つとかないと、口を滑らせるかもしれへんから」

「があ？ 打ち合わせに出るつもりか？」

「あかん？ だってこの辺り、時間潰すようなところ、ないもん」

生駒の事務所は大阪市内の福島にある。朝日放送やシンフォニーホールがあり、最近でこそしゃれたレストランなどがポツポツと目につき始めているが、淀川に近い生駒のマンションの周辺にはコンビニがポツンとある程度だ。

「河川敷にでも行つてこいよ」

「なんの観察しろつていうねん！ 出たらあかんの？」

「いいけど。おとなしくしてろよ」

「はい、社長。コーヒー係を勤めさせていただきまーす」

最初からそのつもりだったのだろう。優はいつものように肩も露なキャミソールではなく、白いブラウスに黒いパンツという服装で現れたのだった。

「金谷さんの話、なんやった？」

「いや。会えてない」

金谷と話す機会がないままだった。

約束の日、ふたりが行きつけの、何を飲んでも一杯五百円のスタンドで生駒は二時間粘った。

すっぱかされたというのではない。もともと時間を決めていなかった。

「電話は？」

「それが、何度掛けても出ない」

なんとなく気持ちが落ち着かなかった。

仕事を紹介してくれようとしているのに、一週間も連絡が取れないままだからだ。

それに、なぜかいやな予感。生駒と違って金谷は腰が軽く、留守録などにはすぐ反応して掛け直してくるのに。

「メールも反応なし」

「ああーっ、もう！ もう少しスカッと営業活動できないもんかなあ」

「連絡がつかないんだから」

「だったら、金谷さんの事務所に行くとか。そんなことやから、いつまでたっても私に給料を」

収入を得ることを日々の暮らしの軸にはしたくない、ということは何度話したことだろう。

生駒にとつて、金儲けがすべてに優先されることはありえない。優にも、それはよくわかつているはずだ。

「わかった、わかった。まるで、秘書だな」

金のことを冗談にするわけではないが、ふたりが金のことを話すとどうにもサマにならない。

「そか、秘書かあ。やっと私の秘書検定一級の資格が生きるときが来たか」

すぐに話の焦点がずれてしまう。

「おまえのその言葉遣いじゃ、だれも秘書として雇わんだろ。客が来たらビシツとしろよ」

「ホイ、かしこまりました、でござりまする」

「あのなあ」

打ち合わせの相手、立成清次と芳川了輔は程なくやってきた。

芳川も立成に負けないほどの巨漢だ。ふたりが並んで打ち合わせ

テーブルにつくと、広いテーブルがまるでちゃぶ台のような印象になった。

生駒の住むマンションはいわゆるファミリー向けのマンションである。

七十？ほどの3LDKだが、それを中古で購入してから大幅に改装していた。リビング続きの和室と洋室を潰してスタジオとし、玄関扉を開けばすぐに打ち合わせスペース。

スリッパに履き替える必要はない。土足のままで。

「先日はご馳走になりました」

「なんの。たいしたことができてなくて」

一週間前のパーティでは、心のこもったもてなしを受けた。まずは礼をいう。

しかし、芳川は疲れているようだった。頬はいくぶん血の気がなく、目も赤い。出張続きでよく眠れていないのかもしれない。

さつそく生駒は図面を広げた。立成はちらりと見るなり、うんうんと頷き、

「いかがです？」と、芳川に振る。

「ええ。すばらしいと思います。ただ、何度も言いますが、私はあなたに土地をお売りするわけですから、計画内容について、とやかく言う立場ではありません」

その通りだろう。

しかし、立成は元の所有者に敬意を表してご意見を頂きたいというのだ。

近隣のこともある。細い道が入り組み、立派な住宅が並んだ須磨の古い、いわば高級住宅地でのマンション建設。計画内容について、元の所有者である芳川を仲間に引き入れておいて損はない。そんな計算が立成にはある。

「なにか、不都合な点がありましたら、ぜひ今の段階でおっしゃっていただきたいのですが」

などと、自分の意見を言う前に、盛んに芳川の意見を求めている。いつものざつくばらんで少々乱暴な言葉遣いは消え、立成はビジネスマントークになっている。切り替えが巧みだ。ただ、威圧感はそのまま。

「そうですね。しかし、そうおっしゃられても……」

とはいえ、芳川は立成に恐れ入るような男ではない。

税理士として社会的地位もある成功者であるし、胆力もありそうだ。腕力でも立成といい勝負をするかもしれない。

芳川に考える時間を与えるように、立成が声を掛けてきた。

「おお、そうだ。生駒さん、今さっき、芳川先生が土地代金の値引きに応じてくださってね。これで心おきなく事業が進められる」

「それはよかったですね」

事業化できるかどうか分からないプロジェクトから、確度の高い仕事へとステップを一段登ったということだ。

そして土地代が安くなることは、生駒にとっても歓迎すべきことだ。土地購入にはなく建物建設に比較的多くの事業費を振り向けられるからだ。

芳川表情は冴えないが、もしかすると立成に強引に飲まされた条件なのかもしれない。しかし、それは生駒には関係のないことだ。

生駒は芳川に助け舟を出すことにした。

プランの内容を解説する。

たかだか一フロア四戸の三階建てのマンションプランなので、説明せずとも一目瞭然なのだが。

ポイントはたった二つ。エントランスに至る長いアプローチの意味と、すべての住戸に海の景観を楽しんでもらえるレイアウトにつ

いて。

「ほう、いいですね。私もひとつ購入させていただこうかな。あ、一棟売りの賃貸物件でしたね」

芳川がようやく目を上げて微笑んだ。

「ええ、今のところは。でも、販売会社をつけて個別分譲する案も、まだ捨ててはいません。そのときはどうぞご検討をよろしくお願いします。ところで、この駐車場の回し方はいかがです？ お隣の住戸に、車のヘッドライトがまっすぐ当たるように思いますが」
立成が痛いところをついてきた。さすがに何十年もこんな仕事をやってきているだけのことはある。

「なるほど、そうですね……」

芳川は几帳面な性格をしているのだろう。

「確か、お隣りには……」と、隣戸の家族構成まで話し始めた。

体格と性格は相似形ではないのだな、と当然のことを考えて生駒はおかしくなった。

六十前だと思われる年齢にもかかわらず、引き締まった体を持つ好男子。頭髮もまだ健在で、スキンヘッドの立成とは好対照。

神経質で慎重な芳川と、大まかで豪胆な立成。

大手会社の顧問契約をたくさん抱えている開業税理士と、どこかダーティーなイメージを発散させている不動産ブローカー！

ありきたりの表現をすれば、生粋のインテリジェントエグゼクティブと成金の不動産屋との対比とでもいえようか。

そんなふたりがどこにでもあるようなおでん屋で意気投合し、こうして仕事に結びつき、結果として生駒も仕事にありつけたのだから、人の縁とは不思議なものだ。

「立成さん、まっすぐ行きましょう」

「え？ 南森町の交差点を曲がった方がよくないですか？」

「天神橋筋が工事中なんですよ。渋滞しているといけないから。ちよつと遠回りになるけど、その方が確実です」

打ち合わせが終わって、四人で例のおでんでも食いにいこうということになった。

国道一号線を快調に東進してきた立成の青いベントツは、芳川の指示通りに南森町の交差点をやり過ごしてひとつめの信号を南に折れた。

「芳川先生は新大阪駅から直行で来られたんでしょう。税理士つても大変ですね。札幌、東京とずっと出張続きだったとか。お疲れでしょうから、今晚は早々に切り上げましょう」

「いや、毎度のことです。出張といっても北海道はパーティとゴルフがメインでしたし。あ、そこを右へ曲がって」

「お詳しいですな」

「ハハ、そりや常連ですから。そう言っちゃ、立成さんに失礼か」
目的地のおでん屋が近づくにつれて、会話も徐々に砕けたものになってきた。疲れた様子だった芳川も調子を取り戻しつつあった。

「立成さんは飲んじゃいけませんよ。これで一応、私は忠告しました。連座制なんてごめんですからね」

「やなことを、おっしゃいますなあ」

車は天満宮の南側へと向かう。

神社の緑が見えてきた。夏の天神祭りの際には大賑わいだ、天神橋筋商店街から少し東に入ったこのあたりは、比較的静かな住宅街といった風情だ。

百円パーキングのちょうど前に、目指すおでん屋はあった。立成と芳川が数年前に出会った店である。

古びた木造二階建て。上は住まいなのだろう。「すみよし」と染め抜かれた紫色の暖簾が少しばかり高級感らしきものを醸し出しているが、それ以外はなんの変哲もない店構えで、裕福なふたりが

通う店にしては意外な気がした。

「さあ、今日は前祝いということで存分に楽しみましょう」

しかし、その楽しみは長くは続かなかった。

おでん屋の天井にぶら下げられたテレビから、ニュースのアナウンサーの声がこう告げるまで、それほど時間はかからなかった。

「今日の午後三時ごろ、大阪市北区にあるマンション、グランハイツ天神の植え込みで女性の死体が発見されました。管理人の話ではこのマンションに住むディスプレイ業の女性らしいということで、警察では身元の確認を急いで……」

5 紹介リング

瀬謡はカードケースから生駒の名刺をより出した。

生駒にメールを入れようと思ったのは、立成の知人であることを聞いていたからだ。立成と共に客として来てくれるかもしれない。

引き戸ががらりと音をたてて開いた。

「ようっ」

と、顔を出したのは立成だった。

「今日はやけに早いね」

先日の立成の妙な頼みのことがたちまち頭をよぎり、魔女の宅急便は、とあやうく言いそうになった。巨体の後ろに誰がいる。

続いて扉をくぐってきたのは、なんと三条優だった。

「うわあ、うれしい。三条さんじゃないですか。先日のパーティーで一緒しました瀬謡です。ああっ！ 生駒さんも。これはこれは！」

生駒がパーティーに連れてきた女性社員の名を覚えていてよかった。次に顔を出したのは芳川だ。

「あれ？ 予約、今日だったかな？ なんだ、四人って……」

「いや。今日は事の成り行き」

瀬謡は精一杯の笑顔で頷いた。

「皆さんで、ようこそ」

生駒がはにかんだように笑って、カタリと椅子を引いた。

「僕は指定席に」と、芳川が一番隅の席に着く。

三条が立成や芳川の上着を、壁のフックに掛けてやる。

「ごめんね。使って。あ、鞆はそっちの棚に。ね、生駒さんに今メールを送ろうとしたところ」

「なんて？」

パーティーのときと違って、生駒は碎けた調子でいう。店の雰囲気

がそうさせているのだとすればうれしい。

「ご挨拶。すみよしにも来てくださいねって」

「立成さんと芳川さんに連れて来られました」

「このおふたりは、うちの店のえべっさんみたいな人でしてね」と、立成と芳川にもかわるがわる笑顔を向ける。

「なるほどね。僕にとってもそうであってくれたらいいけど」

生駒は案外話し好きな男のようだ。

四十八歳という年齢と設計事務所を開いているということくらいしか知らないが、ちよつととぼけたところのある男だ。

「で、今日はどういう風の吹き回しなんだい。この組み合わせは」立成にはいつもの芋焼酎の水割りを、他の三人にはビールを出しながら聞くと、立成が説明してくれた。

「ふうん。なんだかうれしいね。この店がそのマンション計画の仲立ちになったっていうのは」

顔をほころばせて、

「じゃ、これ、前祝のサービスだよ」と、それぞれの皿にジャガイモを入れていく。

「先日はありがとうございました」

改めて芳川に礼をいうと、必然的に数日前のパーティの話題になった。

パーティは、もとはといえばこの店での会話が発端になったものだった。

一年以上前のことになる。

ブログなるものが流行っているらしいということから、興の乗った芳川がやってみると言い出したのだ。

では内容をどうするか。

瀬謡と立成も加わって案を出しあつた。

毎日多くの人に会う芳川ならではの。単なる雑感のようなものではありきたり。

あるテーマに沿って話してもらった内容を掲載すればどうかという事になった。

そしてインタビューされた人が、次の人を紹介する。いわゆるリレー形式。

ブログをネタにした「人の輪」のようなものである。

そして瀬謡は、店の宣伝のためにと、その一番手として名乗り出たのだった。

インタビューのテーマもその場で決めた。

音をテーマに、とは立成の案。

色をテーマにしたい芳川と、奥行きのある話が期待できるのはどちらか、ブログを読んで情景を思い描きやすいのはどちらかなどと、けんけんごうごうの末に決まったのは、好きな音、気になる音、思ひ出の音、というテーマだった。

インタビュー時の食事代は芳川持ちということも決めた。

瀬謡にしてみれば、毎回のインタビューはこの店でと言ったつもりだったが、残念ながらそれはあてが外れた。芳川は、梅田のイタリア料理店をインタビュー会場にしたのだ。すみよしでインタビューが行われたのはほんの数度だけ。

瀬謡は今日もまたその愚痴をいう。

「だって、ここは不便だろ。それに、お互いに横向いて座るんじゃないか、インタビューの調子が出ないじゃないか」

芳川とのこのやり取りも毎度のこと。決まり文句を言って、互いの親交を確かめているのだ。

三条が話に加わってくる。

「それで生駒が十八番目で、次に立成さんを芳川さんに紹介しようとしたんですね」

「そう。そしたら、なんと、ふたりはこの店で以前からの知り合いだったし、立成さん自身が人の輪ブログの立案者のひとりだったというわけさ」

「瀬謡さんから立成さんまで、十九番目でひと回りしてきたわけですか。世間は狭いというのか、なんとも不思議ですよね」

「ああ、わしも鳥肌が立ったよ」

「また大げさなこといって」

立成が楽しそうに、改めて乾杯するようなしぐさを見せて、三条に説明する。

「それでな、芳川先生に記念になるようなパーティーでもしたらどうかと持ちかけたんだ」

「そうなんですか」

「キリのいい二十回目を記念して。で、キリ番の二十人目はこの常連の松任さんということにしたんだ。芳川事務所で働いている女性でね」

「うわ、それ、ずるいですね。立成さんは誰も芳川さんに紹介しなかったということですか」

「ずばりいう」

「きついなあ。誰かを紹介するというのはなかなか難しいものなんだよ。特に仕事抜きで完全なプライベートでは。しかもパーティーを控えたキリ番。ここで失敗するわけにはいかなかったから」

「でも、それまでの人はみんな頭を捻って、自分の知り合いを紹介してきたんでしょ」

まだまだ若い女性の、しかも美人の特権だ。

瀬謡は少しうらやましい。三条が微笑みながら言うと、それがたとえ相手に少々失礼かなと思うようなことでも通る。

立成も笑顔だ。頭をかきながら返す言葉を搜している。

「日本人てさ、なんの利害関係もなかったら、余計に不審がるというか、自分と相手の距離が測れないというか。芳川先生はそうじゃないけど、お相手が……」

この議論はあきらかに立成の負け。

どう弁解しようとも、立成が自分たちで決めた紹介リングというシステムを放棄したのは、間違いなかったのだから。

しかし、実際は立成の責任だけでもない。

立成もこの店で何度も会ったことのある松任が、自分へのインタビューはなかなか順番が回ってきませんね、と半ば催促するようなことをおもしろがって口にしたからだった。

瀬謡は立成のために助け舟を出しておく。

「でも、あれでよかったんじゃないかな。松任さんは、音というテーマにぴったりだったしね。それに話の内容もキリ番にふさわしかったよ」

松任歩美とは、芳川の事務所で働いている秘書的な役割の女性だ。年齢は三十少し前。豊中市にひとりで住んでいる。

サイドビジネスとしてピアノ調律師の仕事もしているらしいから、芳川は松任をある程度は自由にさせているのだろう。

「人の輪ねえ。いわゆる、因縁というやつかあ……」

三条が瀬謡の言葉に納得したのか、頬杖をつき、アジの南蛮漬けを割り箸の先でつつき始めた。

少々だらしない格好。

生駒が立成や芳川の目を気にして、その白い肘を小突く。まるで

授業中に居眠りしている級友を起こそうとしているかのように。

なかなか可愛い雰囲気を持ったふたりだ。

単純な上司と部下の関係ではないのかもしれない。芳川はテレビに気を取られているが、立成はちらりと三条の様子に眼をやった。

瀬謡はこの可愛い娘を引き立ててやろうと思った。女性客を大切にしないでね。

「三条さんも大変ですね。毎週、社長のお守りじゃ。先日のパーティーに続いて今夜も」

立成や芳川に誘われて来たのだったら、生駒の責任ではないし、立成や芳川にしても、おでん屋のママに言われる筋合いのものでもない。

でも、三条の反応を見てみたい。瀬謡はそんな気分だ。

きつと三条は、ほんとに大変ですよ！ などと笑うだろう。そして場が和やかな艶話にでも変化すればおもしろい。

ところが、

「そうなんですか？ 私はこれで普通なのかと」

と、三条はまじめな顔で首をかしげた。

本気でそう思っているわけでもないだろうから、話題を繋ぐ軽い冗談なのだろう。

案の定、仲良しなんだね、と言う前に、立成に先を越されてしまった。

「おお！ うらやましい！ 生駒さん。こないいお嬢さんを部下に持って」

「はあ」

それ以上の言葉が、すぐには出てこないようで、建築家はあわててビールを口に持っていく。

「普通は嫌がられるんだよ。女子社員に夕飯を食いに行こうなんて

誘うと。しかも週末となりや、へたするとセクハラ！って言われかねない。いやあ、三条さんに乾杯！」

と、またもや乾杯のポーズ。会釈して返す三条。どこまでいっても自然な笑顔。

やっぱり生駒と三条の関係は……。

そんな詮索じみた目を、生駒はこんな言葉でさりとかわした。「ところでさ。瀬謡さんが紹介した二番手の伊知馨さんという人。実は知り合いなんだ。因縁なんてちよつと不気味なものじゃなくて、やっぱりきれいな人の輪だよ」

「へえ！」

生駒は三条に向かって言ったのだが、それはさっき彼女がつぶやいた言葉への、ずいぶん間の開いた反応だった。

ただ三条が驚くより、周りが驚いていた。芳川が口に持っていてきかけたヒラテンを取り落として汁のしぶきをシャツに引っ掛けていた。そしてもちろん、最も驚いたのは瀬謡だった。

思わず、

「いやあ、ますますうれしいわあ」と叫んでいた。

芳川には縁もゆかりもない人というつもりで、自分の友人を紹介したのだった。それがこうしてひとつの人の輪を描いている。

「生駒さんと馨はどういう関係？ 馨はあたしたちより少し年上だけど」

あたしたちという部分に力をこめて、生駒への親しみを持たせたつもりだ。

「数年前、ある店舗の内装デザインをしたんだけど、什器や備品を伊知さんの会社から購入することになってね。あの人、ディスプレイ業でしよう。いろいろ教えてもらうことがあって、今もちょうちよく電話をね。輸入品の代理店を紹介してもらったり」

「へええ。十九人目と十七人目で巡ってきた人の輪か」
瀬謡はともうれしかった。こんなちっぽけなおでん屋が人の輪の中心にあるということが。

「そんな小さなリングしか、この店の周りには回っていないんだな。流行らないわけだ」

芳川が憎まれ口を叩いたが、誇らしいことに変わりはない。

「あ、そうともいえるか」と受け流しておいて、生駒にだけ土手焼きをつけてやる。

他愛のない会話がおでんの湯気とともに漂っていた。

三条が大声をあげた。

「この近くやん！」

テレビニュースのアナウンサーの声が急に耳に届いてきた。

「今日の午後三時ごろ……、死体が……、ディスプレイ業の女性らしいと……」

「なんだって！」

「ディスプレイ業！」

「まさか警じゃないだろうね！」

夫が厨房から飛び出してきた。

「見に行ってくる！」

「勘定は後で」

芳川も後を追っていった。

6 序曲

伊知馨の亡骸は、会社兼自宅のマンションの植え込みの中で発見された。スーツ姿で、小ぶりのキャリーケースとハンドバッグが傍らに転がっていた。

緑色のピクニックシートで隠されていたらしいが、台風のおかげで完全にめくれ上がってしまった。伊知の体はじっとりと濡れ、腐敗が進み始めていた。

死体には後ろから首を絞められた跡があった。

機械式駐車場の奥、誰も見向きもしないような常緑樹の植え込み近所の小学生が近道と称してたまたま通り抜けるということがなければ、発見はさらに遅れただろう。

発見は九月八日の午後三時。

一見して、死後数日ほど経過していた。

解剖結果によれば、犯行時刻は早くて九月一日の夜、遅い場合でも四日深夜までの間。

連日降り続いた強い雨のせいで、犯行時刻はそれ以上絞りきれない。

ただ、転がっていたバッグには伊丹空港近くの時間貸し駐車場の領収書が残されていた。印字された出庫時刻は、四日の夜八時四十七分。

また、伊知自身の携帯から三日の夜十時四十三分に会社宛のメールが送信されており、飛行機に乗り遅れたので明日の夜の便で帰る旨が記されてあった。

マンションの玄関ロビーに設置された防犯カメラには、九月二日の午前七時半に伊知が出て行く姿が残されていたが、それ以降の姿

は映っていない。

そして死体発見時には、伊知の車はマンションの機械式駐車場の所定のパレットに停まっていた。

これらのことによつて、四日の二十時二十五分着のJALで札幌から伊丹へ帰阪し、空港近くの時間貸し駐車場に停めておいた自家用車でマンションまで帰ってきた。その直後、建物に入る前に襲われたのであろうと考えられた。

空港からマンションまで、高速道路がすいておれば三十分もかからない。

したがって想定される犯行時刻は、四日の夜九時過ぎから十時半にかけて。

もし、直接マンションに帰つて来なかったのなら時間の特定はできないが、それでも五日の早朝までの間ということになる。

携帯電話も運転免許証などを入れたカードケースの類も、バッグの中から見つかっている。

ただ、財布は見つかっていない。

物取りの犯行かとも考えられたが、死体に真新しいピクニックシートが掛けられていたことから、計画的な犯行という線も捨て切れなかった。

当時、天神橋筋は工事中で作業関係者が多くいたはずだが、交通量が多く、不審車両を見かけたという記憶を持っている作業員はいなかった。

遡ること概ね一週間、九月一日。

午後七時から芳川の主催するブ로그インタビュー二十回記念パーティが開かれた。

会場は大阪市西区に建つ二十三階建てのオフィスビル「セイント

「ブラザ土佐掘」のペントハウス。

二十一階に芳川の税理士事務所が入り、その上、二十二階と二十三階を芳川がゲストハウスとして借りている。

ビルオーナーが元々自分で住むために作った最上階のメゾネット型住戸。

まるで空中の一戸建て。

しかも相当なお屋敷の感覚。

この階にはこの住戸があるのみで、両隣の建物は、はるかに低い。裏は土佐掘川。前の土佐掘通を走る車の音がときおり聞こえてくるだけで、都心にありながら静かな環境だ。

招待状には、「音に集う会」と、パーティの名称が記されてあった。

できればカップルで、というので生駒は優を伴って参加していた。

パーティは立成の司会で幕を開けた。

「今日のご出席者は、芳川事務所の女性社員の方などを含めて、総勢三十二名だとお聞かしています。それだけの人数を余裕で収容できるこのリビングは、いったい何畳ほどもあるでしょう。芳川先生からは、二、三の鍵の掛かっている部屋以外はどこでくつろいでもらっても構わないとおっしゃっていただいております。ではご挨拶やご紹介は後にして、まずは乾杯とまいりましょう」

立成に指名されたのは、瀬謡佐知子という中年の女性だった。

「なんだかよくわからない会ですが、仕掛け人のひとりとして、また芳川さんの元に集う仲間のひとりとして、僭越ですが……」

ベージュ色の大理石で縁取りされ、中央部は脚の長い若草色のカーペットが敷き詰められたゲストハウスのリビング。

料理が盛り付けられている大きなテーブルを囲んで丸テーブルが

適宜据えられ、着飾った男女が乾杯の声を待っている。

「こんな広い家に、芳川さんは奥様とおふたりきりで……」
立成が苦笑いして「おいおい、乾杯やろ。それにお住まいじゃない」と瀬謡をせかす。

「だってさ、思ったことはとりあえず」
と、シャンペングラスを持った聴衆から苦笑いを取っている。

優はと見れば、芳川の脇に立っている女性に眼をやっていた。

「では、ご唱和ください。乾杯！」

「先に皆さんをおひとりずつご紹介させていただこうと思っ
ていましたが、少々プログラムを変更します。まずはテラスに出てみま
しょう。夕焼けがきれいです」

「おおっ」と声があがった。

まさに大阪湾に沈まんとしている夕日が、空を染めていた。

残照に輝く須磨の鉢伏山の稜線。

その向こうには明石海峡大橋。

風が強いせいか、大気に透明感があった。

早速、ゲストたちは外に出ていく。

テラスはウッドデッキ貼り。手すりにもたれると、下を流れる土
佐堀川の水面がオレンジ色に輝いていた。

優が生駒のそばを離れ、ひとりの女性に声をかけている。

相手は少し驚いた様子を見せたが、すぐに思い出したのだろう。
抱きつかんばかりの喜びようだ。

「まだあんまり遠くまで行かないでくださいよ。すぐに皆さんのご
紹介を始めますから」

テラスを回りこんでさっそく探検を始めた客に、立成が大声で呼

びかけている。

玄関とエレベーターホールのある東端部も含めて、この住まいはテラスに囲まれている。

特に南側のメインテラスは圧巻だ。緑が茂った植え込みが見えるし、

「あ、あれプールじゃない？」

と、いつのまにか戻ってきていた優が指差した先、植え込みに囲まれて一段高くなったところには、プールサイドでおなじみのU字型の手すりが見えていた。

「今日は水を張っておきました」

優が知り合いだという女性は飛び切りの美人だった。

「はあ」

「どなたか、プールでお遊びになるかもしれないので」

明るいオレンジ色のドレスを着ているが、その鮮やかな色にも負けない華やかな笑顔を見せた。

「こちら瑠奈さん」

「始めまして。生駒といいます。芳川さんのお嬢様ですか？」

「え？ いいえ」

乾杯のとき、主催者側に控えていたし、事務所の社員らしからぬドレス姿なので、てっきり芳川の娘かと思ったのだ。

「ようこそお越しくださいました」

瑠奈の笑顔たるや、生駒のくだらない疑問など軽く吹き飛ばしてしまう。

「プールがあるんやったら、案内状にそう書いてくれてたら、水着、持ってきたのにい」

優が瑠奈の肩を叩く。

「私を使えばいいじゃない」

「あ、そうか」

「でも、予報ではもうすぐ雨が降り始めるよ」

プールは水中照明、水中スピーカー付きだという。

「長さ九メートル、深さも七十センチしかないんだけどね。ちょっと大きめの水風呂ってところかな」

「なにを贅沢言つてんのよ」

「ところでどういう関係なんだい？」

「あ、ごめん。いえ、すみません」

優があわてて言い直す。

「社長、今宮戎の福娘って、知ってます？」

「もちろん。大阪人なんだから」

「それに受かった仲間なんです」

「へえ、すごいじゃないか」

浪速区今宮にある恵比寿神社の福娘は、巫女の装束を来て笹を売る。そのオーデিশョンは毎年大変な人気で、競争率が高い。

「生駒さん。その節はお世話になりました」

瑠奈が改まって頭を下げた。

「は？」

「インタビューの場所、梅田のパパタッチでしたでしょう？」

「そうですか」

「そのイタリア料理店を経営しております。生駒さんのお見えになった日は、ちょうど混み合っておりまして、同席はさせていただけませんでした。が、こちららとお顔は拝見しておりました」

「ああ、そうだったんですか。そういう芳川さんは知人がやっている店だとおっしゃってましたね」

「はい。オーナーといっても、お金のことなどは人に任せておりまして、私はウェイトレスの真似事みたいなことをしております。常々、従業員から、邪魔になると叱られております」

「いや、そんなことは。あの、お、お料理、とてもおいしかったで

すよ」

こういう謙遜を初対面の、しかも飛び切りの美人にされたとき、生駒はうまい受け応えの仕方を知らない。

「あ、ルナ。もう結婚したん？」

「フフ。違うのよ。わ・た・しのお店」

「へえ！　すごいやん！」

立成の号令が掛かって、来客たちはリビングに戻った。出席者の紹介が始まるのだ。

7 だんじり囃子

自分の番は最後の方だと、生駒は料理に取り掛かった。テーブルに置かれてあるメニューによれば、いずれも有名な老舗から取り寄せたものらしい。だが、そんなことに関心のない生駒には知らない店の名ばかり。

立成が汗で頭頂部をてからせながら、インタビューを受けた人を手際よく紹介していく。芳川と共同で紹介原稿を作ったのだろう。

インタビュー一番手だった瀬謡佐知子の次が伊知馨で、会場の隅で手を上げて会釈した。

必ずしも全員がカップルで来ているわけではないようだが、伊知は中性的な若者を伴っていた。

珍しいな、あの年頃の息子を連れてくるのは。生駒はそんなことを思いながら、パパラッチのピザミラノ風という少し笑える料理に取り掛かった。

立成の小気味良い紹介が進んでいく。

改めて見渡してみると、さすがに子供はいないが、職業も年齢も性別も見事にばらばらだ。

最も目立っていたのはカナダからの留学生。彼女は紹介されると、後で自分のフルート演奏を聴いて欲しいといって、客の拍手を取った。

生駒の見知った顔といえば、主催者である芳川、二番手の伊知、生駒を芳川に紹介した金谷、立成、そしてインタビューに同席していた松任歩美、これだけだった。

「十七番目の方をご紹介します」
金谷謙吾が手を挙げた。

トレードマークの長い髪を揺らし、眉間の深い皺を少し開く。

「お題は潮騒でしたね。なかなかのロマンチストでいらっしやいます。ご職業はイベントプロデューサー。広告代理店やプロダクションにはお勤めにならず、フリーでご活躍中です」

金谷はダボダボの白いジャケットを羽織っているが、中は生駒と同じように黒っぽいカットソー。

銀縁メガネの顔にはわずかに朱が差している。職業に似合わず緊張屋なのだ。目が合うと、いつものようににはにかんだ笑顔を見せた。まだ手を上げている。

「あ、金谷さん、もうお手、結構ですよ。えー、彼は心の優しいお方でして、毎週金曜日の夜は老人ホームでボランティアをしておられるとか。お得意の絵の才能を活かしてお年寄りの似顔絵を描いて差し上げるんですよ。ご出身は神戸市。今日はおひとりでのご参加です」

実は立成と金谷は見知らぬ仲ではない。

というより、十年ほど前に生駒を立成に紹介したのが金谷なのだ。ただ、ある物件で立成を激怒させることを金谷がしでかしてからというもの、ふたりの関係は冷めたものになっている。十七番目に金谷が登場したときには、立成はブログの立案者のひとりとして大いに驚いたことだろう。

金谷にしても生駒と同様、このブログインタビューに立成が関わっているとは思ってもみなかったはずだ。

生駒はふたりの関係を知っていながら立成にバトンタッチしたのだが、そのときは、ふたりが顔を付き合わせることになるこんなパーティーが開かれようとは思ってもみなかったのだった。

「金谷さんが芳川先生にご紹介されたのは、建築家の先生、生駒延治さんです！」

と、立成が声を張り上げた。おい、ことさらに持ち上げなくてもいいぞ。

金谷からこのブログのインタビューを受けてくれないかという話を聞いたとき、さすがに面倒な気分がしたものだ。

金持ちが自分の立場を活かして自由に人を紹介してもらい、食事は持つというものの、タダで人の話を聞こうというのだから厚かましい企画だ。

自分は他人から紹介して欲しい人物である、と自ら主張しているようで、なんと生意気な人物だと思ったのだった。

しかし金谷は、芳川はおもしろい人物だし、商売抜きでも付き合いあっておいて損はないと勧めた。

ある人から立成さんを紹介してはどうかとも言われたのだが、まずは生駒さんと思い、ともいった。

そこまで言われて生駒は了解したのだったが、もうひとつ、その気にさせた理由がある。

芳川が書いたブログの文章である。

洗練されているとはいえないまでも、インタビューを受けた人それぞれの、「音」への思い入れが素直に表現されているようだった。芳川なりの解釈がこれ見よがしに付け加えられているようでもなく、肩肘を張ったところもない。記録者としての立場を貫いているところに好感を持ったからだった。

会ってみると、芳川は金を持った成功者にありがちな「主張」の強い男ではなかった。

今も芳川は微笑みながら、司会者である立成の脇に立ちつくし、参加してくれた客のために笑みを絶やさず、紹介されるたびに大きな体を折り曲げて丁寧な頭を下げている。

そして結果としてではあるが、芳川に対する生駒のそんなかすかな敵意は、完全に消えてしまっていた。

須磨のマンションプロジェクトの件である。

芳川が立成に生駒を推薦してくれたわけではないが、芳川の物件は生駒に、という立成なりの配慮であることは間違いなかった。

「……というわけで、生駒先生には常日頃から大きな尊敬を寄せているわけでして、今回のプロジェクトでも……」

なんだ。結局は須磨のマンションのアピールをするために、自分をダシにしているぞ。

立成は十九番目として自己紹介をし、「では最後の方を」と、二十番目の松任歩美の紹介を始めた。

「芳川さんからはとても優秀な女性だと伺っております。それは私のインタビューにご同席してくださったときにも強く感じました。ご趣味も絵画、陶芸、外国文学の翻訳などなど幅広くていらつしやいます。松任さんが翻訳されたイギリスの童話が出版され、ご本名で本屋に並んでおります。えー、なんだか仲人の口上のようになってますでしたね。あ、そうそう。ピアノの調律もされて……」

立成は松任をべた褒めだ。

この女性は、インタビューのときに始めて顔を合わせて以来、それ以降の芳川との会食にも同席している。

税理士資格を持ち、自らの顧問先も持っているが、芳川の秘書的な役割もこなしているという。

今日ただひとりの和服姿だが、黒に近い藍色の地に鮮やかな緑色のクローバーの総模様、そこに朱色の帯という大胆な着物。抜群な色合わせのセンスだ。

生駒の隣に立っていた客が、その着物を見て「格好いいな」と、連れの女性を小突いた。今夜のクール度ナンバーワンの美人だ。さほど若くはないが、ぴったりの黒いドレスが美しいボディラインを強調している。松任とは違った意味で目立っている。

松任が芯の強さの存在感なら、こちらはパワーで勝負。場のヒロイン役を取り合うライバルといったところだ。もう少し若者らしいグループでは優と瑠奈がかわいらしさを競っているが、こちらのふたりは大人の艶を競っている。

優が松任を見つめている。きつとこちらが本日のウィナーなのだろう。

そんな視線に晒されながら、松任が会場の下手で、かしこまっていた。立成からの紹介が終わると、ひと言付け加えた。

「今日は芳川の秘書として皆様のサービスを勤めさせていただきましますので、何なりとお申し付けください」と、頭を下げた。拍手がおきた。

「では皆さん、もう一度盛大な拍手を」

立成が声を張り上げる。リビングに乾いた音が響いた。生駒も手を叩き、そして拍手を受けたことに対して軽く頭を下げた。松任がオーディオのスイッチを入れた。ギター演奏のラテンナンバーが流れ出した。

—————0602 芳川ブログ1

ブログデビューである。

人に勧められて始めるわけだが、いつまで続くことになるやら……。私の日常を書きなぐったものなぞ、なんら価値はないので、テーマを絞って様々な人にインタビューするシリーズ物としてスタートすることにした。

テーマは「音」。
好きな音、気になる音、思い出の音。

お聞きする相手は、これぞと思う人を順にご紹介していただくリリース方式。

条件は実名でここに掲載されることをご了解いただける方、というだけ。

これからどんな人とお近づきになれ、どんなに広がりのあるお話を聞かせていただけるのか、楽しみで仕方がない。

私自身にも条件を課した。

お聞きした内容をできるだけそのままのニュアンスで書き記すということである。私のつたない感想やコメントなどを付け加えないということだ。

目標としては月一回のペースを目指すことにする。

さて、その第一号として、おでん屋のママ、瀬謡佐知子さんにお話を伺った。

大阪の天神祭りで有名な天満宮の近くにある、「すみよし」というなかなか素敵な店の女将である。

彼女が選んだ音は「だんじり囃子」。

関西の大学に進学してから大阪に住むようになり、そのまま居ついてしまったのですが、いろいろと刺激的なものを見聞きすることができました。

大阪の人にとっては普通のこと、いつも眼にしていることであっても、関東育ちの私には驚くようなことが多かったのです。

そのうちのひとつを、音で表現すると「だんじり囃子」ということ

になります。

もう、二十年以上前のことです。ある夏の日、知人から大阪市内の平野という町にある杭全神社の祭りに行こうと誘われました。

そのお祭りには本当にびっくりしました。その勇壮たるや。

だんじり祭りといえば岸和田が有名で、新聞にも写真入で報道されていますので、だんじりがどういうものかは知っていましたが、しかし、実際にそれを間近で見るのと写真で見るとでは大きな違いがありました。

それは音。だんじり囃子。

コンコンチキチンという鐘と太鼓の音。

そして青年たちの掛け声。観客の歓声。

そういったものが夜の神社の境内にこだましていました。

もうもうと立ち上がる砂埃、とうもろこしや焼き鳥などを焼く香り。リング餡の甘い匂い。

それらが充満した空気を、だんじり囃子が震わせていました。

私は感じました。ああ、これはかなわなくなって。

ものすごい盛り上がりなのです。

観光化されているわけでもなく、人に見せるわけでもなく、純粹に自分たちの祭りとして一心に楽しんでいるのです。

平野で生まれ育った人は自らだんじりを担ぎ、この音を聞き、歓声をあげて大人になってきたんだ。これは平野の人たち自身の祭りなんだと。

聞きかじりを少しご紹介しますと、杭全神社というのはスサノオノ

ミコトを主神とする神社で、創建は室町時代とされています。平野の町はかつて河内地方の産物であった木綿の集積所として栄えた街らしく、こういった祭にも町衆の経済的あるいは文化的な力が現れているそうです。毎年七月にこのお祭はあるのですが、十三日の宮入りの日には九つの各町内が代々守り受け継いできただんじりを、その勇を競いあうように神社に奉納するわけです。

いざ祭りとなれば、各町内の競争意識はすごいものがあるそうです。夜の七時ごろから深夜に掛けて順番に宮入りを行うわけですが、最大の見せ場、一の鳥居の手前、国道二十五号線を越える交差点でのパフォーマンスでは、それぞれの町内の心意気と言いますか、祭りにかける意気込みがこぞと発揮されます。

昼間はだんじりに綱をつけて子供たちが曳いて町内を練り歩いているのですが、夜の宮入りでは綱をはずしてだんじりの動きを軽やかにして暴れまわるのです。

あの音。体が震えるような感動。

余所者の私がそう思うくらいですから、地元の人にはどんな音に聞こえているのでしょうか。

私がかかわらないなと思ったのは、そういうことです。

私が大阪に住み始め、そろそろ大阪人、地元民になったかなと思つたときに連れて行ったもつたものですから、そんな甘い考えは吹き飛ばされてしまいました。

郷土愛なんて抽象的であまい言葉ではなく、まさしく平野の人にとってはこれこそが原風景なのですね。血の中にだんじり囃子が流れているともいえるでしょうか。

それがない私はハンデキャップを背負っている。

もつとがんばらなくては。一所懸命働こうと。

そんな気分にさせられました。

付け加えておきます。

音もそうですが、あの臭いも印象的でした。

宮入りが終わっただんじりに触らせていただいたのですが、あたりに木と油の匂いが漂っているのです。

だんじりを担いでいる人はこの臭いの中で汗にまみれているのですね。

ああ、この圧倒的な質感。

私にとってだんじり囃子は大阪で生きていく力となってくれました。大げさな言い方をすれば、頑張るためのきっかけといますか、エールといますか、そういうものなのです。

女性の私がだんじり囃子という音を選んだことはおかしいですか？

8 酒コレクションと螺旋階段

パーティーは芳川のウィットに富んだ挨拶やカナダ、人留學生のフルート演奏などを交えながら順調に進んでいった。

ひととおり料理を口に入れたところになると、多くのものがグラス片手にテラスに出たり、ゲストハウスの見学に繰り出したりしていた。

「その節はどうも」と松任は、生駒に近づいていった。

今日はこの着物のせいで、自分が移動する方にいくつもの目が動くのが分かる。

コンパニオン役を買って出たのだが、さすがにこの着物は派手過ぎたかもしれない。松任はなんとなく恥ずかしく、動き回っていないと肩が凝りそうだった。

「こちらの方は？」

「三条といいます。うちのスタッフです」

生駒がパパラッチでのインタビューのときと同じように、ゆっくりと渋い声を出した。

声をかけるのは誰でもよかったのだが、生駒が連れているこの娘が自分の着物を好意的な目で見つめてくれたことがうれしかった。

「どうぞよろしく」

松任はゲストハウスを案内しようと申し出た。

たちまち、「あこがれるわあ」と三条がため息をついた。リビングのすぐ横、アーチ型の開口部の奥にある独立したキッチンだ。

この家は自分のものではないが、松任は誇らしかった。キッチンのリニユールは、あなたの方が使う機会が多いでしょう。

う、と芳川夫人から任されたものだったからだ。

中央には大きな調理台。すでにデザートや果物が盛り付けてある。システムキッチンの天板は乳白色の大理石。システム全体がイタリアからの輸入品。

正面にはカウンターのある大きな窓があり、テラスが一望できる。

「外に向かってオープンなんですね。テラスでパーティをすることも想定していたのかなっ」

三条がうきうきした声で、生駒と話している。

「台風が恨めしいですね」

「ゲストハウスの管理はどうされているんですか？」

生駒からの質問だ。

現実的なことを聞いてくる。彼は建築家だ。間取りやインテリアの説明はしないでおこう。

「うわ！」と三条が小さく叫んだ。キッチンの付属室の棚には、食材や贈答品がぎっしり詰まっていた。

「厚かましく覗くなよ」と、たしなめる生駒。

「はい。じゃ、次、行こう！」

三条は自分より年齢は下のようなが、からっとした性格のようであらやましい。

すらりとした長身に、短めにカットしたストレートヘア。つややかな黒い髪がまぶしいくらいにおしゃれ。

白いブラウスの下に、たまご色のシャツ。ウコン色のパンツに白いパンプス。全体としてとてもさわやかだ。

生駒の方はいえ、髪を後ろに撫でつけているが、薄くなった頭頂部が目につく。

顎の下に溜めた肉はまだそれほど多くはないが、明らかに中年太り。エラの張った大きな顔は我が強そうだ。そしていつものように墨色一色。

「立派なものだね」「うわ、すごい！」などといいながら、ふたりは見るからに仲がよさそうだ。

芳川と自分も、周りからそう思われているのだろうか。

まずは下の階を順に見ていく。どの部屋も普通のマンションに比べてふたまわりほど広い。

「あ、こんなところも開放してあるんだ」

「どうぞ。主寝室です」

キングサイズのベッドが二本並んでいるが、狭苦しさは感じない。専用のトイレと浴室を持ち、ドレスルームも付属している。

芳川はここで休んだことは何度もあるようだが、夫人はどうだろう。

まさかと思うが、あの女は……。今日、みんなの前で恥をかけばいい……。

松任は、思わず浮かんだ暗い感情をあわてて消し去って、「ミニバーも設えられているんですよ」と、サイドボード脇の隠し扉を開いてみせた。

ふとサイドボードの上に置かれた紙片に目がとまった。

松任は紙片に印字された短い文章を目で追った。

「インタビューブログにはミラーサイトがあります。こちらの方もぜひ」

紙片には、そう記されてあった。
ん？ それは聞いていないが……。

それにしても、芳川はなぜこんな部屋にメッセージを残しておくという、安手のミステリーのような仕掛けをしたのだろうか。ミラーサイトがあるのなら、彼ならもっとスマートに直接的なアピールをするはずだが……。

「へえ。ムードも満点」

三条がスイッチを捻っている。

壁の間接照明が濃くなり薄くなり、淡い光を天井に広げた。

「はい。じゃ、反対側に参りましょうか」

松任はミラーサイトの紙片をそのままにして部屋を出た。

「あ、離れですね」と、三条が目を輝かせた。

パーティのメイン会場であるリビングを通り抜け、低い天井の渡り廊下を通っていく。南側のテラスと北側の屋上庭園の結節点にあたる廊下だ。

「ここはなんの部屋だろ」

まず三条が足を踏み入れた。

リビングに次いで広い空間である。一部は二層分の吹き抜け。巨大な開口部に厚いカーテン。

芳川と金谷ら数名の客が談笑していた。

「サブリビングです。私はバーと呼んでいます」

芳川が解説してくれた。

確かにバーに見えなくもない。床は真っ黒なカーペット敷きでゆったりとしたソファは落ち着いた赤。ブラケットのほのかな明かりが壁のリトグラフを照らしている。

部屋の中央にはランドピアノ。今夜は蓋が開けられていた。

「私は無趣味でしてね。これといったものがないので」
芳川が照れたようにいう。

「世界中の安い酒を持って帰ることだけが趣味、といえるようなものでして」

「へえ。なるほど」

そう応えて、生駒がボトルシエルフに近づいていった。色とりどりのボトルがぎっしり収納されている。

「おいしいかどうかというより、安いからとか、ボトルのデザインやラベルがきれいだからとか、まあ、そんなにいい加減な基準で選んだものです。いかがです？ 生駒さん、少しお飲みになりませんか。どれでもお好きなものを。今、私の一番のお奨めは」

芳川が手に持っていたボトルを生駒に見せようとした。

「そんな大切なものを、とてもとても」と、生駒は尻込みする。

「トンとお酒の味がわからないもので。もったいないです」

感想を求められては困ると思ったのか、あまり酒に強くないからなのか、生駒はそう弁解してボトルシエルフから視線をはずし、空間を眺め始めた。

「建築家として見た場合、どうですか？ この家は」

金谷が生駒に声をかけた。

家の主人を前にしてその問いはないだろう。しかし、芳川は微笑んで、生駒の言葉を待っている。

「ちょっと見ただけの専門家の意見より、住まい手の満足感の方が大切です。でも、強いていうなら、丁寧を考えられた間取りだと思いますね。要所が締まっています」

などと、生駒はそつのない言い方をした。

金谷が感心する。

「なるほど、そういう見方をするんですね。僕なんか、あ、この壁

紙はきれいだなとか、豪華な大理石を使っているなとか、パーツごとに、自分の好き嫌いに照らし合わせた感想しかありませんでしたよ」

「建築を考える側ならではの意見ですね」

芳川も幾分ほっとしたような反応だ。

「でも、生駒さんのセンスでいうと、どうです？」

金谷はしつこい。

少し酔っているようだ。

建築家は少し困った顔をしたが、芳川を前にして、しつかり応えなくてはいけないと思ったのだろう。

「全体として、表面的な豪華さを抑えたという印象ですね。つまり、いい材料をここぞというところにうまく使っているけれども、ことさらにそれを見せびらかさず、ということですね。ジャパネスクテイストも盛り込みながらモダンな感じ。少しドライすぎるかなとは思いますが、靴のままというスタイルがそう感じさせるのかもしれませんが。平たくいえばアットホームな感じがあまりしない。迎賓館という用途なので、それがいいでしょう」

「お褒めいただいたということですね。ありがとうございます」

芳川は微笑んで、金谷には「こっちはいかがです？」と、さらに酒を勧めた。

「まあ、壮観ね」

女性の三人組がバーに入ってきた。

瀬謡佐知子とその娘、出席者リストによれば美咲と記されていた。た。

そして私の母……。

瀬謡は地味なデザインのピンクのワンピース。美咲はベージュ色のスーツ。と、この親子は落ちついた服装だが、母はひまわりの花

柄が大きく描かれた真つ青なシャツに白いパンツ姿。髪には大きくウェーブするパーマをあて、化粧も濃く、ネックレスが目立っている。精一杯おしゃれをしてきた賞を出すとすれば、この人が金賞を獲得するだろうが、趣味がいいとは言えない。

「そのお着物、とても素敵ですね」

瀬謡が声をかけてきた。

「ありがとうございます」

「近頃はこういう柄もあるんですね」

レンタルですなどと謙遜しては、せつかく褒めていただいた人に悪い。

「いいよねえ。こういうのが着れて、しかも似合う方は。ね、馨」

瀬謡が母に同意を求めた。

「ええ。とてもいいセンス」

ここにいる人は誰も、私たちが親子だということを知らない。

ただ、隠さなくてはならない理由などはない。

それに、たとえ私が親不孝者だったとしても、ここ数年間はまともにもきいていないとしても、それは元通りになるきっかけが掴めないでいるだけのことだ。

母はどう思っているのだろう。

目が笑っている。

でも、今ここで私を娘だと公表する気はないらしい。

背後で芳川が生駒と話をしていた。

「生駒さんとお近づきになるのがもう少し早ければ、ここの内装のやりかえをお願いできましたのに。残念です」

母の視線が私から離れ、生駒に移っていった。少し寂しそうに見えたのは気のせいだろうか。

今日、ふたりきりになったときに……。

「私も残念です。ですが、関守町のご実家のプロジェクトに参加させていただいて、ありがとうございます」

「いやあ、あれは立成さんのお仕事であって、私が口を挟むものではありません。でも、私としても、生駒さんが関わってくださって本当に良かったと思っています。次回の打ち合わせ、楽しみにしていますよ」

金谷の酔った目が好奇心に輝き、

「関守町というのは須磨区のこと？」と割って入った。

「そう。先日話してた物件」

「ふうん、そうだったのか。芳川さんのご実家だったのか」

「言わなかったかな？」

母が話に加わった。

「物件の用途はなんですか？ もし、店舗もあるようでしたら」

営業トークだ。身を乗り出している。

「伊知さんの出番はないな。十数戸の賃貸マンションだから」

生駒が母を押し留めるようにいった。

口ぶりからすれば、生駒は金谷だけでなく、母とも親しい仲なのかもしれない。

「モデルルームの家具とか、あるんじゃない？ ね、芳川先生、私の実家も神戸でして。垂水なんですよ」

「ええ。存じますよ」

そう。母はインタビューのときにそう話した筈だ。ブログに書かれてある。

営業活動のつもりで、芳川との接点をなんとか探そうとしているのだ。

ただ、あの物件に関して営業するなら、相手は立成だ。紹介してあげようか、と松任は思った。

「じゃ、私たちは二階を拝見させていただきます」と、生駒が出て行くこうとする。母に巻き込まれる前に退散、ということだろう。

「こちらからもいけますよ」

松任は、部屋の奥に生駒と三条を案内した。

「ミラーサイトも持っておられるんですね」

後ろから母の声がする。

知っていたのだ。あのメモを見たのかもしれない。

生駒が振り返る。金谷も芳川に目を向ける。

彼らも明らかに知っていたようだ。

バーの隅のバーチカルブラインドを引いた。

「いつもは隠してあるんですよ」

芳川の言葉と共に、螺旋階段が現れた。

青い塗装の鉄パイプの塔。

インテリアデザイナーは黒いカーペットに白い壁というモノトーンな空間に、この青色で変化をつけようとしたのだろう。間延びした印象になりがちなかき抜け空間を引き締めていた。

「う、怖わ」

三条が階段に足をかけてつぶやいた。段板がガラスでできている。

芳川はミラーサイトのことに關しては、なにも口にしなかった。

また、だれもそれ以上、聞こうとはしなかった。

まずは探してみてください、という芳川の意図だと判断したのだろう。松任はそう感じた。

螺旋階段を登っていった生駒は、と見ると、登りきったところで吹き抜け空間を見回している。

目が合い、会釈してくる。案内をありがとう。

松任は三人組と金谷の相手をすることにした。

芳川は母の営業トークをかわして、酒のコレクションの説明を始めている。三人はめいめい棚のボトルを何本か手にとって見ていたが、相手が女性だからか、芳川は酒を勧めようとはしなかった。

母が他の客と談笑し始めた。

エンジン音という母のブログの話題から始まって、車談義になっ
ていく。

「車っていいのはいいですね」などと、言っているうちはよかったが、しまいには事故歴自慢のような話になった。

9 エンジン音と秘書

————0620 芳川ブログ2

このブログに名前をつけることにした。

題して「インタビューブログ」。

知人は「人の輪ブログ」はどうだというが、次々とご紹介いただくというご迷惑な手法がどれほど、続くのか分からないので、一応インタビューブログという名称でいこう。

さて、お二人目。

伊知馨さん。

再び素敵な女性。

店舗などのディスプレイを業とされている。前回の瀬謡さんのご紹介である。

題して「エンジン音」

月並みだと思われるかもしれませんが、憧れはやはりハーレーダビッドソン。

子供のときに叔父がその単車を所有しておりまして、一度後ろに乗せてもらってから、はまりました。

学生時代はツーリングサークルに入りまして、日本全国を回ることを夢にしていたものです。

残念ながらバイクでそれを実現することはありませんでしたが、大人になってから車ではほぼ半年かけて実現しました。もちろん大阪から数泊で、今日は東北方面、今回は九州方面と出かけましてね。一応、県庁所在地をすべてクリアするという目標で。

音というテーマでしたのでエンジン音ということにしましたが、私は単車に乗ることが好きだということなのです。

さすがにこの歳になって、あれに跨るというのも違和感がありますし、体の敏捷性も落ちているので危ないということもあり、今はもっぱら自動車です。それでも単車に乗って走り回っていた頃のことには忘れられません。

単車の良さは、なんといってもあのレスポンスでしょう。

そしてあの爽快感。風。

あ、お題を風切音にすればよかったかな。

単車って、あの小さな機械で、よくぞあれほどのパワーが出るものだと思いいませんか。

怖いくらいの「力」が、一気に噴出するとも言いましょうか。

見方を変えれば、どんな機械も本体部分は小さなものであって、そのカバーがかさ高いのだといえますが、単車はその本体部分、つまりエンジンがむき出しなんです。

機械そのものに乗っている感じ。

一歩間違えば大怪我をするし、結果として人に怪我をさせることもあるわけですが、その恐怖さえも一種の快感といえるかもしれせん。

エンジン音はその快感の象徴のようなものだと思うのです。

実は、エンジン音だけではありません。

タイヤが軋む音もそうですし、止まったときにタンクのカソリンが揺れて、タポントポーンというんですよ。自分の胸のすぐ下で。

これが生きた機械を感じるといえるのかな、その機械を自在に操っている自分を見つめるというのかな、そこが快感なのです。

ところで、なぜ単車っていうか、ご存知ですか。
一気筒だから単車、です。

大学時代にそう習ったんですけど、違つかしら。

昔はほとんどが一気筒でしたが、どんどん進化して、今は二気筒も
四気筒も普通にありますね。

私が大学時代に購入したのはヤマハのRD250という空冷二サイ
クル並列二気筒のバイクでした。

RDというのはヤマハが二、三十年にもわたって出し続けたシリ
ーズですが、今は、もう伝説ともいえるバイクです。

あ、そうそう。

先日、大学の同窓会があつて、ツーリングサークルの仲間からおも
しろい話を聞きました。

なんと、今でもそのヤマハのRDに乗っている人たちの集まり、つ
まり同好の士の集まりがあるそうなのです。

たぶん、オンボロに鞭打つように跨って、白煙を吐きながらプスプ
ストロトロ走っているのかなと思うと、なんともいえず懐かしく思
います。

きっと、思い出をたくさんお持ちの壮年の方々が楽しまれているの
でしょう。

私もバイクを続けておれば、仲間に入れてもらっていたかもしれま
せん。

「格好いいやん。吹き抜けにガラスの螺旋階段。世界のお酒のコレ
クション」

生駒は、ため息交じりの優の感想に微笑んだ。

階段を上がったところは、またひとつのミニラウンジになってい
た。

「さすが、ゲストハウスだね」
「ほんと、驚くことだらけ」

ラウンジには、ゲスト用のガラス張りの浴室があった。

「ひゃ〜」と、優がまたしても素っ頓狂な声をあげた。

浴室のガラスに鼻を擦りつけている。

内に吊り下げられたブラインドは引き上げられ、ガラスについた水滴の間から浴室の中の様子が見えた。

「ステキ！」

ジャグジーバスに湯が張られ、盛大に泡立っていた。

「入ってみよ」

「え、今？」

「アホ。見にいつてみるんやろ」

真っ白なパウダールームを通り過ぎ、浴室に入ってみて、またもや驚いた。

浴室続きにデッキが張り出しており、そこにさらに大きなジャグジーバスが据えられていたのだ。

「うおおっ、露天風呂！」

ここからも湯気が立ちのぼっている。と、

「わわっ、すみません」

すでにふたりの男性客が浸かっていた。優は後ずさり。しかし出てくるなり、

「プールは止め。お風呂に入ろう！」

「本気かよ」

「ルナの水着を借りるから平気！」と、早速、備え付けのシャンプーなどを点検し始める。

生駒は渡り廊下に足を向けた。

空中を歩く印象。二階建ての渡り廊下だ。

「さ、母屋の二階を見て回るぞ」

こちらのブロックは客が泊まる寝室なのだろう。小ぶりな部屋にひとつずつベッドが置かれてあった。

それにしても金谷は相変わらずだ。

飲み癖の悪いのは今に始まったことではないが、世界中の地酒コレクションなんて、ぴったりの居場所を用意してやったようなものだ。

クライアントとの打ち合わせに、平気で無精ひげを生やしたままで出席するような男だ。

いってみれば無頼漢ということになるが、少し崩れすぎている印象が自分の仕事の量も幅も狭めていることに気がついていない。

飲み過ぎなければいいが。

「ねえねえ、ミラーサイトがあるって、ノブ、知ってた？」

優はゲストルームのベッドに腰掛けて、枕なぞを点検している。

「いや」

「松任さんも知らなかったみたいね」

「ん？」

「びつくりした顔してた。秘書なのにね」

「プライベートなブログだからじゃないか？」

「でも、インタビューに同席してるんでしょ。ただならぬ仲とか」

「また、勝手な想像を。おい、寝転ぶな」

「キャリアアウーマンかあ。……死語かな」

「賢い人ではあるな。おい、起きろ」

松任は女性にしては上背があり、痩せぎす。好みの問題かもしれないが、性格がきついという印象を受ける。

ただ、立成も言ったように聡明であることは確かだ。

インタビューのとき、松任歩美はどんなことでも期待以上の成果を挙げてくれると、芳川は最大限の賛辞をつけて紹介してくれたものだ。

頭の回転も口の回転も早い人の中には、相槌を打ちつつ人の話を横取りするものがあるが、松任は相手に気持ちよく話をさせる知識と知恵、そして技術を心得ていた。

「弱点もあるけどね」

「へえ、なに？」

生駒のインタビューの日、紹介者として同席していた金谷が、伊知のエンジン音のお題を引き合いに出して、自分も車が好きだという話を始めたときのこと。

事故を起こしておきながら被害者の身になったことさえない人が、意味もないそんな自慢話をしたがるものだ、と松任はビシリと切り捨てたのだ。

「ちょっと唐突な反応だった」

「ふうん」

「松任さんは高校生のとき交通事故にあって、ピアニストになる夢を捨てたんだ。そう、芳川さんは庇っていた」

「ふうん」

「以来、松任さんは、自分はもちろん、夫も運転のできない男を選んだらしい」

「それって、弱点っていうのん？」

「冷静でいられなくなるってのも、弱点だろ」

と、「うわ」と、小さな叫び声を上げて、優が飛び上がった。

入ってきた男女も、優の格好を見て驚いたのだろ。戸口のところでピタリと足を止めた。

しかし律儀なことに、そのまま立ち去っては失礼だと思ったのか、

なにこともなかったかのように部屋に入ってきて、笑顔を向けてきた。

「あの、私、丸山と申します。九番目にインタビューを受けたものです。ご挨拶をさせていただきます」

男が名刺を差し出してくる。

丸山徹。コンビニエンスストアの経営者だという。

生駒と同じような年齢だが、茶髪にマッシュルームカット。

例の、強烈な存在感を発散している黒ドレスの美人を伴っていた妻の様子だという。年齢が少し離れているだけでなく、なんとなく不釣り合いな感じがしないでもない。

丸山は、生駒が一瞬抱いたそんな印象にはお構いなしに、白い顔をほころばせた。

「この住宅は、なかなかのもですね」

10 回想…海の家

当たり障りのない話題だった。

しかし、なかなか、どうだというのだ。

生駒は丸山の言葉の続きを待ったが、相手も反応を待っているのだろう。子供っぽく光る眼をこちらに向けて黙っている。ドレスの美女が夫の腕にしがみつき、これまた生駒を見つめている。

それなりのことを言わないと釈放してもらえそうにないが、ここで彼ら相手に、建築家としての芳川邸の批評を聞かせるわけにはいかない。それに優の醜態を見られたからには、早々に退散したい。

よく練られたプランですね、とかわして、ではまた、というように会釈したのだが、丸山は離してくれない。

「僕は専門家ではありませんので、ピントがずれているかもしれませんが、ここは抑制の効いた冒険心というのかな、設計者のそんな意思を感じますね。しかし一般人の僕には、やはりこれ見よがしのように映る部分が……」

と、辛口の持論を展開し始めた。

初対面だというのに、自分の意見をずばりと人にぶつけてくる人物はあまりいない。

生駒はダンマリ派よりこの方が好きだが、こと建築や設計に関しては勘弁願いたいと思っていた。

自分の専門分野であり、口下手な自分が安易な気持ちで表現した言葉が、相手にどのように受けとられるか、自信がなかったからである。

ピアノの音が響いてきた。

それを機にようやく丸山の熱弁は収まり、揃って階下に降り、生

駒は再びバーに、丸山たちはテラスに向かつていった。

なんと驚いたことに、立成がピアノを弾いていた。腕に自信があるのだろう。音に釣られて三々五々集まってきた客を前にしても物怖じするところがない。

もちろん暗譜。

太い指の動きは滑らかで、日ごろから弾き慣れている様子。

芳川も、会が盛り上がってご満悦の表情だ。

曲目はショパンの別れの曲。

立成は呟くように歌っている。

「さよなら、貴方に出会えてうれしかった」

「へえ、この曲、こんな詩なんかついてたん？」

生駒はもちろん、優も知らなかったらしい。

「これね、映画の主題歌なんです。大林信彦監督のさびしんぼうという映画。主演女優が歌ってたんですって」

説明してくれたのは瀬謡佐知子だ。

「うちの店でも、酔うと、すぐあれをやりたがるんだから」

「カラオケ？」

「いえ、カラオケはないんですよ。ふふ、はた迷惑なのにねえ」

このおでん屋のママは、そんなふうに言いながら、実は嫌いではないのだ。立成にあわせて小声で口ずさんでいる。

「おかげであたしまで覚えてしまいましたよ」

次に立成が引き始めたのは「渚に残した足跡」。

かつて3人組のアイドルが歌って大ブームとなった曲だが、リバイバルで再びヒットしている。ちよつと懐メロ風の歌詞が、今の若者たちに受けているらしい。

立成の指がピアノの鍵盤をリズムカルに叩いている。

懐かしいメロディー。

生駒の胸に、夏の砂浜の情景が浮かんだ。

そろそろジャグジーが気になるのか、優が螺旋階段にちらちらと眼をやっている。

もちろん生駒にそんな気はない。

「テラスに出てみよう」

デッキエアに、丸山夫婦が座っていた。

芳川が金谷を伴って、プールサイドを一回りしている。

残念ながらプールに入っているものはいない。

丸山が立ち上がって頭を下げてくる。生駒はやり過ぎそうとしたが声を掛けられてしまった。

「雨、なんとかもっているみたいですね」

金谷が驚いたように振り返った。こわばった表情をしていた。飲み過ぎたにしては、顔が陰しい。

この男は、いわゆる愚痴上戸だ。目尻に笑い皺を作りながら、ありとあらゆることをばやくのだ。

しかし今は少し様子が違う。

「ん？ 生駒さん、この人らと知り合いか？」

粘りつくような言葉を寄越してきた。

「さっき知り合った」

「ふん」

やれやれ、今日は怒り上戸に変身か。妙な酒でも飲んだんじゃないか？

生駒はプールサイドの手すりにもたれた。

傍らで芳川が水温を確かめるように手を水に浸したりしている。
ふとある光景が心に浮かんだ。

「プールかぁ。実は昔、海の家でアルバイトをしていたことがありましてね」

おかしなことに、今の芳川の姿が、昔毎日のように眼にした光景、海の家の大將が海に手をつけていた姿とダブって見えた。

明日、須磨の現場に行くという予定が、脳になんらかの作用をもたらしただのかもしれない。

生駒はついそれを口にしていた。

「須磨浦で。高校二年生のとき。かれこれ三十年ほど前」
過ぎ去っていく夏の思い出、というような軽い話題。

「へえ！」

その程度の話に、芳川ではなく、丸山が大きく反応した。

「奇遇だな！ 僕もそれ、したんですよ。須磨で。高一のとき」
今度は生駒が驚く番だった。

「え、じゃ、同じ夏かもしれない」

「生駒さんは、なんというところで働いていたんですか？ えつと僕は、うーん、忘れてしまったな。駅から西へ数件目のところで、少し大きめの店でした」

ますます驚いた。生駒もそのあたりだったのだ。

しかし生駒も、店の屋号は覚えていない。

「懐かしいなあ！」

顔も名前も覚えていないのだから、懐かしいと言われてもぴんときないが、なんとなくうれしい気分になるのは、それがいい思い出だからだろう。

丸山にとってもそうだったに違いない。

「安い給料でしたね」などと言いながら、しきりに店の名を思い出

そうとしている。

生駒も丸山という名を、かすかに残された記憶の引き出しの中に転がしてみた。

一九七五年、高校二年の夏、生駒は欲しかったドロップハンドルの自転車を購入する金を得るため、バイトをすることに決めていた。しかし当時は、現在のようにはなかったところでコンビニエンスストアやロードサイドレストランのバイトがあつたわけではない。親や知人のつてを頼ってバイト先を見つけなければならなかった時代だ。

生駒にとってラッキーだったのは、相談した叔父がそれならと、付き合いのある銀行員の紹介で海の家の子バイトの話を持ち込んでくれたことだ。

大阪市内に生まれ育つた生駒にとって、そのバイトは魅力的に映つた。

太陽溢れる海水浴場でのバイト。きっと楽しいことも多いに違いない。

何度も泊りがけで遊びに行ったことのある叔父の家に泊り込んで通えばいいという。

生駒は喜んでその話に飛びついたのだった。

一学期の終業式が終わるや否や、ボストンバッグに下着や着替えを詰め込んで須磨に向かった。

駅に着くと早速、コンコースのテラスに立って海岸を眺め渡した。

潮の香りを吸い込む。

頬を撫でる海の風。

痛いほどの光を放っている太陽。

止むことのない波の音。

子供たちの歓声。

はためく幟。

すでに百軒ほどの海の家が営業を始めていた。

どの店で働くことになるのかわからないが、どの店も活気があつて、今年の夏の最高の楽しみが目の前に用意されているような気がした。

須磨浦海岸はＪＲの線路沿いに数キロにわたって続いている。

海水浴客は、駅のコンコースのテラスから、さてどのあたりで泳ごうかと、まず浜を眺め渡す。

そして、階段を西へ下りるか東へ降りるか悩む。西へ降りれば、海水浴場の端部の比較的混雑の少ないところで楽しむことになるし、東に下りれば水族館に近い広い浜で遊ぶことになるのだ。

階段を西へ下りた客が、目の前の海の家呼び込みをやり過ごして、とりあえずは少し先まで行ってみようと歩き始める。

そのまま浜に出て、足を取られる砂の上を歩く人も多いが、それが嫌な人は、線路と海の家の上に設けられた幅一メートルほどの海岸管理用通路に行くことになる。

砂の上を歩くにしろ、歩道に行くにしろ、二軒目、三軒目とやり過ごし、もうどこでも一緒だなと思ひ始めるような位置に、その海の家はあった。

その日の夕方、叔父と紹介してくれた銀行員に連れられてコンクリート歩道を伝っていった。

最後まで粘って真つ赤に日焼けした海水浴客とすれ違いながら、その日の営業を終えようとしている海の家に向かった。

そのときの踊る気持ちの名残は、今も心の隅に残っている。

積み上げられた魚網。

フジツボがこびりついた赤い浮きの山。

漁船のものらしき錆びたさまざまな鉄の道具などが立てかけられていた。

それらを横目で見ながら、湿った緑色のマットを踏んで、薄暗くなりかけたその仮設の建物に足を踏み入れたのだった。

出迎えたのは、無愛想な角刈りの大きな男だった。

白いランニングシャツに腹巻。

受付カウンターの中でその日の売り上げを数えているのか、まともにも顔もあげずに銀行員に挨拶を返すと、生駒をちらりと見やった。大声で、

「千五百円だ。日曜は千八百円。雨の日は休み」

それだけ言うと、今度はすでに働き始めている他のバイト生の動きに眼をやり、女の子に土間を掃除しろ、箒はそこだ、と床下にあるごをしゃくる。

千五百円？

安いとは聞いていたが、一日働いてわずか千五百円とは。

しかし、ここまで来て、やっぱりやめだとはいえない。

叔父の顔が少し心配そうになった。

生駒が黙っていると、銀行員が念を押してきた。生駒君、それでどうだい。

間髪をいれずに海の家の大將。

「それ以上は出せんぞ」

生駒は、よろしくお願いします、と頭を下げた。

大將はフンと鼻を鳴らし、初めて顔をほころばせた。

「あいつを手伝ってやってくれ」

浜の方をあごでしゃくった。

見ると、暗くなりかけた砂浜で、何本ものパラソルを抱えてよろ

けている男がいた。

パラソルを畳んで小屋になおそうとしているところらしい。

生駒は叔父に、もう帰ってもらっていいと目で合図してから、砂浜に駆け出していった。

こうして生駒の海の家暮らしは始まった。

単調だが、おもしろく充実しているともいえた。

出勤は八時半。帰りは六時ごろ。

することといえば、朝一番に海の家や周辺の掃除、おでん鍋に火を入れること、パラソルを浜に立てること……。

それからの時間は終日、呼び込みや料金の受け取り、引き換えにプラスチックの籠を渡すこと、うどんや力キ氷の注文を取り、自分で作ってサービスすること。そして打ち水、浮き輪の空気入れ、など……。

指示されことはなく、気がついたことをやるというスタイル。

時には買い出しに行かされることもあるが、概ね自分で動いてゆるると時間が過ぎていく一日。

休憩時間などはない。昼食は適当に店にあるものを食べる……。

時には、朝早く誰もまだ来ない海で泳ぐこともあった。

水は冷たいが、鳥肌が立つというほどでもない。

大阪湾内ということで、透き通った水とはお世辞にもいえないが、それでも緑がかった海水を通してカレイやコチなどが泳いでいるのを見ることができた。

深いところだけきゅんと冷たい水の中で足を動かし、沖合から振り返ると、ずらりと並んだ海の家……。

背景には低い山々が緑の峰を連ねていた。

11 海の家とおでん

「ああ、なんだか潮の臭いがしません？ 海の家のことを思い出したからかな」

丸山が夢見るような口ぶりという。

ときどき、風向きによつては大阪市内でも海の匂いがすることがある。

台風前の、なんとなく不穏な空模様のテラスで過ごすひととき。

金谷が、へえー、須磨の海の家でバイトか、と言つて芳川に眼を向け、思わせぶりに笑つた。芳川は目をぱちくりさせ、話題に入る間合いを計っているようだ。

その間も、生駒の回想は続く。

雨の日の手持ち無沙汰なこと。朝から雨と決まっておれば休みなのだが、午後から雨が降ってきたような日には、客はどんどん帰つてしまい、バイトたちにはなにもすることがなくなってしまう。

そんな時は、雨に打たれてポツポツと穴が開いたように跡が残つていく浜の砂を眺めながら、のんびりとした気分で過ごすことになる。

丸太の柱にもたれ、物好きな連中が雨の中を泳ぐのを眺めながら佇むとき、自分は毎日ここで優雅なときを過ごしているという、一種の優越感さえ感じてしまうのだった。

「あの臭い。なんともいえませんでしたよね」

海の香りと漁具の臭い。

おでんやうどんダシの匂い。

そして浮き袋のビニールやゴムの臭いが入り混じり、なんともいえない海を家の臭いとなる。

砂と塩にまみれた日々。生まれて初めてノミに喰いつかれたのもあの海の家でのことだった。

「丸山さん、須磨駅の前に市場があつたでしょう。そこへ買い出しに行かされませんでした？」

「ええ、ええ、行きましたよ。おでん種とかを」

丸山がうれしそうに応える。

「あれって、今思うと変でしたよね。私のところはこういうわけかあの大きなおでん鍋そのものを持って買い出しに行かされたんですよ。行きはまだしも帰りなんて、重いなんのつて」

「そうそう、僕のところも。ダシはひたひただし、ジャガイモやらコンニャクやらがぎっしりで」

「あれを両手に抱えて須磨駅の階段を上り、改札口の前を通って、また階段を下りて海の家まで運ぶなんてね。砂が入るから途中で地面に置いて休憩するわけにもいかず。万一ひっくり返してもしたらと、冷や汗ものでした」

「僕もそうでした。本当に大変でしたねえ」

「腕力がない私にとっては、一種の試練でしたよ。いや、一人じゃなくて二人で行ったんだったかな」

「うーん」

「もう、あまり覚えてないけど」

「ひどい仕事でしたねえ。一度なんか、台風の後で屋根の上まで登らされました。めくれたトタンを張り直せって。おかげで僕は指を切ってしまいました。今なら、さしずめ労災ですよ」

ああ、そんなこともあった。

どこの海の家も台風の後には、傷んだところを直すので大忙しだった。台風が過ぎるや否や、大量の客が押し寄せてくるのだから。

「僕のところの大将は、本業は漁師だと言ってましたよ。ときには、エビやシャコなんかをもらったりしました」

エビをもらったときは驚いた。

まだ生きている十センチばかりのエビがぎつしり入ったビニール袋を、帰り際に持って帰れと渡されたのだ。

餌だ、余ったんだ、と大將はいう。

エビで鯛を釣るとはこういうことか、と実感したものだ。

そんなことを取りとめもなく話していると、

「蒸し暑い。そろそろ一気に降ってきそうな気配ですな」

と、立成がスキンヘッドをハンカチで拭いながらやってきた。

そこで生駒は気がついた。

金谷の姿は見え、芳川がひとり、後ろの手すりにもたれて丸山とのやり取りを聞いていた。

「すみません、芳川さん。つい昔話に夢中になってしまつて」と、無視し続けていたことを詫びた。

いえいえ、と芳川はやんわりと笑った。

「こちらはどんな盛り上がりでしたか？ 列車轟音？ 靴音？ おふたりともロマンチストらしからぬテーマですなあ」

立成は誰がインタビューでどんな話をしたのか、全員の分をそらんじている。

「よく覚えてますね。司会者は大変だ。ピアノも弾かなくちゃいけないし」と、生駒は茶化す。

丸山が勢い込んで説明した。

「生駒さんも僕も、須磨浦の海の家でアルバイトをしていた、という事で盛り上がってましてね。懐かしい話をいろいろと」

「ん？ 須磨の？」

「立成さんは須磨に海水浴に行かれたこと、あります？」

丸山の子供っぽい問いかけに、

「まあね」と、ちらりとだけ丸山に眼をやり、生駒をギロリと睨みつけた。

つまらない昔話をしてなにが楽しい、とでも言いたげだ。いつも未来形の話をしろ、というのが立成の口癖なのだ。

もちろん丸山は、そんな立成の信条を知るはずもない。ちょうどやってきた伊知と瀬謡らにも、無邪気に同じ問いを投げかける。

「伊知さんは？」

「ええ、まあ、小さいときは」

「芳川さんは？」

しつこい。

芳川は複雑な表情で立成に顔を向けた。言わずもがなではないかというのだろう。

「実家が須磨にありましたから……」

「あ、そうだったんですか。へえ！ いいところですよねえ」

芳川が微妙にやれやれという顔をしたことに、丸山は気づかない。

「それでね、生駒さん」

また始めるのか、と生駒は少々げんなりしたが、丸山はとんでもないことを言い出したのだった。

「そこで、人殺し事件がありましたね」

まるで、楽しい思い出を語るときのように、声高らかに。

人殺しなどそうそう身の回りで起きることではない。

不謹慎ではあるが、へえ！とか反応してもよさそうなものだったが、立成も芳川も黙っている。

瀬謡がさつと伊知と顔を見合わせたが、やはり黙ったまま。生駒もとつさに返す言葉が見つからなかった。

丸山は周りの空気が読めないのか、説明を始めようとした。

「その事件というのは」

言い出すやいなや、伊知が止めた。

「いい話題じゃないよ、あんた」

その口調は、ハツとするほどきついものだった。

立成はといえば、こちらも露骨に丸山を睨みつけている。

さすがに丸山は、はあ、と生返事をして首をすくめてしまった。

妙な具合になってしまった。

この場を誰が繕うか、と牽制しあうような沈黙が流れる。

しかし、絶妙のタイミングで、天から冷たいものが落ちてきた。

「あ、とうとう降ってきた」

「うわ！」

ポツンと額に雨粒があたったと思うやいなや、バラバラッと音をたてて大粒の雨粒がテラスを打った。

12 2つの音

松任は、愛想笑いを浮かべながらあの話を聞いてからというもの、立っているのも辛くなっていた。

普段感じることもないほどの怒りがこみ上げていた。怒りと共に、自分の心の中にこれほど大きなわだかまりがまだ巣くっていたことも驚きだった。

そして急にバカバカしくもなってきた。

普段は仕事を怠けたいという気になることさえなかったし、人と一緒にいることも苦でもなんでもなかった。しかし、今はひとりになりたいと思った。

どうせ今日のパーティは芳川のお遊びじゃないか。得意先を接待しているわけでもない。

そんなことを考えてしまうこと自体が、いつもと違う自分のようだった。

きつと、想像以上に疲れているのだ。

コンパニオン役に徹してほとんど何も口に入れていない。少し食べよう。少しは気が休まるかもしれない。と、サンドイッチを皿に取った。しかし、三口ほど食べたところで皿を置いてしまった。

喉を通らない。慣れないものを着ているせいかな、軽い嘔吐感さえある。

人たちの話し声が遠くに感じる。

耳鳴りがしている。

小さくなっただざわめきの中でひとり立ち尽くしている自分が、浮いた存在のように感じてきた。

思い切って借りたこの派手な着物。見世物になった気がして、い

たたまれなくなってきた。脇を通った女性が「レンタル」と呟いたような気がした。

と、肩に手が乗せられた。芳川だった。

「顔色が良くないな。少し休めよ」

言葉は穏やかだが、目にはいつもの優しさが無い。

自分のふがいなさを責められている。松任はそう感じた。

「すみません。大丈夫で……」

が、足元がふらついた。

「ほら」

「すみません」

ここで倒れるわけにはいかない。指示に従ってリビングを抜け出すと、二階の客室のベッドに倒れこんだ。

悔しかった。

芳川の前でふがない姿をさらしてしまった。

そんな些細なことに涙が頬を伝い、それがまた情けなかった。

瀬謡は空を眺めた。

激しい雨が降り続いている。風も徐々に強まってきている。

客たちはリビングとバーに別れて集っていた。

料理や酒や菓子や果物は、ふんだんにある。

パーティが始まってから、かれこれ二時間ほど経つというのに、客たちはさほど退屈することなく、見知らぬ人との出会いを楽しんでいた。

誰に強制されるわけでもないのに、手品を披露したりダンスをする客もいて、パーティを盛り上げるのに一役買っていた。

インタビューを受けても良いと考えるほどの人だから、社交的な人が多いということなのだろう。

突然、リビングの中がざわついた。

「防犯ベル？」と、声があがる。

どこからか、唸り音が聞こえていた。

甲高い音で鳴り続けている。ビーン、ビーンと、不規則に大きくなったり小さくなったり。

下の階から聞こえてくるように感じたと思えば、上の方から聞こえてくるようにも感じる。

芳川事務所の社員が小走りに出て行った。

「念のために見に行かせました。どこかの会社の社員が、セキユリティを間違って作動させてしまったのでしょうか」

客たちを安心させようというつもりなのだろうが、芳川自身が落ち着かない様子だ。

顔色が心なしが白い。

和気藹々と進んでいた会が、強い雨のせいで居心地が悪い方へと微妙に変化し始めている。それを主催者であるこの男は、誰よりも感じ取っているのだろう。

そんなとき、ひとつの事件が起きた。

「おい！ ふん、とはなんだ！」

和やかな雰囲気の中では違和感のある声音。

瀬謡がバーを覗くと、金谷が赤い顔をして丸山という男を睨みつけていた。

徐々に人が集まってくる。部屋中の視線を浴びて、丸山が金谷をなだめにかかった。

「ここで蒸し返すことはないでしょう。落ち着いたらどうです」

金谷はチラッと他の客たちに視線を投げたが、振り上げた拳の下ろしどころがない。すでに大声を上げてしまった後だ。

「気に食わんな！」

と、さらに怒声を浴びせる。

丸山の連れの女性がビクツとした。

丸山も紅潮した顔をしていたが、声音は妙に落ち着いていた。

「気に入ってもらおうなんて、思っ
てませんよ」

突然、不敵に笑う。挑発だ。

「なにい！」

しかし金谷の後の言葉は続かない。

形勢は完全に不利。

こんな場では大声を出した方が負け。世論を敵に回すようなものだ。

バーの中がざわついた。瀬謡は、この場を納めるべき立場の芳川と立成を探したが、姿はない。

「金谷さん、ちょっとお話があるんですが」

と、ここで仲裁が入った。なんと、馨だ。

「こちらにいらしてください」

微笑みながら手招きし、多くの視線を受け流しながら、螺旋階段を堂々と登っていく。

金谷が必ずついてくるという自信に満ちた足取りで。

二階に着くまで、振り返りもしない。

一同の目が、金谷に戻る。

二階の手すりにもたれた馨が、そしてバーの客たちが見守る中、金谷は舌打ちをして丸山の前を離れた。

こうなってしまうては、この場にはおれまい。

金谷は、なんだくそ、と毒づき、部屋を横切っていく。

足がふらついている。虚勢に満ちた目。自分は酔っているの
で大目に見てほしいというアピールなのかもしれない。

螺旋階段を登っていき、馨の姿と共に消えた。

1129 芳川ブログ9

今回のインタビューに、弊社の社員、松任歩美が初めて同席しましたが、彼女が言うに、音の世界は人の心に強い影響を与えるというのです。

好きな音も嫌いな音も。

特に原風景として心に残っている音は、その人格を形成する要因の一部にもなりえると。

大げさな、とは思いますが、一理はあるのでしょうか。

私も、ますますこのブログインタビュー、楽しみになってきました。

さて、九人目は丸山徹さん。

急成長を遂げているコンビニエンスストア、エヌストップの経営者、神戸市内に三店舗、芦屋市内に二店舗所有されておられるフランチャイジー。

お題は「列車の轟音」です。

最初はレールが軋む音がする。

キーンという金属的な音だ。
かすかな音。

しかし力のない音ではなく、確実に鼓膜を振るわせるパワーを秘めている。

しばらく耳をすませていると、その金属的な音が規則性を帯び、連続的に聞こえてくる。

キン、キン、キン。

徐々に音量が増してくる。

やがて金属的な響きが薄れ、徐々にゴトンゴトンという鈍角的な音が混じってくれば、もう近い。

キーンという音ははるか遠くから、鉄のレールそのものを震わせて伝ってきたのだが、ゴトンゴトンという音はレールや枕木や砂利、または地面そのものを振動させた音だ。

もちろん列車の振動音でもある。それがレールに乗って伝わってくるという感じだ。

そして、少し遅れて空気を伝わった音が聞こえてくる。

一気にその音量が増し始める。

そうなれば、もう、恐怖の体験は間近に迫っている。

音はぐんぐん大きくなり、クライマックスへの期待がいやがおうにも高まる。

初めての子なら、もうだめだ！と逃げ出す。

その直後、一気に列車が頭上を駆け抜けていく。

そう。

昔、線路沿いに住んでいた子供なら誰もが体験した線路の下の肝試しです。

子供のころ、これが好きでした。

わざわざ電車に乗って、恐怖の体験ができるところまで行ったものです。

線路の下の隙間が低ければ低いほどいい。

すぐ真上を列車が通る恐怖を味わおうとするわけですから。

足掛かりがあって線路のすぐ下まで登れるようなところでもいいわけです。子供が三、四人、登って入り込める隙間があればさらにいい。冒険心をくすぐられます。

手を伸ばせば列車が通るときに腕ごと持っていかれそうなくらいのところが最高ですね。

また、線路の隙間が下から見えるところじゃないと意味がありません。

列車が、ドガガガツと通り過ぎていくのが下から見えないといわば鉄橋みたいになっているところですよ。臨場感が違います。

私の子供のころはたまに蒸気機関車も走っていました。

こいつは列車が通過するときに熱い水滴が降ってくるんです。これがまたたまらなく少年の冒険心を刺激しましたね。

まだ、条件があります。

ダイヤの密なところ。三十分待つてやっと一列車、ではダメですよ。ね。

それと、貨物列車が頻繁に通る路線がいいですね。あれは長いのでお得です。

快速電車が停車するような大きな駅の近くはダメです。列車のスピードがないから。

そしてもちろん、大人に見咎められないところ。そういう条件です。

お察しの通り、一番むづかしいのが最後の条件です。

田舎の方に行けばいくらでもいい場所はあるのですが、当時の神戸でもそれなりに線路は管理されていて、なかなか入り込めるところはなかった。

ということで、穴場は地域の人のための歩行者通路。ここなら、堂々と列車の通過を楽しめます。

高さがあり過ぎるのが不満なのですが、探せば天井の低いところもあります。例えばJR神戸線の灘のあたりとか須磨のあたり。

現在もその条件に当てはまるかどうかは知りませんよ。子供時分にわざわざ行ったところですよ。

今、大阪では伊丹空港のジェット機の離着陸を間近に見るスポットが人気ですよ。

ま、あれの列車版ですね。ロマンチックでもなんでもないし、いい大人がガード下でそんなことをしたら、変質者と間違えられて通報されるのが落ちでしょうけど。

音というテーマにふさわしいかどうか分かりませんが、心に残り、刺激的だったなあと今もまだ思える音、ということでガード下で聞く迫力の列車通過音の話をさせていただきました。

13 小さな棘

目が覚めた。いつのまにか眠っていた。ビーンという唸り音が聞こえていた。

松任は自嘲気味に笑った。

廊下で人の声がした。

「しっかりしてよ。みつともない」

母の声だ！

松任はあわてて体を起こした。

「すまない」

これは金谷の声！

母と金谷が話している！

部屋の扉が薄く開いていた。ふたりきりのようだ。慣れた関係のような口ぶり……。いったいこれは……。

松任はベッドの縁に座り直した。

いまさら扉を閉めるわけにはいかない。それにふたりの秘め事を盗み見たいという衝動。意識も急速に戻ってくる。

「なんなのよ。あれは」

「本当にすまない」

「もしかして、祥子というのは」

「……」

バシッ。

いきなり、平手打ちの音。

母が金谷をぶったのだ。

びっくりして立ち上がった拍子にベッドが軋んだ。息を殺す。

しかし、もうなんの音も声も聞こえない。廊下には深いじゅうた

んが敷かれている。足音は聞こえない。

松任は混乱した。なにかが起きている。母と金谷は……。

ドアの隙間から、金谷が通り過ぎるのがちらりと見えた。その目が部屋の中を見ていた。一瞬、目が合ったように感じた。

しかしその後は、静まり返っている。

母は？ 螺旋階段からバーに下りたのだろうか。

松任はドアに近寄ったが、その前で躊躇した。

母がまだ廊下にいるのではないか。いや、それならそれで……。

ドアノブに手を伸ばす。

と、再び声が聞こえてきた。今度は芳川の声だった。

「すみませんでした。いやな思いをさせてしまいました。お手数もおかけして。すぐに上がってこようとしたのですが、丸山さんにもお詫びしていて」

丁寧な口ぶりだが、どことなく緊張した響きがある。

「いいえ、お気になさらずに。あんなことは中年女性の役でしょ。

私なら角が立たないし」

母がすました顔で応えているのが分かる。

いったい、なにがあったというのだろう。

母と金谷が、二階の廊下で短い密会をしたということではないようだ。

「それで金谷さんは？」

「娯楽室です。バルコニーで頭でも冷やしておられるんじゃないでしょうか」

やはり母は、金谷がどの部屋に入るのかを見届けていたのだ。
「すみません」

芳川は母に平謝りだ。

「では失礼して金谷さんを見えます」

「あの、伊知さん」

あつ、立成もいる。

「突然こんなことをお聞きするのは失礼かと思いますが、旧姓は井端さんとおっしゃるんじゃないかもしれませんか？」

「はあ、そうです」

少し間が開いた。

松任は耐えられなくなってきた。

ここでいつまでも聞き耳を立てているより、知らぬ顔をして外に出て行ったほうがましだ。芳川はこの部屋のどこかに自分がいることを知っている。盗み聞きをしているかと思っているかもしれない。

そつとドアの隙間に目を当てた。

全員が背中を向けておれば、そつと扉を開けて、反対側から下に降りよう。しかし、そうはいかなかった。

芳川がすぐ傍に立っていた。娯楽室に行こうとしていたのだろう。しかし、立成が母にかけた言葉に振り返ったという構図だ。しかも、母はこちらに顔を向けている。

出て行く勇気がなくなった。

「やはりそうでしたか……」

突然、立成が深々と頭を下げた。

母が立成を見つめた。

そして困惑したように、立成と芳川の間に視線をさまよわせた。

「あの、もしかしてあの……」

と、ようやく母が反応する。

「はい。お忘れでしょうか。立成です。美弥子さんのことでは……」
まだ頭を下げ続けている。

「あれ、受け取っていただきましたでしょうか」
立成がようやく頭を上げた。

「ああ……はい……」と、母が絶句した。

「よかった。ブログの二回目を読んだとき、そんな気がして。それからというもの、気になってまして」

「はあ」

「またこうしてお会いすることになろうとは」
立成の表情は見えない。

しかし今は両手を上げて喜びを表している。
ところが母は、恐怖を感じたときのように両腕を体に巻きつけた。

芳川が微動だにせず、ふたりを見つめていた。

と、母はなにも言わずに芳川に向かって会釈すると、くるりと背を向けて足早に螺旋階段を下りていった。

「また後ほど。いろいろお話したいことが」

立成が母の背中に声を掛けた。

松任は、芳川と立成が娯楽室に入っていたことを見届けてから、階下に降りていった。

九時を回っていた。

室内にいても、激しい雨音が聞こえていた。

そして、あの音が雨音に被さっている。金属的で甲高い唸り音…

…。

ゲストハウスそのものを微妙に震わせる音。

打っては返す波のように、途切れることなく大きくなり小さくなり、鳴り続けている。

目に見えない小さな棘を、空気中にばら撒いているかのような音。

人々の胸の中には、その棘が少しずつ溜まり始めていたのかもしれない。

全体として、まだパーティはゆるゆると進行していた。しかし、手持ち無沙汰な様子で窓際に立ち、恨めしそうに空を見上げている姿がある。携帯電話で小声で話しこんでいる客もいる。

手のつけられていないアイスクリームは半ば溶けかかり、それを横目で見やる芳川事務所の社員たちの目にも疲れが滲んでいた。

リビングの微妙な変化を感じ取って、松任は無理やり笑顔を作った。

しかし、体はまだいうことをきかない。入口に立つ尽くす。そして目は、母の姿を探す。

その母は瀬謡と部屋の隅で話し込んでいた。

芳川と立成がリビングに戻ってきた。

何人かの目がふたりに集まった。同時に時計を気にするものもいた。

立成がすぐに歓談中のゲストに混じっていった。芳川が社員たちになにやら指示を出した。

塊田の姿はない。

松任の体はこわばっていた。まだ動けなかった。しかし、顔には自然と笑みが浮かんできた。

やがて熱い日本茶と昆布茶が用意され、芳川自ら盆に載せてゲストの談笑の輪に入っていた。彼らを中心とするホストたちの動きによって、パーティが再び引き締まったものになっていく。

それでもまだ松任は突っ立ったまま、部屋の中の様子を見ていた。塊田がどこからか姿を現した。その動きを目で追った。

「お気分は良くなりましたか？」

突然声を掛けられて、松任はぎよつとして振り返った。

生駒と三条が笑っていた。

「す、すみません。もう大丈夫です」

「人酔いされたんでしよう」

と、生駒は無難な回答を用意していた。

「ええ、そのようです。みっともないところをお見せしてしまいました」

松任は頭を下げ、その隙に笑顔を作った。

「お気づきになっておられたんですね。恥ずかしいです」

生駒はニツと笑っただけで立ち去った。

ゲストたちに再び動きが出てきた。笑い声も出始める。ただ、折り返し点はどうに過ぎたという感触はある。松任は母に近づいていた。瀬謡の娘はケーキを選ぶのに余念がない。

と、松任は思わず足を止めた。

「あいつ、許せない」

母の声。

「なんのこと？ 金谷さんのこと？」と、瀬謡がおうように返す。

「私たち家族をむちゃくちゃにして。一日たりとも忘れたことはない」

「え？ だれのこと？」

母の視線がリビングに流れる。つられて瀬謡も。

眼が合った。

「ちよつと、馨！ 独りでなにブツクサ言ってるのよ」

瀬謡があわてて母の袖を引いた。ハツとする母。

「なに？ 私、なにか言った？」

「あんたねえ」

芳川と立成が通りかかり、

「熱い昆布茶はいかがですか？」

そんな声にも、母はビクツとして振り返る。

しかし、声の主が芳川だと知るや、眉間に寄せていた皺をさっと消し、微笑を浮かべた。芳川は、湯呑を受け取りやすいように盆ごと差し出す。

ただ、芳川を含め、その場に居合わせた誰もが、母が見せた表情の変化とは無関係な、心の中から染み出ていたなんらかの感情の動きを読み取ったことだろう。

母は、では遠慮なく、と湯呑をつまみあげた。

「瀬謡さんもいかがです？ お口直しに」

「はい。でも、あれの味見をさせていただいてから」

瀬謡がにつこりして、その娘が今まさに挑戦しようとしているプリンに眼をやった。

「はい。どんどん召し上がってくださいよ。なんだか、今日は皆さん、食が進みませんねえ。大雨に気もそぞろで」

「それにしても土砂降りになりましたなあ」

立成が、さあ、やるぞ、というように腕を伸ばしたり縮めたりしながら、リビングを出て行った。

松任は芳川の盆を取り上げた。

「私がつまみ

「もう気分はいいのか？」

「はい。申し訳ありませんでした」

そういつて松任は、芳川を母から引き離した。

再び母の顔には、パーティを楽しんでいない、というメッセージがありありと表れていた。目は吊り上がり、眉間に皺を寄せ、唇を引き結んでいた。こういう表情のときの母は、何かの拍子で怒りを爆発させる。芳川に対してさえ、どやしつけかねなかった。

「先生こそ、お疲れのようですね。お顔の色が良くないですよ」

松任は親しみをこめて芳川にいった。現に、芳川表情は暗かった。疲れているようにも見えたし、イラついているようにも見えた。「そんなことはない」

顔色が気になったのか、返事の声が厳しすぎると感じたからなのか、芳川は顔を両手で擦ると、

「早め目に切り上げた方がいいかもしれないな。雨脚も強いし」と、独り言のようにいった。

この男流の相談である。松任はにこりと頷いた。

松任はテンポの良い曲をかけた。ちょっと懐メロのディスコミュニケーションジック。

誰ひとり踊ろうというものはないが、それでも、ゲストたちの動きに弾みがついたようだ。芳川がゲストたちの間に姿を消し、松任は再び昆布茶を配り始めた。

事務所の社員の大声がリビングに響いた。

スライドショーをバーで上映するという。ゲストのひとりが南米を旅したときに撮影したものを持参してきたという。どれ、じゃ、見てやるか、とゲストたちの興味半分、義理だて半分の大移動が始まった。

ぼんやりとバーの入口の脇に立つて、スクリーンに映し出される殺風景な景色を眺めた。痩せた男性がこれはどこそどこと、どうでもいい解説をしている。金谷の姿はない。母ら三人組は用意された椅子には座らず、壁際に立っている。

スライドが終盤に差し掛かり、母が近寄ってきた。瀬遥が心配そうな目で追っているが、母はもう落ち着いた表情に戻っていた。

「歩美、いい事務所で働いているようで、おかあさん、安心したよ」

そうささやかれて、松任は胸にこみ上げてくるものを感じた。ただ残念なことに、口から出た言葉はそっけないものだった。

「うん」

「今日はありがと。楽しかったよ。歩美がすっかり働いている姿も見られたしね」

「おかあさん。話が」

「うん。私もね。でも、今日はもう帰るよ。明日、早いから。また、近いうちに。芳川さんや司会の方によろしくね。姿が見えないから、挨拶せずに帰るけど」

そういうと、母は瀬謡のところに一旦戻り、二言三言交わすと、今度は会釈ただけでひとりでバーを出て行った。

そう、近いうちに母と大切な話をしよう。

いや、今、一言だけでも。見送りがてら一階まで一緒に。

松任は追いかけようとしたが、リビングでは母が塊田に挨拶をしていた。塊田が、ではタクシーをお呼びします、と母の世話を焼き始める。それを見て、松任はバーに戻った。

入れ替わりに今度は丸山夫妻がそつとバーを抜け出していった。

生駒は、スライドにはいささかうんざりしていた。

携帯が鳴ったのを機に、バーを抜け出した。

「どうしたんです？」

金谷からだった。

「ん、ま、な。見ての通り。散々や」

生駒はなんといって慰めたらいいのか分からなかったが、とりあえず、気を取り直して降りてきたらどうかといった。

「ああ、そうする。でも、少し考えたいことがある。へへ、とんでもないことに気がついたんや。あんたにも関係したことや」

「なに？」

「明日の夜、時間あいてるか？ ゆっくり話そう。おもしろいこと

になるぞ」

それからしばらく後、ひとつの命が絶たれた。

14 ミラーサイト

生駒の回想。伊知馨との思い出。

伊知はぼつちやりとした体格で、声の大きい女性だった。

派手な装いにオーバーなアクション。のんびりしたような感じに見えて、実際は現場の中をキリキリと動き回る。するどく指示を飛ばし、存在感も相当のものだ。

数年前に趣味の食器集めが高じた店を開き、それを一気に店舗ディスプレイ業にまで広げた手腕を考えれば、彼女の迫力にも納得がいく。

しかし大雑把な性格かといえそうではない。

金のことをあいまいにはできないらしく、一円単位まできっちり話をつける折衝を目の当たりにしたこともあった。ものを買って売る、あるいは作って売る商売は原価の割合が大きいから、うかうかしていると利益が取れなくなる、と諭されたものだ。

一旦失うと決して取り返せないもの、それは時間、というのが口癖で、伊知は常に動き回っていた。

仕事と楽しみのためには費用も時間も掛けることを惜しまないが、世間体や付き合いのために時間を費やすことは嫌い。ウィンドウショッピングは楽しむが、日常の買い物なんてまず行かない。経理作業なんてしない。すべてカード払いで省力化。通勤こそ最大の無駄。という具合だ。

厳しくてとっつきにくい人、という印象を持たれることも多かっただろう。

そして、激昂すると手がつけられなくなるという性格。扱いにくいとも思われていただろう。実は、生駒もそう感じていた。

ただ、ドライ一点張りの人だったかというと違う。

こんなこともあった。伊知からバレンタインのチョコレートを渡された。お返しにと、居酒屋で食事をしようということになったが、その夜、伊知はエスニック調のワンピースをゆったりと羽織って現れた。本当はこういうリラックスできる服が好きなのよ、といいながら。

思えば、あれが伊知との最初で最後の食事になったのだ。

そんなときの話題は、とりあえずは仕事のこと、今どきの社会問題、景気のことなどへと流れていって、最後は今関心を持っていることや趣味の話に行き着くのが通常だが、その日、伊知はそんな冗長な前振りなどなしに、こんなことをいった。

「伊知っていう名前、旧姓の井端に戻そうかと思っているんだけど、どう思う？」

生駒は、名前が商売に与える影響はなにもないだろうという正直な意見を吐いたのだが、変えなかったということは、結局は改姓の面倒さが伊知を思いとどまらせていたのかもしれない。ただ、伊知が夫と別居状態にあり離婚が近い、ということを生駒はそのとき知った。そして彼女のがむしゃらなパワーの源にも、勝手な納得をしたのだった。

賑やかな安居酒屋で、打ち合わせ机よりはるかに小さいテーブルを挟んで、間近に見る伊知の顔。

今まで気づいていなかったことが見えてきたものだった。艶のある肌。五十を超えているとは思えない張りのある頬。ころころと笑う、みずみずしい唇。

「名前を変えようかなと思ったのは、私の人生を取り戻すため」
生駒は頷くだけだった。

「あなたのいうとおり、本当は仕事のことなんか関係ないのよ。誰にでも、何かを犠牲にして何かを手に入れる、という場面があるでしょう。私の場合は……、あっ、ごめん。こんな話、するつもりじやなかったのに。どうしちゃったのかな、私」

伊知はそういつて、話題を、始めたばかりのパラグライダーに向けたのだった。

「事情聴取、どんな感じやった？」

塊田瑠奈のイタリア料理店「パパラッチ」である。

伊知馨がマンションの植え込みで発見された日から三日、パーティから数えるとほぼ十日が経っていた。

「どうって、なにも」

優はようやく席に着いた瑠奈に聞いたのだが、あまり楽しい出来事ではなかったのか、瑠奈は気乗りしない応えを返してきた。

「伊知さんってあまり記憶にないのよね。あの人がお帰りになるとき、一階までお送りしたんだけど、ずっと黙り込んでおられてさ」

「ふうん。生駒の場合は仕事上の付き合いもあるから、伊知さんの会社のこともなんか聞かれてた。ねえねえ、なんていう刑事が来た？ 私達のところは藤堂という人」

「ああ、たぶんそんな名前の人。忘れちゃった」

パパラッチはレストランだというのに、とてもクールな内装だった。

ステンレスメッシュのスクリーンが客席を仕切り、テーブルは強化ガラス。カフェとしての利用も多いのだろう。

瑠奈が生駒の方をちらちらと見ている。久しぶりに会って昔話でしようというのに、優がなぜ自分の上司を連れて来たのだろうといぶかしんでいるのだ。

優もそれに気づき、

「あ、私ね、ホントはさ、生駒の会社の社員でもなんでもないだ。仕事は手伝ったりしてるけど、無給やし」

と、舌を出す。

生駒は優に連れられて来たわけだが、気は進まなかった。

美女ふたりとの食事なのだが、なんとなく所在がない。

伊知のニュースからまだ三日。これもある。そして最大の理由は、芳川のプログにあった。

ミラーサイト。

優が見つけ出していた。

同じブログサービスを利用し、デザインやタイトルなど見かけは全く一緒。微妙に違うのは固有名詞。そして内容。

メインのサイトが芳川の素直な善の心で記されているとすれば、ミラーの方は妬みや悪意の心で書かれたものだった。

ニュアンスが違う。誇張されていた。そして文章の最後には、あざ笑うかのようなコメント。

生駒や優の、芳川に対する評価は一変してしまっていた。

例えば、こんな調子である。

0508 吉皮プログ17

十七番目にご登場いただくのは金屋犬吾さん。

大阪で活躍中のイベントプロデューサー。

お題は「潮騒」

生家が海岸にあったものですから、常に潮騒に包まれている暮らし

でした。

二十四時間ずっと波の音が聞こえていたわけです。今にして思えば、なんと贅沢な環境だったのだろぅと思います。

せせらぎの音に囲まれた暮らしという少々みみちいお話もありましたが、せせらぎであれ波の音であれ、水の音というのは興奮した心を沈静化させる効果があると聞きます。

実際、のんびりした毎日をたんたんと過ごしていく、という暮らしだったように記憶しています。

四六時中包まれている自然の音には、ほかにどんな音があるでしょう。

風が吹き渡る丘陵部の尾根筋に屋敷があるというのもあるでしょうし、野鳥がいつも庭に來ているという家庭もあるでしょう。

でも、そんなものは一瞬でも止むことがありますよね。

海の波の音というのは止むことはないのです。たとえば凧のときでも、海岸には小さな波は打ち寄せています。

想像してみてください。あなたの故郷に比べて、あるいは原風景と比べて、いかがですか。

私はそんなすばらしい環境で育ってきたのです。

でも、本当のことをいうと、今や、あまり実感はないのです。

常に潮騒が聞こえているという環境があまりに当たり前のこと過ぎて、どんな気持ちだったか、なにを感じていたかという、もう表現のしようがありません。身近すぎたものの思い出がえてして希薄なのと同じですね。

実は最も記憶にあるというか、生々しい感覚が残っているのは、台風のと き なの です。

そのときは潮騒なんて生易しいものではありません。

まるで地響き。

といっても地響きがどんなものか聞いたことがありますから、たとえとしては不適切なのですが、それ以外に形容のしようがありません。

時々、雪崩が起きたときとか土砂崩れが起きたときに「ドン！」という音がしたとテレビのニュースで言ってますでしょう。ああいう音が間断なく聞こえるわけです。

もちろん地面も家もそれにつれて振動します。強い風で、近所のあばら屋全体がギシギシ、屋根や板を張っただけの壁なんか、バタバタと音をたてどおしです。

そんな音に混じって、ドン！ドン！という波の音が聞こえてくるのです。

それはそれは恐ろしい体験です。

金屋さんのお話、いかがでした？

潮騒でしたね。

単に海の波の音を、潮騒というところからして、凝った話だろうと想像はしていましたが、ま、漁師の息子としてはこんなものかな、という程度に上手くまとめられていましたね。

でも、後半部分は私の判断で割愛させていただいています。でも、基調は同じですから、金屋さんのおっしゃりたいことは十分伝わると思います。

ああいう音を聞きながら育った金屋さんが、ご自身で、自分は冷静沈着と自画自賛されているところが、なんともびったりで笑ってしまいましたね。

「ノブは……、なんというか、友達。芳川さんには内緒やで」

芳川にさん付けすること自体が胸糞悪いと優は言っていたが、瑠

奈の手前、しかたがない。

「やっぱいい。そうじゃないかと思ってた」

やっと瑠奈が、はしゃいだ声を出した。

「なんでそう思ったん？」

「だってさ、ユウが会社勤めするなんて、想像できないじゃない」

「そうかなあ。建築設計の仕事って、私は好きやけど」

「へえ、数年間会わないうちに、大人になったんじゃない？」

「なんだ生意気な。でも、ルナもね。まさかレストランを経営するなんて、思ってもみなかったな。案外、肉体労働とちがうん？」

「そう。格好いいかと思っただけだよ。きついのよねえ。立ちっぱなしだし。あ、そういやさ、福娘をしたとき……」

ふたりは昔話に移行していった。

実はミラーサイトの内容に、生駒以上に激昂したのは優である。

芳川の本性を暴くと息巻いてここへ来た、という意味もあるのだ。瑠奈を突破口に。あるいは瑠奈自身がミラーサイトの担当だったりして、という仮説まで持って。

しかし生駒は怒りはしたが、だからといってどうでもいいという気持ちもあつた。

所詮、その程度の男だったのだ。それが早く分かってよかった。そう思っただけ合えば腹も立たない。騙された、という悔しさはあるとしても。

生駒の耳は優と瑠奈の声を聞いていたし、ミラーサイトの件にも関心はあつたが、気持ちの大半は伊知の殺人事件に向いていた。

15 悪徳と長髪

訪ねてきた刑事はパーティの模様と仕事にまつわる話を問うてきたが、生駒には話すことがあまりなかった。ただ、どうせ耳にするだろうからと、パーティの後半、金谷が酔って丸山に絡んだときのことは話しておいた。

伊知と金谷がどういう関係にあるのか、生駒は知らない。おでん屋の瀬謡の話では意味深な関係ということになるのだろう。

立成と芳川に連れられて天満宮の裏のおでん屋に行った日、人の輪の話題で盛り上がっているとき、瀬謡がこう切り出したのだった。

「じゃ、あたしもひとつ披露しようかな。生駒さんを紹介した金谷さん。実はね、譬がここに連れてきたことがあるんだよ」

生駒同様、立成はそれほど反応を示さなかったが、芳川が大げさに驚いてやった。

「パーティのとき、あつと思ったんだ。この人、お客さんで来たことのある人だつて。それでそのとき、あ、これは言わないでここにプライバシーに関わる」

「もう十分侵害してる。そんな思わせぶりな言い方をしちゃあ」

芳川は想像をたくましくしたのだろう。なるほど、と頷く。

「考えすぎちゃダメだつて。ね、頼むよ。変に勘ぐらないで」

もう後の祭りだし、余計に意味深な仲だと白状したようなものだった。

瀬謡が後悔し始めたという口ぶりになった。

「それを邪推というんだよ。金谷さんはイベントプロデューサーでしょ。ある店のオープニングイベントで、一緒に仕事をする事になったんだつて」

「悪あがきだ。もう僕たちは聞いてしまった」と、芳川が笑った。

生駒も茶目っ気を出して、伊知が夫と別居状態で会社兼住宅のマ

ンションでひとり住まいだと披露した。

他人のプライバシーを噂するという失態をしでかしてしまったのだが、そこへまた芳川もとどめの一発。

「金谷さんは独身だし」

生駒は立成が気になった。

笑みを消し、黙ったまま。

しかし、口から出て行ってしまった言葉は、生駒も瀬謡ももう取り戻しようがなかった。

「タバコを買ってくる」

立成が、がたりと乱暴に椅子を引いた。

芳川の目が入口に向かう立成を追った。

「ちよつと西へ行ったところにコンビニがあるよ」

瀬謡に応えず、立成がビシヤリと戸を閉めた。

「お、だれた」

そのとき、生駒の携帯が受信音をたてた。

「噂の金谷さんからメールが来たぞ」

まんの悪い男だ。よりによって今頃メールを送ってくるとは。

「見せて」と、優が顔を寄せてきた。

「先日はどうも。しばらくしたらまた連絡します、か。ファックス届いてたんですね」

「そりゃ届いてるだろ。よろしく、と」

生駒は送信ボタンを押し、ポケットに携帯を落とし込んだ。

「ところでさ、伊知さんの事務所、この辺りだね。店によく食べに来るんですか？　もしかして、常連さん？」

「それもあるけど、元はといえば大学時代のサークルの先輩後輩」

「へえ！　なんのサークル？」

「へへへ」

「もったいつけるような歳かよ」と、芳川の口は滑らかだった。

「二輪のツーリングサークル」

「あ、そうか。あの人のインタビューはそんな話だったね。まさか瀬謡さんも？」

「なぜ、まさかなんです？ そう、ふたりとも二百五十CCのバイクだね。十日間の行程で、ふたりで北海道まで行ったのが最高の思い出。あたしが三回生、馨が四回生のときの夏休みだった」

生駒は、ふと思い出した。

「そついや、伊知さんと立成さんも、実は挨拶くらいはしてる。あの現場で、たまたまふたりに出くわして、紹介したんだ」

生駒は瀬謡に話しかけたのだが、おでん屋の女将はちよつと目を剥いただけ。

代わりに芳川が、「ほおおー、そうなんですか」と、応えた。

「ええ、半月ほど前。ま、次の日には、互いに顔も思い出さないだろうっていう程度の紹介でしたけど」

芳川が首をかしげ、興味有りという目を向けてきた。

「芳川さんのインタビューを受けたんだってことが話題になって、ん？ そうだ。そのとき、金谷さんもいたんだ、確か」

生駒は話を切るタイミングを逃してしまい、またしても言わないでもいいことを口走ってしまったのだった。

立成はなかなか戻ってこない。

瀬謡がスルリと話題を変えた。

「ね、芳川さん。予約のご連絡をくれた四日の晩、札幌だったんだってね」

「そうなんだ。顧問先が札幌に新店舗を出してね。祝賀会に呼ばれてたんだ」

「じゃ、あの電話、その真つ最中だったの？」

「いや、祝賀会は翌朝。前日から泊まることにしたんだ」

「大先生も大変だね。あの後、すぐに電話を掛け直したんだよ。繋がらなかったけど」

「あ、ごめんごめん。地下街にいたからかな。で、用はなんだった？」

「ご予約の日さ、大切なお客様だったら、ちよつといいお酒でも置いておこうかと思ってね。なにが好み？」

「ほう。えらく親切なんだな。常連にはそんな気は使わなくせに」「ハハハ。珍しく予約の電話なんかくれるからさ」

「うん。いや、ごめん。申し訳ない。あの件は中止だ」

その直後だった。

アナウンサーが「グランハイツ天神の植え込みで女性の死体が発見され……」と言いだしたのは。

伊知と金谷のあるかもしれない関係。

生駒はこれを警察には話していない。伝えるとするなら瀬謡が話すべき内容だからだ。

ただ、あのパーティの日に伊知がとった行動……。

伊知は金谷を丸山から引き離すため、二階へ連れて行った。

そして、立成や芳川と入れ替わりに降りてきたが、よほど腹に据えかねることもあったのか、以降、始終むつかしい顔をしていた。

一方、金谷の方はどうしていたのか。

少なくとも姿を見かけた記憶はない。あの電話以外は。

ああいう醜態を見せた後だから、いつのまにかそつと帰ってしまったのだろうか。あるいは会が果ててしまつまで、二階に隠れていたのだろうか……。

優と瑠奈との昔話は、一旦は尽きたようで、パーティの話題に移っている。

「いつも、あんなふうにご馳走を出すん？」

「さあ。時々駆けり出されるのよ。うちの店のお料理を出すときは」

「あの税理士、それなりにグルメみたいやしね。こだわりすぎるのは、どうかと思うけど」

優の言葉には、微妙に棘がある。

「うん、まあ、そうね。このあいだもさ。札幌へ行く朝に電話したら、通じないのよ。なにしてたと思う？ 忙しいなんて言いながら、わざわざ朝市に行ってたんだって。カニ味噌のビン詰めを宅急便で送ってきたわ。あんなもの、どこでも買えるのにね」

「あ、ルナも札幌に行ったん？」

「わっ、内緒だよ、これ」

「ハハア」

「何がハハアよ。こら」

「ふーん」

「だからあ」

「ま、いいやん。そういうことにしておくから」

「なんなのよ。そういうことって！」

「ね、芳川さんの例のお酒。すごいよね」

優はミラーサイトの件を持ち出すタイミングを計っているのか、芳川から話題をそらさない。

「ボトルの山は増え続けてるよ」

「あれ、趣味？」

「ほら、なんでもとっておきたい人っているじゃない」

瑠奈は自分の微妙な話題から、芳川本人の話題になったので安心した様子だ。

「例えば飛行機のチケットとか？」

「まあね。そのクチ」

「くだらないよね」

優の直接的な批判にも、瑠奈は、ハハハと笑って「そうそう」と

同調している。

「音楽とかミュージカルや映画なんかの趣味はないのかなあ？」

「ないんだな、それが。特にクラシックはダメみたい。特にコンサートは。チューニングの時間がたまらなくいやだって」

「なんだそれ」

優がはつきりバカにしたような顔つきになった。

さすがにしゃべりすぎたと思ったのか、瑠奈は「さあ」とだけ応えて、店の仕事に戻るために席を立てていった。

優は瑠奈の後姿を見送って、長いため息をついた。

「フフン。ユウもミラーサイト、攻めあぐねてるな」

「ハア！」

「ところでさ。芳川と彼女はどんな関係なんだ？」

「さあねえ」

「もしかすると、あれ、じゃないか？」

「ア・イ・ジ・ン？」

「そう」

「かもねえ」

優は明らかにおもしろがっている。

「この店も」「うん。広すぎるし」「内装も立派過ぎるし」「だからさ」「それもおおぴらな」「なるほどなあ」「人生いろいろ」「ケッ」

瑠奈がレジの後ろで書類を覗き込んで従業員と話している。

「そんなことより、金谷はあれからどうしたんだろ」

「あー、もう！ また、その話！ ふう！」

「分かってるって。事務所に行けというんだろ。そういうことじゃなくて、パーティの日、あれから見かけた記憶がない。ユウは？」「二階に連れて行かれてから？ 見かけなかったよ」

つれない返事だ。

伊知の事件に金谷がどう関係しているのかを気にするのなら、目に見えた出来事だけが重要なのではない、と優は言うのだった。

「ああ、もちろんミラーサイトも絡んでくるんだろ」

「そう。悪徳税理士のパーティーでの出来事も重要だけどさ」
いつのまにか悪徳税理士になっている。

「それにしても、おばちゃんとおっちゃんの紅葉色づく春ねえ」

「伊知さんが喧嘩の仲裁をしたってことは……」

「だから、それは瀬謡さんの示唆のとおりやん。ね、そもそも、金谷さんでどんな人なん？」

生駒は金谷のむさくるしい風貌を頭に描いてみたが、

「正直に言つと、あまり知らない」と、応えるしかない。

「でも、仲良くしてるやん。友達とちがうん？」

「ああ、仲良くはね。でも、改めて考えてみると、なにも知らないんだよな」

「出身地、最終学歴、年齢、血液型、誕生日などなど」

「出身は確か神戸あたり。年齢は僕より少し上……」

そんなものだと思う。

親しくしていても、目の前に今いる生身の人間として付き合っているのであつて、相手のそういった属性を掘り下げてみることはないし、ましてや心の中に踏み込んだこともなければ、古い過去を理解した上での付き合いでもない。

互いに疲れたなどと近況を話すことはあつても、その本当の背景まで吐露することはまだ。

つまり、生駒にとって、金谷は真の友といえる相手ではないということだ。

「ふうん。でも、なにかないん？ 話のきっかけになるようなこと」
「そうだな。あえて言うなら、あいつは金に困っているかもしれないな」

い、ということくらいかな」

「へえー」

「一度、金を貸してやったことがある。それだけの理由だけど」

「いくら？」

「十万円」

「たったそれだけ？」

「そう。だから余計に」

「他には？」

「うーん。懐中時計を使っている」

「なにそれ」

「関係ないか」

「それにしてもあの長髪のおっさん、あの夜、ノブとどんな話をしようと思ったんやろ」

こちらは長髪のおっさんに格下げだ。

生駒は首を振った。見当もつかない。

「おもしろいことになるぞって、言ったんやろ？」

「ああ」

「二階のどこかの部屋でひとり、暗い顔して臭い息を吐き、目だけ光らせて携帯電話をまさぐり……」

「想像しすぎじゃ」

「悪だくみ、やな、これは」

「決めつけるな」

「伊知さんと長髪のおっさんの関係が、もう少しすっきりすれば」

「ん、待てよ」

急に思い出したことがあった。

「思い出した。あつたぞ。ふたりの接点が」

優が、声を落とせとジェスチャーをした。

瑠奈が客を案内して、知らん振りして脇を通り過ぎていった。

「ミナミのレジャービルの現場で……、あ、そうだ。そのときだ。立成さんと伊知さんを紹介したのは。金谷さんがふたりを紹介したんだ」

「は？ 待って。それ、おでん屋さんでノブがした話？ あの長髪のおっさんが、ふたりを紹介したん？」

「そうそう、そうだった」

「はあー、しっかりしてよね。情報は正確に」

「そんなこといっても、あのときはこんなことになるとは」

「で、そのとき、四人ともインタビューを受けた仲ってことを話したんやね？」

「そう。で、みんなでへえーってなって、名刺交換を……。いや、伊知さんは持ち合わせがないって……」

優が中指で睫毛の辺りを撫で始めた。

化粧けのない優ならではの癖だ。

考えごとをしているときに出てくる。

「ここで、立成さんがこの人の輪に登場か……」
優の思考が飛んでいく。

「ところでユウは立成さんをどう見てる？」

「頭が切れる。朗らかで楽しい人」

「へえ。珍しい印象だな。普通の人は怖いと」

「そお？」

「誤解されやすい。見掛けがあれだから、相手は腰が引けてしまつて、わかりにくい気がするんだけど、実は非常に分かりやすい人」

「分かりやすい？ 利己的な面は分かりやすいけど」

「利己的？ あ、そうか。分かりやすいのはそういう面だけか」

「そつがなさすぎる。かえって裏がある感じ」

「なるほどねえ。かれこれ十年程になるけど、そんなふうに感じた

「ことはないなあ」

「大丈夫かな、ノブは。それがキミのいいところやけど」

「ほっといてくれ」

「ほっとけないから付き合っ
てあげてるのよん」

「チッ」

「あの長髪は立成さんと古い付き合い。仕事の面で、相当な部分を立成さんに依存していた、と」

「勝手に想像するな」

「違うの？」

「ま、依存というのは言い過ぎでも、以前はそついう感じは少なからずあったかな」

「よし、推理ノートに書いておこつ」

「推理ノートお？」

優の瞳が輝き始めていた。

16 特定音階嫌悪症

生駒は心配になってきた。

「推理というからには、真相に迫るということだよな」

「当たり前やん。私たちが伊知さん殺しの犯人を捕まえる」

「はあ？ また、そんな子供っぽいことを」

「なに、その言い方」

「おまえなあ」

「慎重にってことやんね。だ・か・ら、分かってるって」

優はむきになって言うが、殺人事件なのだ。時間を掛けることが目的の会議を重ねているのとはわけが違うのだ。

「心配だな。しかしまあ、どうせ事件が解決するまで、あれこれ考えてしまうことになる。だから、ま、推理するのもいいけど、約束してくれ。すべて僕に相談してくれること。勝手に暴走するのだけはやめてくれ」

「当然やんか。ノブと一緒にでないと、私ひとりではなににもできないんやし。でもさ、私からも要望事項があるんやけど」

「ん？」

少々痛い言い方をしたのかもしれない。優が堅苦しい表現で返してきた。

「私が迷走しないように、ノブの方からも知っていることはすべて吐き出してくれること。もちろん自主的に」

「わかった」と言っておくしかない。

「素人判断で、これは関係ないだろって黙ってないこと」

「はいはい」

「ちよっつとでも気になることは、私の耳に入れてくれること」

「はいはい。いかにも僕は素人で……」

「関係者と思われる人と会うときは、必ず私も同席させ……」

「もう、わかった、わかった」

「そう。一緒にやるの。それにさ、風と女は閉じ込められないって」

「なんだ、それ……。危険な臭いが……」

「さてと。まずは警察の動きやね。敵を知らねばなんとやら」

「おい、出し抜こうっていう腹じゃないだろうな」

「そんなつもりなんてないよん。でも、それくらいの気持ちでかからないとね」

「おい！」

「どうせ、警察はなんの手がかりも掴んでないんやから」

「断言するな。案外、もう犯人を捕まえて」

「そう？　じゃ、聞いてみよ」

「誰に？」

「瀬謡さん。あの人、伊知さんの昔からの友達やから。それに長髪のおっさんのことも知ってるみたいやし」

やはり優はたちまち人を巻き込みにかかる。

それに瀬謡は最も悲しんでいる人のひとりに違いない。そんな人に聞くようなことか。

「よく考えもせずに、バカな真似はやめとけ」

「大げさやねえ。こうは考えられへん？　瀬謡さんも誰かと話したがってるって。ノブは適任かもしれないよ。伊知さんのことも長髪のこともそれなりに知ってるんやから」

瑠奈が戻ってきた。

「ちよっとお二方、そんなやばそうな話、大声でしないでいただける？」と、笑いながら席についた。

「ね、ルナはどう思う？」

優は瑠奈を援軍にする気だ。ミラーサイトの件はどうした。

「気が済むまでやったら？」

「そうやよね！」

いよいよ心配になってきた。優は今にも瀬謡に電話しかねない。

「待てよ。本気か？」

「ノブが仕事を棒に振るようなことになったらだめよね。その辺はちゃんとわきまえてるから」

優が瑠奈の前でもノブと呼んだ。もうどうでもいいが。

「そう思っただったら、よく考えてからにしろ。それにおまえはうちの社員ということになっているんだから、もっと慎重に、だ」

「ハハ。だから、それも分かっているって。でも、ルナが騙されなかったんやから、瀬謡さんの目なんてごまかせるはずがないやん」

瑠奈も笑う。

「私もそれはそうだと思います。じっくり観察されたんですよ」

「ほれ！」

勝ち誇った優が、ポーチから「すみよし」の名刺を取り出した。

「待て、わかった。その前にもう少し整理してみよう」

「ついそう言ってしまった。」

「おう。やろうやろう。名探偵の助手君」

いい気なものだ。

「では、口火を切りたまえ」

瑠奈はと見れば、こちらの方も興味津々。ちよつと待つて、私も飲み物を取ってくるから、と長期戦の構えだ。

「じゃ、まず関係者を列挙しよう。あのブログ関係者やパーティの出席者しか僕らは知らないから、あくまでその中からだ。まず、芳川了輔さん」

「ええっ」と、瑠奈が目丸くする。

「あくまで関係者やね。犯人候補という意味じゃなく」

合いの手は優。

「立成清次さん。金谷健吾さん、瀬謡佐知子さん。これくらいか」

「は？ たったそれだけ？ 寂しすぎるやん。丸山さん夫婦。松任さんも入れようよ。それに伊知さんが連れて来ていた人も。名前を知らないから付き人ってことにしておこう」

「コンパに誘うみたいない方だな」

その「関係者」と最近どこで会い、どんな話をしたかを含めて、近況や知り合ったきっかけ、そしてパーティでの出来事などを披露しあった。

しかし、そう都合よく有益な情報が出てくるものではない。目の前で起きたことの表層を撫でて確認しあっただけのことだ。

「推理なんてやっぱり難しいだろ。伊知さんがパーティで誰と話していたかってことも、ほとんど分からない」

「そういう意味では、松任さんよね。一番気になるのは」

「ん？なぜ？」

「彼女、パーティの最後の方は、伊知さんばかり見てた」
生駒も思い出した。

「そっぴや彼女、疲れた顔してたな」

「うん。松任さんって、なんか変。ノブはどんな印象を持ってる？」
「詳しく知らないから、なんとも……」

パーティの日、同じような質問に応えたことを優が忘れているはずがない。生駒は優の真意を測りかねて、言葉を濁した。

「だからインシヨー」

しかし、優は畳み掛けてくる。

「うーん。理知的で頭の切れる人。それに女性らしいところも。着物のセンスもA級」

「同感。付け加えるとすれば、隠しことをしそうな感じ」

一方的に褒めたことが気に入くないのか、優の言葉には微妙に棘があった。

「でも、優秀だ。芳川さんの折り紙つき。ねえ」

生駒は瑠奈に同意を求めたが、

「私もそうだとは思います」

と、こちらの賛意も、どこなくおもしろくないというニュアンス。「できる人、なんやろうけど、神経質そうでちょっと冷たい感じ」と、優がさらにいう。

あ、なるほど。

優は、瑠奈と松任が、芳川を取り合う敵同士という間柄を想定した上で、ここはあえて松任をあげつらい、瑠奈の肩を持ったということなのだ。

瑠奈が知らん顔をしてグラスに唇を触れている。

「インタビューねえ……」

そう言って優は、宙を睨み始める。

睫毛を、次に眉間をさすった指が、すっと降りてテーブルの縁を撫でた。

「一番出席率が一番よかったのは、実はルナかも」

「まあね」

瑠奈がもつとも大切な情報を持っているかもしれない、と優が誉めそやして、話題再開となった。

「ほかに気がつかれたことはありませんか。どんな些細なことでも」と、優が芝居じみた刑事の口真似を始めた。いつのまにか進行役は優に代わってしまっている。

「では次に、丸山さんのインタビューの様子をお聞かせ願えますか」「いえ、そのインタビューはこの店ではなく……」すみよしでしたという。

優の指がまた瀬謡の名刺をいじり始めた。

生駒はふたりの事情聴取ごっこを聞きながら、また金谷のことが気になりだしていた。

何かを思い出そうとするときのもどかしい感覚。どこかで何かを読んだような……。

「でも、丸山さんが次に紹介した人と、ここにお見えになったときのことならお話できます」

「ほお、何か変わったことはありませんか？」

「芳川さんが丸山さんのインタビュー記事の感想を聞かれたとき、あの方は、こうおっしゃったんです。はつきりと。少々不満がありますね、と」

「ほおおー」

「話したことの半分も書かれていない、ということがご不満のようでした」

瑠奈はいったいどういう神経の持ち主なのだろう。

優と昔の友人だというものの、お遊びのような推理ごっこに真顔で付き合っている。伊知とは縁もゆかりもないはずだし、まじめに事件に取り組もうとしているとは思えないが。

刑事に答えるよりもっとしゃちこばった言い回しで、優の質問に応えている。

ほんのりと艶っぽい笑みを浮かべて。

そつなく話題についていだけでなく、さりげなく存在感もアピールしている。

そしていつのまにか、場の主役になっている。

グラスの水滴がコースターから外れてテーブルを濡らしていた。生駒はその水を人差し指で擦った。クククツという音。

「イヤアア！ ダメ！」

突然、瑠奈が素っ頓狂な声を上げて飛び上がった。思わず生駒まで腰を浮かした。

「ワッ、ごめん」

瑠奈が耳を両手で覆っている。客の視線が集まった。

「そんなにびつくりしなくても」

「ヤメテエ……、ウウウ」

まだ瑠奈の顔が引きつっている。

「ちょっと、大げさとちがうん？」

「ダメなのよ」と、瑠奈はようやく恐る恐る耳から手を放した。

「絶対ダメなの、その音」

おしぼりで額を押さえる指がまだ震えている。

「その音って、今のクククッっていう音？」

「止めて！ □真似するのも！」

「へ？」

「生理的に受け付けられないの。あの高さの音がダメなのよ」

「はあ？」

「音楽の中なんかで細切れになつてると、なんともないんだけど」

瑠奈がようやくほっと息を吐き出した。

「少し長く続くと、もうダメ。一分も続いたら気が狂ってしまうわ」

「へえー」

瑠奈は急速に元通りの艶然とした顔に戻っている。

一種の特異体質か。

あるいは奇人か。

少し注意して付き合ったほうがいいかも。生駒は不信感があらわとなった自分の顔を引き締めた。

「誰でも嫌いな音つてあるじゃない。その極端なタイプ。泡を吹いて倒れたこともあるし、一度なんか、わけが分からなくなって大暴れしたこともあるのよ。とあるお店で」

平然と言う。

「へえ、そうなん。それって困るやん」

なにこともなかったかのような会話。

「困るわよ。だから、たいていの人には知り合ったら最初に断っておく。いい？ ユウ、私は特定音階嫌悪症 *gis* タイプなの。これ、覚えておいてね」

「はあ」と、さすがに優もあきれ返った顔になった。

「それってルナの造語？」

「そうよ」

「……」

「あ、嘘クサって顔してる。ほんとなんだから」

「聞いたことない」

「それほど珍しくもないのよ。私の身の回りに、もうひとりいるわ。症状はもうちよつと軽いけど」

「……、ところでさ」

ようやく、あのことを問いただすときが来た。

「ミラーサイトのことなんやけど」

「え、なんなの、それ」

瑠奈が本当に知らないのか、嘘をついているのか、生駒にはさっぱり分からなかった。

17 女の勘

JR垂水駅から程近い寺院で伊知の告別式は行われた。

喪主は井端哲郎。父親だという。別居中の夫は、夫としての最後の勤めを放棄していた。あるいはすでに夫婦ではなかったのかもしれない。

阪神淡路大震災で被害を受けた大屋根の補修工事が終わったという掲示板の文面を見やってから、生駒は山門をくぐっていった。

砂利敷きの境内に人が固まって立っていた。

受付で名刺を渡し、遠慮がちにその集団に近寄っていく。

「暑い中をわざわざ……」

瀬謡に声をかけられた。

「どうも」

見知った顔は瀬謡ひとりだけだった。

「ありがとうございます。知らせていただいて」

「いいえ。伊知さんとお知りあいだとおっしゃってらしたから」

パパラッチでミラーサイトの話をしているときに、瀬謡の方から電話をもらったのだった。伊知の告別式の日取りが決まったと。

僧侶の読経が始まった。

日向に立ち尽くす生駒。

九月とはいえまだ強い日差し。背中に汗が流れ落ちていく。靴底を通じて伝わってくる熱を帯びた砂利の感触。死に遅れたツクツクボウシの細い声。

遺影を真正面に見ながら、生駒は時間が過ぎていくのを待った。

よく知りもしない伊知と、最後の別れをしに来ようという気になったのは、せつかく教えてくれた瀬謡の手前ということだけではな

かった。連絡が取れない金谷と会えるかと思っただからだ。

そしてもうひとつ。ある考えが心に浮かび、確かめずにはおれない疑問となっていたからだった。

瀬謡は一心に口の中で呟いている。

南無妙法蓮華経。

あのざつくばらんな威勢の良さは消え、悲しみの影が全身を覆っている。

青春時代から続いている伊知との親交を、思い出として振り返るにはしばらく時間がかかるだろう。今はまだ悲しみに身を委ねるだけ。

生駒は改めて遺影の伊知を見つめた。

瀬謡に比べてどれほどの思い出もない。どうということもないトピックスがあるだけ。

悲しみや怒りなど、沸き起こる感情もさほどないまま、そのささやかな記憶を弄んだ。

「うあわ、涼しい」

快速電車は空いていた。

シャツに浸み込んだ汗が一気に気化し、ぐんぐん体温を奪っていく。この調子では大阪駅に着く頃にはガタガタ震えているかもしれない。

四人掛けシートの隣に座った瀬謡が、黙って窓の外を眺め始めた。

電車が動き出すと、たちまち窓に瀬戸内海の景色が広がった。次の停車駅である須磨まで九分だ。

「窓が開けられたら、潮風を吸えるのにね」

「開けたら？」

「じゃ、ちょっとだけ」

瀬謡が少女のようにチョロツと舌を出して、窓をわずかに押し上げた。生暖かい風が、ピュウと音をたてて流れ込んできた。

「いい香り」

右ひじを窓枠に乗せ、その上に顎を預けて窓外の景色を眺めている。できるだけ濃い潮風を吸おうとしているかのように。

「瀬謡さん。伊知さんの事件。どうなっているんだろ」

「さあ。まだ捕まっていないんだろ」

こちらを見ないでいう。

「金谷さんは来てなかったな。聞きたいことがあったんだけど」

瀬謡の髪が風にあおられてなびいている。

バラバラになった艶のない髪が、この女性の年齢をそのままに見せていた。

瀬謡は窓の外に顔を向けたまま。生駒の話に乗ってこない。

「大阪湾も案外広いんだ」

のんびりした言葉とは裏はらに、黒装束の疲れきった中年女の後姿は、やけに小さく細く見えた。

生駒は重ねて聞いた。

「金谷さんのことをどう思う？」

「うん？」

「事件とは関係ないことなんだけど」

生駒は言い出しておきながらためらった。瀬謡にどうでもいい話だと思われそうで、言いにくかった。

やっと瀬謡が顔を向けた。

「なんでも知っていることは話しますよ。譬のためになるなら」
理不尽にも故人となってしまう友に対する哀悼の気持ちだが、その言葉に滲んでいた。

「実は須磨の海の家のことです」

「は？」

瀬謡の瞳に不審の影が覆った。

「ごめん。つまらないことだね」

生駒はすぐに謝った。

やはり聞くべきではなかった。

この男はこんなときに、しかもいい歳をして、些細な思い出にふけている、と思われてしまった。

車内放送が須磨駅に到着することを告げている。

「あれから金谷さんと連絡を取ろうとしているんだけど、ずっと留守電のままで」

今度も瀬謡は、また、それがどうしたというような顔をした。

悲しみの最中にいる人から、事件に関連したことを聞きだすのはむづかしい。そもそもなにを聞き出したいのかさえ、あやふやなのだから、なおさらだ。

「でも、えっと、こんな言い方はまずいかもしれないけど、伊知さんが殺されて、その交際相手の金谷さんが行方不明。その、つまり、なにかあるんじゃないかと」

「行方不明？」

「瀬謡さんは今日のこと、金谷さんに教えた？」

「ううん。芳川さんと生駒さんだけ。芳川さんは所用で参列できないから弔電を打っておくって」

「そう……。警察は金谷さんに事情聴取したんだろうか」

「そりゃ、そうだろう」

プラットホームに電車が滑り込んでいく。広告看板で海は見えなくなっただけ。

またあの懐かしさが蘇ってくる。

「パーティの日、初めふたりは仲がいいようには見えなかった。むしろ他人を装っているような。伊知さんが連れて来ていた人が息子さんだとしたら、それも、ま、ふたりの関係からすれば分かるんだけど。それにしても……」

瀬謡の目が動いた。

やっと関心を持ってくれたようだ。

窓を下ろした。垂水駅で買った缶コーヒーのプルタブにゆっくりと指を掛けた。

なんでも話すとは言ったものの、迷っているのだ。

冷たい液体を口に含んで、ようやくその気になったらしい。すつと背を伸ばし、体を寄せてきた。

「あれはさ、私の娘」

一瞬、生駒はなんのことが、分からなかった。

「えっ？」

「驚くだろ。あれで、女なんだよ」

「娘？」

あれは瀬謡の娘？　女だったというのか。中性的で可愛い子だとは思ったが。

「す、すみません」

「いいのさ。本人がそう見られたいんだから。親としちゃ心配だったけど、もうひと安心さ。あんなのでも、もらってくれる人がいたからね」

「ご結婚されたんですか」

「そこを驚いちゃダメだよ」

「い、いや、そういう意味じゃ」

「ハハハ。馨の事務所で働いているんだよ。あたしから彼女に頼んでね。雇ってもらったのさ」

「あ、道理で、伊知さんがあの人を残して帰ったんだ」
「そういうこと」

瀬謡は今日始めてうれしそうに笑った。

「でね、うちの娘、美咲っていうんだけど、一昨日に新婚旅行から帰ってきてさ。驚いてたのってなんのって」

まさか娘自慢でも始まるのだろうか。しかし違った。

「今朝、聞いたんだけど、馨の携帯電話の履歴を調べたんだって。大切な仕事の連絡なんかが入っているとイケないからって」

そう言う限りは、生駒が聞いて驚くような連絡が伊知の携帯に入っていたということなのだろう。

「それで？」

果たして、

「金谷さんからの連絡が入っていたそうだよ。仕事じゃないみたい。な。四日の午後に会いたっていう」

「四日の午後……」

「そう、馨が殺された日。もちろん警察もそれを確認してるだろうから、彼を、例の、ほら」

「重要参考人？」

「それ」

生駒は唸ってしまった。

犯人は金谷に決まったみたいなものではないか。

連絡が取れないと思っていたが、すでに警察に捕らえられているからだったのだ。生駒や優の素人探偵など、もう出る幕ではなかったのだ。

しかし瀬謡は眼を落として、小声で言った。

「でも、どうもあたしはしっくりこないんだよね。理由はないよ。勘みたいなもの」

「勘ですか……」

「女の勘をバカにしちゃだめだよ。生駒さんと三条さんの関係も私の勘によれば」

「もういいよ」

「ばれているのは先刻承知だ。」

「別にバカにしたわけじゃない。でも、女の勘といっても、その根拠は？」

「勘だから、根拠なんてないさ。ただ……」

瀬謡の心が揺れている。缶コーヒ―を回して混ぜ合わせている。

「話してくれるかな」

「そうだね」

あっさり瀬謡は話し出す。

優のいうとおり、この女性は友の死を前にして、誰かに聞いて欲しいことが山ほどあるのかもしれない。

「実はさ、馨と金谷さんは幼馴染なんだって。この間は、みんなに誤解されるような言い方をしてしまったけどね」

瀬謡は、長田の巨大な鉄人28号を眺めてから、呟くように

「羽目をはずしすぎて馨に申し訳ないことをしたよ」と、うなだれた。

先日のおでん屋での噂話のことを言っているのだ。

「ああ、僕もね」

「でもさ、それが最近になって再会したのか、ずっと行き来があったのか、それは知らない。ただ、ここ数年、付き合っていたのは確か。でも今はきっちり別れていたはずなんだ。馨が愛想をつかして」

瀬謡が言葉を切った。

ん？ でも……。

「それじゃ、金谷さんが犯人ではないという勘の根拠にはならない」

んじゃ……。愛想をつかされた金谷さんが自暴自棄になって……とか」

「別れた理由ってものがあるんだよ。丸山さんの奥さん、祥子さんっていったわね。金谷さんは彼女が好きだった。馨とは別に、祥子さんに気があつたらしいんだね。どういう知り合いなのか、あたしは知らないよ。でも金谷さんは丸山さんに負けた」

生駒は暗澹たる気持ちになった。

十分に生きてきたはずの男と女。

そこに、くだらないメロドラマみたいなことがあつて、それがこの事件の背景にあつたというのは。

「祥子さんが丸山さんを選んだことがはつきりした日、金谷さんは飲みつぶれてさ」

しかし、瀬謡の言葉が正しいとするなら、パーティの日の金谷と丸山そして祥子の悶着の原因がわかった。

金谷は友といえるような付き合いではない。しかし、仕事を共にすることもあり、親しい仲の相手だとはいえた。その男が女性を巡って競い合い、拳句に……。

やりきれない思いがした。

「馨と一緒にうちの店に来たことがあるというのは、その日のことさ。馨は柄にもなく介抱してたよ。まるで子供だね。ふたりともいい歳して。青春ごっこさ」

瀬謡が、ため息をついた。

「ところが金谷さんは、他人の妻になっても祥子さんを忘れられなかったらしい。馨の性格を考えてみて。そんなうじうじした男なんて、彼女はあつさり愛想を尽かすだろ。だいたいそういうことさ」

「なるほどねえ。だから事件には関係ない、か……」

「そう。金谷さんが殺したい相手は、馨じゃなくて……。だからさ」

「警察に言っておいた方がいいかもよ。じゃなきゃ、金谷さんは踏んだり蹴ったりで」

「あたしはあの男には義理もないし、好きでもないね」

「そういう問題じゃないだろ」

「ま、そうだね。金谷さんが捕まったらね」

「ん？ 捕まっているわけじゃないのか」

「誰がそう言ったんだい？ まだ、捜査は目に見えた形では進展していないはずだよ。一応、馨の会社の方へは警察から、さわりだけは教えてくれるし、その情報は娘が知らせてくれるからね」

生駒はなぜか少しほっとした。

「それにしてもさ」

瀬謡がいきなり明るい声を出した。

「生駒さん、気づかなかった？」

「なにを？」

「松任さん、馨と親子だったんだね」

「えっ！」

「親族焼香のときに呼ばれただろ」

気がつかなかった。

「お焼香の順番からすると、どうも馨の娘ということになるね」

「ええっ、それは……」

また新しい人の輪か。

「あたしも知らなかったよ」

伊知には娘がひとりいた。

しかし高校生のときに家出してしまい、以降、伊知はその話を瀬謡にしなかったという。

「あたしもすっかりしててさ。いつの間にか忘れてしまってたんだ」

瀬謡はまた遠くを見る目をしていた。

「それに彼女、あの性格だろ……。あたしにも譬は……」

妙なことを口にしたと瀬謡は思ったのだろう。また、窓の外を眺め始めた。

そして、

「死んでしまった人に恨みがましく言うつもりはないけど」と、言い添えた。

なんでも言い合える友だからこそ、傷つけてしまうこともある。

伊知とはそういう仲だと思っていたのに。

瀬謡はそう言いたかったのだろう。

神戸駅に着いて、乗客がどつと乗り込んできた。

向かいの席に背広姿の若い男が座り、マクドナルドの紙袋を開けた。その傍若無人な臭いに瀬謡と生駒の情報交換はお預けになった。

18 ミルクの匂い

優が玄関ドアをガバと開けて入ってきた。食料品を買い込んでくれたらしい。スーパーの袋を抱えている。

「どうやった？ お葬式」

「瀬謡さんだけ。でも、驚くことが」

優は早速、スーパーの袋から安いけどおいしい硬いドーナツを取り出した。

「へええ、松任さんは伊知さんの娘なのか……」

優がなにかを思い出そうとするかのように、睫毛に指を当てた。

「で、他は？」

ミルクの紙パックにそのまま口をつけている優に、瀬謡と快速電車の中で話したことを伝えた。

「そか。丸山さんのインタビューは情報なしか」

優は相変わらずのピンクのＴシャツにジーンズ姿。しているのかしていないのか分からないほどの化粧。
生駒はなんとなくほっとしてしまう。

「でも、続きをしたいらしい。できたら店に来てくれって」

「お、いいぞお」

パンツと手を叩いてから、優はすつと腕を伸ばして、生駒を軽く抱きしめた。

「私からも情報があるよーん」

優の唇が生駒の唇に一瞬だけ触れた。

「ルナは松任さんに家に来てもらっやて。ピアノの調律に」
ミルクの匂いが生駒の鼻に残った。

「へえ。で、それが？」

「今は情報収集の段階。結論を急いではダメですよ。助手君」

「はいはい」

生駒は優を離すと、スーパーの袋を開けてみた。いつもの野菜ジュースの紙パックやおなじみの冷凍餃子に混じって、カルビやハラミのパックが入っていた。

「お、今日は焼肉をしてくれるのか」

「ノブのメタボに拍車をかけてあげようかと」

「アホ、僕はまだそんなのになってない」

「そうかな。でさ、悪徳税理士と松任さんの馴れ初めも分かったよん」

優は、ノブはこれらすべて一切れだけだよ、などといいながら肉のパックを見せびらかした。

「松任さんがまだ独身だった頃、数年前ね、ふたりは同じ打ち放し場でゴルフレッスンを受けてた仲間なんやて」

「で、芳川事務所に」

「そう。引き抜かれた」

優がにやりとした。

「あいつは松任さんをととても可愛がってるって。仲人やったんやつて。すぐ別居したけど」

「ふうん別居ねえ。理由は？」

「さあ、それは聞かなかった」

「じゃ、芳川と瑠奈の馴れ初めは？ さしずめ北新地か」

「ご推察のとおり。パッケージ化された打算的な恋」

「パッケージ化されるほど、よくあることかいな」

「さあね。案外、多かったりして」

優は、物を口にして落ち着いたのか、買い物を冷蔵庫に入れ始めた。

「それにしても、人の付き合いってどんなことから始まるか、分か

らないよな。友達も恋人も、そして愛人さえも」

「人の輪の話？ そっぴいや私たちも」

「ん？」

「忘れもしない……」

「そんなことはどうでもいい」

「どうでもいい？ そんなものなん？」

ハハア。前振りだな。

優の癖だ。大事なことを口にする前に、一旦、全く関係のない話に振り、関心を引きつけておいてからポンと目の前に出すというパターンだ。

「ところで、松任さんと瑠奈の仲はいいのかな。調律を頼むって。きつと違ふよな」

こんな感じの話だろうと、生駒は先回りする。

「ハハア。さすが助手君。鋭いやん」

「芳川を巡って」

「張り合って」

「ああ」

「そう。ふたりは性格も違ふし」

「気が合ふってこともなさそうだし」

「あ、そうそう、あの店ね」

「やっぱり」

「うん。悪徳税理士の名義。表向きは瑠奈が経営者だけど、実質的にはスケベ親父がルナに生活費を渡すための仕掛け」

「愛人関係を目の当たりにして、どう？」

「あの子、その辺、あけっぴろげやからなあ。そんなことを聞くこつちがヒヤヒヤする」

「しかし、ちょっと変だな。たまたま何年振りに会っただけの前に、そんな話をするか？」

優はキッチンを出て、ソファに腰をおろした。

「うっん。だからこそ、かな。自分は成功しつつあるって見せたいんや。あの子は自分のお店を持つことが夢やった」

「ふうん。で、おまえら、そんなことを競争してたんか？」

優は思い切り伸びをすると、そのまま手を頭の後ろにやって、もたれ込んでいる。

「まさか」とは言ったものの、思い出すことでもあるのか、遠くを見る目をした。

生駒はふと、優の夢って何だろう、と思った。

今のこの生活が、優にとって夢だったはずがない。

これから自分は、この娘に何かしてやれることがあるのだろうか、と思った。

「瑠奈は夢に近づきつつあるけど、それをもっと確かなものにするためには、パトロンの力がまだどうしても必要。つまりあの親父は絶対に手放せない男」

「当然、松任さんに芳川の関心が向くのはいやなんだ」

「だと思っ」

「じゃ、なぜ、ピアノの調律をわざわざ松任さんに頼む？」

「立場の違いを強調したいから。そんなところやないかな」

「愛人対雇われ人の眼に見えないバトルってか」

「あいつ、松任さんの生年月日もきっちりチェックしてた。三十一歳。昭和四十九年九月生まれ。若さでは絶対に勝てるってね」

生駒は小さくため息をついた。自分の経験の中にはない妙な人間関係を目の当たりにしたようで、げんなりしてきた。

「ところで彼女はどうか？」

「どっつて？」

生駒は瑠奈の陰口のひとつでも出てくるかと思ったが、まったく違った答えが返ってきた。

「彼女は事件に関係ないんじゃないかな。今のところ、伊知さんと

の接点が見えてこないし」

「もし瑠奈さんが、伊知さんが松任さんの母親だということを知っていたとしても？」

「おおー、ノブ、考えたやん。でも、まさかね」

「調律ってどんなことするか知ってる？」

「さあ。数年に一度くらいはやるんだろ」

「日常的に弾いている人は、きちんと年に一回するらしいよ。コンサート会場においてあるピアノなんかはその度に調律するし、ピアノリストによつては専属の調律師を連れて行くんやて」

「詳しいな」

「へへ。歌手やから。ほんとに瑠奈から聞いてん」
「わかつてる」

「料金は普通の調律師ならグランドピアノで一万三千元、アップライトピアノで一万円くらいが相場」

「ふうん。そんなに儲かるものでもないんだな」

「特殊技能があるからって儲かるものじゃない。そういうことやね」
「特殊技能ねえ」

「絶対音感」

「ああ、あれな。幼児のときにしか身につかないってやつ」

「そうでもないらしいけど。ノブも絶対音感ならあるやろ」

「なんじゃそれ？」

「この音がうだとしたらこの音はなんでしょう、と聞かれたら？」
「なるほど」

優の夢。

それどころか、生駒は優の本当の暮らしさえ知らなかった。

神戸生まれの大阪育ち。知っていることはそれだけ。

神戸の女子大を出たことは聞いてはいた。松蔭か武庫川か女学院か、あるいは女子薬と聞いても、優は笑っているだけだった。両親

が神戸に住んでいるのかどうかさえ知らなかった。

また、優が歌手やコンパニオンやモデルをしながら食べているとは聞いてはいても、それがどれほどのランクなのかも知らなければ、それらのギャラがどれくらいなのかも知らなかった。

そういったことを生駒は知りたくないかといえば嘘になる。ただ、それを聞いてどうする。いや、むしろ、自分にはそれを聞く資格がないと、思っていたのだ。それらを知ったからと言って、優を幸せにできるわけではない……。

「そっぴやブログインタビューの松任さんの話。(ラ)の音でコンサート前のチューニングはするって書いてあったな」

「うん。私も、ブログ、何度も読み返してるねんで。ミラーの方も」
優はパソコンの前に座り、芳川ブログを開いた。

「ご苦労さんなことやなあ」

「当然やん。事件の鍵はここにあるってね」

優が芳川のブログを開いた。

そして楽しくてしかたがないという調子で、変なことを言い出した。

「ね、音ってさ。脅迫に使えないかな？ 嫌いな音を四六時中聞か

されたら、精神が徐々に参っていくって。一種の拷問みたいな」

「何の話？」

「思いつき。ルナも言ってたやん。あの音をずっと聞かされたら、気が狂うって」

「特定音階嫌悪症、だったかな」

「それ」

「そんな病気があるんかいな」

「瑠奈のケースを見て思ったんやけど、音にはそういう力があるけど、色にはそんな力はないかもって」

優が生駒のときのインタビュー記事を開いた。

「いくら嫌いな色に囲まれていたからって、どうなるもんでもないし。臭いもきつとそう」

「まあな」

「音や臭いはインパクトが弱いんやと思う。花やお料理の匂いを嗅いでも、泣くことはできない。でも、歌を聴いて涙は流せる。少なくとも私は」

「そりゃ、メロディじゃなくて詩がいいからだろ」

「また理屈を言って」

「あのなあ、だから、なんなんだ、この話」

「私ならインタビューでそんなことを話したかなって」

「はあ？ やめとけ。それこそ理屈っぽい話。誰が喜ぶ？」

19 ペタペタ、カロンコロソ

————0622 芳川ブログインタビュー18

十八人目のインタビューは生駒延治さん。

建築家。

住宅や店舗などの設計をされている。インテリアデザイナーとしても定評がある。

お題は「走る靴音」

バタバタ、ドタドタ、パタパタ、タツタツ、カツカツ、ペタペタ、カロンコロソ。

足音を表現する言葉ってたくさんありますね。

雨の中ならビチャビチャ、ピチピチチャプチャプ。

雪の上ならキシキシとかキュッキュというのもあります。

擬音語かどうか怪しいところですが、ヒタヒタというのもありますね。

こうして並べてみると、足音はあまり「いい音」というように捉えられていないと感じませんか。

なんとなく粗野で行儀が悪く、耳障りな音。足音というのはそんな音なんでしょう。私の思いつきですよ。

足音をテーマにお話しようと思ってから、はたと思いついた「生駒説」です。

もう少し詳しくこの「説」を披露すると、こうなります。

「他人のたてる足音は雑音である」

それは後ろから忍び寄る犯罪者の足音であつたり、逃げていく足音であつたり、病気で寝ている枕元を平気でミュールサンダルで歩き回つたり、躑のできていない子供がコンサート会場で走り回る足音

だったり。

つまり、耳で聞こえる音は総じて悪役です。

逆に、耳で聞こえない足音、あるいは歩く様子を表す言葉はどうでしょう。

テクテク、トボトボ、シズシズ、ノシノシ。

良くもなく悪くもないといったところでしょうか。

さて、私の好きな音として足音を選んだわけをお話しましょう。足音を現す音の中でたぶん唯一気持ちのいい響きがする音です。タッタッタ。走る音。

実はジョギングが趣味なのです。

運動することが第一の目的なのですが、もうひとつ効用があります。それは頭を空っぽにすること。一種の瞑想といえるかもしれません。リズムカルな自分の靴音と吐息を聞きながら、無心になって走りま

す。

もちろん苦行です。
街中を抜け、淀川の堤防を駆け上がるころになると息は切れ切れ、汗はボタボタ、リズムカルだった靴音も千路に乱れて。

しかし、ひたすら足を進めることに集中していると、いつしかその苦痛も忘れてしまい、無我の境地に入り込めるわけです。

眼が捉えているのは路面だけ。

周りの景色も網膜に像を結んでいるのでしょうが、明確な意識には昇ってきません。

鼓膜が音として捉えているのは自分の足音だけ。

走り始めは苦行だったはずが、一種のトランス状態のようになれるわけです。

理性が沈静化してくる。そして本能が突出してくる。

シャーマンは、たとえばドラムの音で刺激を受けながら恍惚状態になるといわれますね。

言ってみれば、それと似ています。

トランス状態になるからといって危険な男だと思わないでくださいよ。

偉そうな言い方をすれば、心の中に押し込めていた否定的な意識が解放され、ともしラックスできるというわけです。

あるがままの自分に戻って、無理やり動かせ続けている脳に一時の自由を与えてやるということことです。

タッタッタッタッタッタッタ、という単調なリズム音と共に。

「それにしても、ノブのインタビュー、テーマはジョギングのときの足音あ？」

「もうネタがなかったんだ。たいがい誰かに先を越されてて」

「でも、後の立成さんのテーマはショパンの別れの曲やん。しゃれてるやんか」

「反則だろ、それって。具体的な固有の曲のことなら僕にもたくさんあったのに」

「鉄人二十八号とか、大魔神が出てくるときの曲とか？」

「ああ、モスラのテーマとか、ゴジラが海から上がって来るときの音楽とかね

「時代がわかるね」

「それに、やっぱり思い出のある曲といえばユーミンの」

優は聞いていない。

「それにしてもさ、この堅苦しい表現はなんなのよ。特にトランス状態のくだり」

「もっと普通の言葉で話したと思うんだけど……」

「でもさ、話したことってこれだけ？ 短くない？」

「もっと話したよ。芳川のおっさんは、相当省略しているみたいだな」

「どんなことを話したん？」

「それがさ」

犯罪者が逃げていく足音にタッタッタは似合わない。

実際にそういうものを見聞きした経験があるが、軽快感はなく、パタパタタツツという感じ。

できる限り足音を忍ばせようとしつつ、焦る気持ちが足音に出ているという感じ。

「とかさ」

「くだらねえ。だいたい、出だしの生駒学説？が野暮ったすぎ！」

「へえへえ、ご指摘のとおり。でも、ジョギングのときの足音が好きです、だけでは話にならなくてな」

「実名で出すには、ちょっと恥ずかしい代物よね」

「そりゃ、いいすぎ！」

20 じれったい！

生駒を誘ったものの、果たしてあの話をしてもよいものかどうか。馨に詳しく聞いておけばよかったと思うが、今となっては後の祭りだ。

生駒との約束の五時まで、まだ少し時間がある。

瀬謡はおでんの湯気を眺めながら、パーティの日のことを思い出していた。

ゲストハウスを見て回ろうと伊知を誘った。

「手始めに、離れに行こ」

瀬謡は、先ほど立成が渡り廊下を通って離れに向かうのを見ていた。立成が馨とどんな話をするのか、と期待してのことだった。

立成からの預かり物を渡したときの馨の反応。

それは瀬謡の予想とは違っていた。受け取ることをためらうかと思っていたが、馨は、誰なんだろうと、案外うれしそうだったのだ。男性からのプレゼントなど、結婚して以来もらったことがない瀬謡と違って、馨はもらい慣れているのか、さっさと封筒を開けようとする。中身を見てはいけないと言われているという、そうなの、とあっさり机の引き出しにしまいこんでしまった。それきりだった。

「離れて、渡り廊下の向こうね」

離れ、つまり芳川がバーと呼ぶ吹き抜けの部屋に立成の姿はなかった。代わりに芳川と金谷、そして松任や何人かの客がいた。

「金谷さんが」

瀬謡は小声で水を向けたが、馨は関心がない様子。しかし会話が進み、好きな車の話になると、

「金谷さんもアルファロメオを？」

と、馨も話題に入っていった。

ただ、台詞がよそよそしい。

「ええ。車きちがいと言われています」

振られ男の方も、馨の態度と辻褃をあわせるかのように、まるで初対面のような言葉遣いだ。

「私もそうなんですよ。でも、スピードは嫌いです」

「私は飛ばす方でして。正確には覚えていませんが、事故歴は大小含めると十回は下らないでしょう」

そんなことをしらすらしく話している。

案外ふたりは、事前に、アカの他人同士でいこうと打ち合わせをしてきたのかもしれない。

芳川は事故歴自慢の話題には乗ってこない。社会的立場のある人としては賢明な態度だ。

松任も同様。ただしこちらは、はっきりと批判的な目を向けている。

「私は三十年間、無事故無違反。おたくとの違いは何かしら？」
相変わらずの他人行儀だ。

「さ、馨、お部屋を見せていただく」と、猿芝居のような二人を引き離した。

立成に、首尾よく渡してあることをまだ伝えていない。どこかで早いうちに伝えなければ。瀬謡はそれが気になっていた。

そして、馨の袖を引いてバーから出るなり言ってやった。

「金谷さんのこと、あたしが覚えていないとも思っている？」

「ハハ。ばれてた？」

「当たり前だろ。なんなのよ、あの臭い芝居」

「いやあ、驚いたわ。やっぱり、彼も来てたんだ」

「そんなこと聞いてないよ。なぜ知らん顔してるのかってこと」

「大人の世界ってところかな」

「なんだよ、それ。ばかばかしい」

美咲はおもしろいものでも見るように笑っている。中年女性がじやれあっているとても映っているのだろう。

「なにをしてもいいってもんじゃないだろ。いい大人なんだから。それともなにかい。更年期になる前にもう一花かい」

馨はだれかれなく男をくわえて、というわけではないが、もう少し地道な暮らしを、という気がない。

「いい加減にしなよ」

早足にリビングを横切る。美咲は気を使ってか、テラスに出ていった。

「ちよつとお、うちの社員の前で変なことを言わないでよお」

「言われて困るようなことをしなけりゃいいのさ」

「ハハ、ごめん、チコちゃん。怒った？」

階段を登りながら、馨は甘えた声を出す。

「あたりまえだろ」

適当に入った部屋には誰もいなかった。

「あ、ここ、娛樂室ね」

川沿いの北側の部屋で、バルコニーがついている。部屋の隅に折り畳みの卓球台が置いてあった。

馨は珍しいものにでも触れるようにその縁を撫でながらいった。

「実はね。金谷さんと私は」

「いい仲間なんだろ。それくらい、見りゃわかる」

「残念でした。ちがうわよ。幼馴染みたいなもの。ま、最近は少し付き合ってたっていえるかな。でも、それはもう終わっちゃったのよ。チコちゃんのお店に行ったときが最後の晩かな」

「あ、そう」

「彼には好きな人がいて、その人はもう結婚してしまったんだけど、まだ忘れられないみたいで……」

ふうん、としか言いようがない。

「名前まで聞いたんだ。それまでは、大人なんだから好きな人がひとりやふたりいても当然だって、なんとも思わなかったんだだけさあ。名前を聞いてしまうと、急にリアルな気分になってしまつて」

「で、別れた」

フン、くだらない。

「その割に、今は傍にいたそうだったけどね」

「あれは、芳川さんへの社交辞令。久しぶりに顔も売つとかなきゃ。それに……、松任さんもいたし」

もうどうでもよくなった。

どうせ最後はいつものように、チコちゃんのところは仲がよくていいよねえ、なんて半分小バカにしたように言われるのが落ちなのだ。

さ、立成の姿を探そう。

「あ、もう興味なくなった？ ま、私も金谷さんより立成さんの方に……」

えっ。

今朝、聲に渡したあの贈り物の封筒の中に、手紙が入っていたということなのか。

「はあ？ あの禿親父に？」

「勘違いすると思った。そういうことじゃなくて、昔の知り合いじゃないかなって」

煮え切らないこと、この上ない。

いっそ、あの封筒は立成からのものだと言ってみようか。

ところが、馨は、

「立成清次……」と、ブスリとつぶやいた。

顔には嫌悪感が滲み出ていた。

「たいしたことじゃないんだけど……」

「なんだか知らないけど、聞いてみればいいじゃない」

「そうよね……」と、窓の外に視線を泳がせている。

「でも昔のことだし……」

いつものことだ。

複雑な人間関係が好きな馨は、健在なのだ。

きつと立成にすれば、笑い飛ばすようなひと夜の出会い。あれは少々いたずらっぽいプレゼント。

「それに、もしそうだとしたら、どうするか……。あ、この部屋、鍵が掛かってる。いわゆる開かずの間ね」

娯楽室の付属室か倉庫だろう。

馨が扉をガチャつかせる。急に元気になった。この変わり身の早さ。馨の真骨頂でもあるが、疲れる。

「プライベートな部屋には鍵をかけてあるからって。あ、こら」

「だって、こういう部屋こそ興味があるじゃない。得体の知れない生き物を飼っているとかさ」

「いい加減にしな！」

瀬謡は扉の鍵穴を覗き込もうとする馨を引き剥がし、娯楽室を出た。

こじんまりとしたラウンジで、芳川が客と談笑していた。

「うわ、ここにもお風呂。素敵！ ほら、ガラス張り！ あ、露天風呂！ すごい！」

馨がわざとらしい嬌声をあげた。

その後、立成との接触はあったが、馨の旧姓である「井端という名の女性を覚えているか」、という自分で考えたアイデアは口に出せないままだった。

今日である必要もないし、そんな話も、店での話題のひとつとしてとっておけばいい、と考え直したのだった。

生駒が暖簾をくぐってやってきた。もちろん三条を伴っている。

瀬謡はビールを出しながら、単刀直入に切り出した。

「須磨の海の家のことなんだけどね」

告別式以来、生駒とはざくばらんに接するようになっていた。自分で言い出しておきながら、生駒は戸惑ったように、それが？と聞き直してくる。

「ずばり言おう。」

「昔、須磨の海の家で、ある女性が殺されたんだ」

生駒がハッと顔をあげた。

そしてたちまち困惑した表情になる。

「あの事件、ご存知のようだね」

生駒が須磨の海をのことを気にしていることが、引つかかっていた。それはとりもおさず、あの事件のことを生駒が知っているからではないか。生駒は、その上で、今回の事件を紐解こうとしているのではないか。

瀬謡はそれを確かめようとしたのだった。

「ああ。僕が働いていた海の家でのことだろうな。昭和五十年の夏だった」

「そう。あの事件、その後どうなったか知ってる？」

まさか、あの事件の犯人が生駒その人だというわけではないだろう。犯人なら今になって穿り返そうとするはずがない。

「いや。夏休みが終わると、僕は大阪に帰ってしまったし」

だが、生駒の困惑した表情はなかなか消えない。

生駒は当時のアルバイト生だという。なにを知っているというのだろうか。

「時効になったと、ずいぶん前に聞いた」
「そうだね」

例の人の輪が、現実のひとつふたつと結ばれた。

思いがけないところで知人や懐かしい顔に再会する、ということを目の当たりにした。

そして今、瀬謡の頭の中では、もうひとつの接点がああブログによってもたらされようとしていた。

記憶の中からぼんやりと浮き上がってきたひとつの名前。

それを誰かに話さずにはおれなかった。

21 携帯電話をまさぐる

「殺された女性は美弥子さんという人。当時の年齢は二十四。あの日、妹の馨、今の伊知さんだね、の友達と一緒に海水浴に行つて」
「えっ！」

予想通り、生駒にとっては思いがけない話だったようだ。

「伊知さんのお姉さん！」

「覚えているのかい？」

生駒がますます眉を寄せた。

「とんでもない偶然……」と、三条が目を見開いている。

「そう。馨自身は、なにかの都合で海水浴に行けなくなったんだろ
うね。当時、あたしは大学四回生だったけど、そのときのことはも
うあまり記憶にないんだ。馨自身は、その年に就職していたしね」

なぜか、三条が首をかしげて目尻で笑った。

瀬謡は構わず、今日の主題に向かっていく。

「海水浴に行つた馨の友達、なんという名だったか、生駒さん、覚
えてる？」

「いや……。その友達、男性……ですよね」

「そう。あたし、気になりだしてさ」

「男性か……」

三条がつぶやき、ギョツとするような名を口にした。

「もしかして、立成とか芳川とか、あるいは金谷とか？」

いいところを突いている。そんな予想がすつと出てくるとは、こ
の子の頭の中はどんな構造になっているのだろう。

「おい！そんなあてずっぽうを！」

生駒が三条を責めている。

「でもさ、なにせ人の輪の魔女、瀬謡さんの話だもん」

「フフ、もちろん人違いかもしれないわね。でも、なにが起きたつてもう不思議じゃない」

「ですよー」

と、三条がすんなり受け入れる。

「あたしさ、お客とこんな話をしたことがあるのを思い出したんだ」
ずいぶん前のことになる。立成も芳川もまだ常連というほどではなく、互いに顔も知らない時期のことだ。

その客はテレビニュースに映った須磨の海水浴場を見て、ここは好きじゃない、嫌な思い出があるから、といった。

「溺れたの?」「知っている人が死んだ」「まあ」「殺された」
「へえ、そうなの」

おでん屋で、それほど親しくもない客と交わすには重すぎる話で、男はそれきりその話題を持ち出すことはなかったし、瀬謡も聞くことはなかった。

「誰だったんです? 不動産屋? 税理士? そんな昔なら長髪のおっさんじゃないんだ」

「フフ。なんとなくそんな気がするだけで……。覚えてないんだよ。あのふたり以外の人もかもしれないし」

瀬謡はそう応えた。

心の中の小さな声は具体的な名前をささやいていたが、まだどうにも自信がなかった。

三条が何度もうなずいた。

生駒が目を向けてくる。その男性の名を知っているのだろうか。しかし生駒は、再び目を落としてしまう。

代わりに三条がニヤリと言った。

「瀬謡さん、歳、サバ読んでたでしょう。どうでもいいけど」

「えっ？」

「以前、生駒と同年だって言ってらしたけど、さっき自分はあのとき大学四回生だって」

「ワハハ。ごめん。五十の大台というのはちょっとね」

「フフフッ」

三条優、変な娘だ。

真剣なのか、おちゃらけなのか。しかし、間違いなく頭は切れる。

沈黙が流れた。

自分の記憶はあいまい。生駒も覚えていないのか、隠しているのか、黙っている。

いずれにしろ、あの事件を紐解けば何かが見えてくるかもしれない、生駒が何かを知っているかもしれない、というもくろみは今のところあてが外れた格好だ。

ただ、馨の大昔の友達が誰だったか、ということが分かったからといって、どうなるものでもない。

真相は依然として霞の底に沈んだままだ。

「パーティで海の家のが話題になったとき、伊知さんは昔の事件のことを思い出されていたんでしょうか。瀬謡さん、あれからなにか話されました？」

三条が先回りして聞いてくる。

「うっん。その話はしなかったよ」

ただ、馨は立成が昔の知人かもしれないといった。

瀬謡の心の中の小さな声は、立成が三十年前の、という言葉やさやいていたのだ。

ただ、おぼろな記憶が蘇りそうで形にならないという、腰の落ち着かない状態だったのだ。

そして、この声に従えば、とんでもない結論に至る可能性がある。

そう思うと胸が苦しかった。

「でも、なにか思い当たることはあるんですよね？」

三条に追い込まれて、瀬謡は腹を決めた。

「実は、パーティの日、馨がさ」

「そうなんですか。あのときの男性が立成さんだった、という可能性があるわけか……」

生駒が記憶をまさぐるように、両手をまぶたにあてがって、目を閉じた。

「それが今回の事件にどんな関連があるんでしょう」

三条が眉間に皺を寄せ、まつげの辺りを撫でながら聞いてくる。

「それがさ……」

瀬謡は自分の動悸を悟られまいと、ゆっくりと息を吐き、意識して穏やかに話した。

「ごめんね。こんなこと、なんの意味もないよね。たぶん」

努めて明るく言った。

「でもさ、こういう性分でしょ。気になると確かめずにおれないんだよ」

三条はにこやかに頷いて、言葉の続きを待っている。

「丸山さんに聞いてみようかな。生駒さんは同じ店でバイトしてたんだろ？」

「いや。そうかもしれないというだけで」

生駒は、まだ両手で頭を抱えている。

「ね、丸山さんのインタビューはここでしたんでしょ。そのとき、海の家の話は出てました？」

三条はさらにと視点を変えながら聞いてくる。冷徹、というほどに。

いや、冷徹というのではない。彼女の頭の中にはすでにストーリーができていて、それを単に確かめているかのよう。

「してたよ。線路の音を聞いた場所のひとつが、須磨ってことだね」
「はい。じゃ、他にはどんな話を？」

「んーと、そうそう。周波数とか振動数とか、難しいことを。列車の轟音をなんだか難しい数値をあげて解説してたよ。そこんこと、ブログでははしょってあるけど」

三条はそれで納得したのか、頷くだけだ。

「でも、どう聞き出せばいいのか……」

瀬謡は自分で言い出しておきながら、気が進まなかった。

あの神経質そうな丸山という男に、馨の姉と一緒に海水浴に行った男は……、などという質問をする理由を説明するのは億劫だった。丸山があの事件が起きた海の家で働いていたかどうかもわからないのだ。

もしかすると、馨が殺されたことさえ、まだ知らないかもしれないのだ。

「もし同じ海の家でバイトしていた人なら、僕よりひとつ下ということになるけど……」と、生駒がいう。

「名前は覚えてない？ 丸山さんだった？ 海の家の名は？」

「覚えてない」

それはそうだろう。三十年前のことなのだ。

「瀬謡さん。丸山さんに聞くより、ふたりに直接聞いた方がいいんじゃないですか？」

三条の指摘はもつともだ。

しかし、立成にはなんとなく聞きにくい。芳川に対しては、切り出し方さえイメージできない。

いずれにしろ、三十年前の男であつてもなくても、その後の話の展開に自信がなかった。

「誰やったと思う？」

三条が生駒に話しかけている。

「なんともいえない。胸毛の濃い人だったことくらいしか……」

「胸毛ねえ」と、三条が目を向けてきた。

「あたしは知らないよ」

「ですよねえ」

ニツと笑ってから、三条が居住まいを正した。

「あの、ちよつとお聞きしてもよろしい？」

「いいよ、と言う前に、三条が質問をぶつけてきた。いつのまにか主客が入れ替わってしまったている。」

「あの日、伊知さん、喧嘩の仲裁をした後、金谷さんを連れて行つて、どんなことを話したんでしょう。愚問かもしれませんが」

瀬謡は知らない。

「きつと、みつともないからやめておきなさい、とでも言ったんじゃないのかな」

「じゃ、ふたつ目の質問ですけど、伊知さんのインタビューのとき、なにか気になる話は出ましたか」

「ううん、なにも。みんな上機嫌だったし」

「伊知さんを芳川さんに紹介された方、その方は？」

「東京の人だね。ここでインタビューはしたけど、パーティには来なかった。でも、事件とは関係ないんじゃないかな。今はイギリスに赴任して、日本にはいないらしいから」

「じゃ、三つめ。伊知さんの携帯電話の通信記録。瀬謡さんもご覧になりました？」

「は？ あ、あれ？ いや、見てないよ」

それにしても、生駒と話そうと思っていたのだが、相手はもっぱら三条だ。

それはそれでいい。生駒と三条は情報を共有しているらしいから、「それを見せていただくことはできませんか？」

面食らった。

まるで探偵だ。悪い意味ではない。事件解決に情熱を燃やしている。そうでなければ、そこまで首を突っ込むことはない。

瀬謡はその場で美咲に電話を入れた。運よく、今からここへ向かうおとしていたところだという。

「持つてくるつてさ。でも、通信記録を見てどうするんだい？」

お手数をお掛けしてすみません、と女探偵は微笑んだ。

美咲がやってきた。

早速、携帯を調べてみることにする。

目的のメールはすぐに見つかった。

「飛行機に乗り遅れました。明日の夜の便で帰ります」というだけの簡単な内容。発信日時は三日の二十二時四十三分。会社のパソコンにその受信記録もあるという。

他のメールを調べてみる。

フォルダには九月二日の送受信記録は削除されて残っていない。

三日の受信は六件、送信は乗り遅れたという連絡を含めて五件だ。

四日は受信三件だが送信はなし。その受信の中には金谷からのものも含まれている。

五日以降にも数件受信のみが入っている。

美咲によれば、誓は仕事のやり取りを携帯メールですることに抵抗はなかったものの、自分から使う方ではなかったという。

「で、どうだい？」

三条は微笑を返してきただけで、美咲に質問を投げかけた。

「この中で重要な仕事の連絡はどれですか？ 絶対に返信するはず、
というのは」

瀬謡も三条の意図に気がついた。

美咲が携帯を操作しながら答えていく。

三日の六件のうちの四件。これにはすべて返信している。四日以
降も重要だと思われる受信があるが返信はなし……。

「つまり、送信は会社に送ったメールが最後のものだった、という
ことですね。ちよつと貸していただけます？」

三条が携帯電話をいじり始めた。

「なにしてるんだい？」

「ええ、まあ、いろいろ確かめておこうと。あれ？」

「ん？なに？」

「着信音量設定が、レベル0。電話もメールも」

三条は携帯を美咲にあつさり返し、きつぱりとした声で礼をいっ
た。

瀬謡が頭の中を整理しようとしたとき、また質問が飛んできた。

まるで、ビシッと音をたてたような質問が。

「瀬謡さん。まだお話になっていないこと、ありません？」

さすがにぎくりとした。

「立成さんのこと。昔の知人かもしれないって、伊知さんがつぶや
いたんですね。たったそれだけで、今回の事件に結びつけるのは
ちよつと飛躍しすぎかな、と。きつとなにか、現在進行形の出来事
もあるような。ちがいます？」

瀬謡は、封筒を突き出して来たときの立成の顔つきを思い出した。

あのごろんとした封筒の中身の感触も蘇ってきた。

「それは……」

話せば立成との約束を破ることになる。

しかし、伊知が殺されてしまった今、そんな約束に意味は……、きつと、ない。

夫が厨房から出てきた。

「この人にお話ししたほうがいい」

もちろん夫は、立成との話を知っている。

「お客のプライバシーなので、抵抗があるのは分かりますが」と、畳み掛けてくる三条。

瀬謡は兜を脱いだ。

聞き終えた三条が、あつさりと美咲に顔を向けた。

「伊知さんの机の中とかに、その贈り物、ありませんでした？」

「たぶん……」

ピアノの形をした陶器製のオルゴール。曲はショパンのノクターンとラベルにあったという。

「へえ。オルゴールだったのかい」

瀬謡は心に引つかかるものを感じた。

何かを思い出すような予感……。しかし、それはなかなかすつきりと蘇ってきてはくれない。

「カードや手紙は？」

「それは入ってなかったみたいです。社長が抜き取っていたら、わかりませんけど」

「事務所にあります？ オルゴール、見てみたいんですが」

「いえ……」と、美咲はもじもじしている。

「美咲、どうしたんだい？」

「それが、そのオルゴール、私、捨てちゃった」

「え？」

「金槌で叩き割ったみたいに、粉々になって、ゴミ箱に放り込んであったので、そのまま……」

「いつだい？」

「二日の朝」

瀬謡はなんともいえない気持ちになって、がつくりと肩を落とした。

馨にとつて、あれはうれしくないものだったのだ。

それどころか、彼女の平常心をぶち壊すものだったのだ。

「へえ、そうなんですか。で、他に気になったことは？」

三条はあっさりその話題から離れていくが、瀬謡は自分が果たした役割に、どうにもならない悔しさを味わっていた。

「はい……、社長の携帯電話、いつもストラップがついていたんです。それがついていない。それだけのことなんですけど……」

「ストラップ？ 警察が別に保管していたんです？」

「いいえ。聞いてみました」

「はい」

「発見当時からついていなかったらしいです。あの、天神さんのお守りのストラップなんですけど……」

記憶に留めておこうとするかのように、三条が額の中央辺りを中指で叩いた。

22 安全ピン

11110708 芳川ブ로그インタビュー19

十九番目にご登場いただくのは立成清次さん。

不動産の仲介をされている方です。仲介といっても、アパートの入居を斡旋するというような身近な不動産屋さんではなく、都心の大規模な土地を動かすというようなお仕事です。

お題は「別れの曲」

私の好きな音は、ショパンの「別れの曲」。

音というテーマには、こういうのもありですかね。

ネットでちよいと調べてきたことを披露してもいいのですが、なにせ付け焼刃。底の浅さも一緒に暴露してしまいそうなので、本当のことを申します。

実はショパンというのが、どこの国の人かも知りませんし、別れの曲の原題が何というのかも知りません。クラシックにはトンと疎くて。

しかもピアノ曲でしょう。

なんたら行進曲とかベートーベンのなんとか交響曲なら耳にしたことはあっても、ピアノ曲はねえ。

で、じゃ、なぜこの曲が好きなのかということですが、ある映画の主題歌なんですネ。

この映画がなかなかいいものでして。この曲も一緒に好きになってしまったということです。

大林信彦監督の尾道三部作の内の一編です。

「さびしんぼう」という映画。

思春期の少年少女たちの悩みとか恋とかを描いたものなんですが、観る人は自分のそのころはどうだったんだろうって、思い出そうとしてしまうわけです。

大学生の頃というのは、まだリアルに思い出せますよね。でも、中学生や高校生のときのことって、どうですか？

私は全くダメなクチですね。

記憶にある出来事もあるにはあります。でも、それはリアルな記憶ではありません。

記録による記憶というか、写真とか日記、あるいは流行り曲、また当時の友人と話すことによって再生され続けている記憶。

実は、好きになったこの曲を聴き続けているうちに、単なる主題歌という枠を超えてきましてね。

メロディーを聴けば映画のシーンを思い出すというのではなく、自分自身の記憶を刺激するようになってきましてね。

いえ、これを聞いたら具体的な何かを思い出すということじゃないんです。

あのころの自分に少し戻ったような気がして、穏やかな気分になるといえますか。

いわゆる感傷に浸るということですかね。

映画の中では、この曲とシューマンの「トロイメライ」、マネスの「タイスの瞑想曲」っていうのが流れているのですが、この三曲は私にとっての尾道三部作ならぬクラシック三名曲になりました。

もうひとつ、クラシックに思い出の曲があるのですが、こちらの方は青春時代の本当に野暮な思い出ということで、これ以上は聞かないでください。

私、実は今だに日本のポップスも好きですし、ソウルミュージックも好き。ロックもジャズも。

要するに流行ったものが好きということなんですね。

たとえば、歌謡曲の中で一番好きなものを挙げるといわれれば、「あの日に帰りたい」や「渚に残した足跡」を挙げますね。

古いでしょ。ソウルと問われればヴァン・マッコイの「ハッスル」。これも古いですね。

特に「渚に残した足跡」は、好きというより、しばらく耳から離れてくれなかった曲ですね。

それにしても当時、ディスコ、流行ってましたよね。

今の若者たち、どんなところで遊んでるんでしょう。今もディスコってあるんでしょうか。

「海水浴場の殺人事件ってなんやのん！」

おでん屋から出て開口一番、優が詰め寄ってきた。

「そんな大事なこと、私に黙ってるやなんて。先が思いやられる。

あの約束はどうしたん！」

「しかし、こんなことになるとは」

「ええい！ どうでもいいからさっさと話さんかい！ あ、どっちに行くねん。JRで帰るんとちがうん？」

生駒は、すみよしを出て西へ向かった。

「伊知さんのマンション、近くだ」

「うおおっ！ 現場検証や！」

「ちょっと気になるだろ」

「カメラ持ってきた？」

「アホ」

「で、さっきの海水浴場事件！」

生駒は三十年前の事件のあらましを話してやった。

八月のお盆までにはまだ少し間がある暑い盛り。

海の家バイトにも完全に慣れて、自分の身の置き場も分かり、生駒は潮風に吹かれながら落ち着いた時間を過ごすことができるようになっていた。

ある平日。

客も少なく、入口に立ってのんびりと渚に打ち寄せる波を見ていた。

午前中の客の呼び込みも終わり、てんてこ舞いになる昼食時までまだ間がある。

腕を組んだ。すでに真っ黒に日焼けしている。自分の劣等感の根源である細っこい腕もそれなりに遅しく見える。無数の砂粒が張り付いているが、そんなものはまったく気にもならない。

充実感というほどの仕事はしていないし、給料も自転車を買えるかどうかさえ怪しいほど少ない。

それでもここでの時間の過ごし方は気に入っていた。

若い女性が砂浜を走ってきた。

一目散に海の家に戻ってくる。

鮮やかなオレンジ色のビキニに揺れる胸。

「すみません！ ちょっとこれ」

と、生駒の目の前でパタリと止まると、くるりと背中を見せた。

「とめるもの、ない？ ボタン、ちぎれちゃって」

女性は自分の背中に片手を回している。

見ると、ブラのボタンがちぎれて失くなっていた。

「ちょっと待ってくださいよ。確か」

安全ピンがどこかにあったはずだ。

「これでどうですか」

「ええ。じゃ、お願い」

と、女性はもう一方の手で長い髪を束ねて前に垂らし、心持ちうつむき加減になって、うなじを見せた。

うぶな男子高校生にとって、刺激的な経験だった。

安全ピンの針をブラの紐に突き刺そうとしたが、紐を押さえている女性の指を傷つけそうで怖い。

「指を離してもらえます？」

「はい。いい？ 離すわよ」

女性の指に代わって、生駒の指がブラの紐をつまみ上げた。

女性の背中に触れないように、注意してそっと。

「きつくないですか？」

もたつきながらも手繰り合わせて、安全ピンで留めた。

たったそれだけのことで、その日一日、生駒はその女性が気になるって仕方がなくなった。

つい目で追ってしまふ。

生駒がとめた安全ピンが、オレンジ色のブラの紐の上にとまった緑色の葉っぱのように、目について仕方がなかった。

二十台半ばといったところ。

恋人らしき男と来ていた。胸毛も脛毛も濃い男で、精悍な顔つきをしたたくましい男。

生駒と比べるとすれば、強い大人の男性と弱っちい少年。

もちろん生駒がかなうような相手ではない。なんとなく胸をときめかせながら眺めているだけ。

昔のことである。

今のように砂浜でいちゃついたりするようなカップルはいない。

まるで少年少女のように、泳いだり、寝そべったり、時には海の家
の座敷に上がってラムネを飲んだり、真っ赤なかき氷を食べたり。
巨大なサメの浮き袋を砂浜に引き摺るような子供もいない。

海の家備え付けの一日三百円の黒いゴムの浮き輪を借りる人が、
日に十人もいればいい方だ。

静かだった。

昔の海水浴場は。

聞こえるものは波の音と、カモメやトンビの鳴き声、そして子供
たちの歓声。

そして時折過ぎていく列車の音。

いつの間にか、ビーチはいやになるほど騒々しくなってしまった。
ごてごてした巨大な浮き袋の行進。

間断なくスピーカーから流れるポップスと、客が持ち込んだラジ
カセ。

キャンプ場もスキー場もそうだが、その場の空気を生のままに楽
しむことのできない人たちが多すぎる。

当時の生駒が働いていた海の家でも、BGMはあったが、かすか
な潮風にさえかき消されるくらいに控えめな音量だった。

風と波、そして太陽。空を舞うカモメやトンビ。砂の一粒一粒。
乾いたクラゲやアオサ。釣り人が捨てたテンコチ。

そういうものを静かに眺めて、穏やかな時間を楽しむことができ
た。昔は。

五時ごろになると、まだ日は高いが、多くの客は早々に引き上げ
ていった。

誰もがまじめに帰宅し、夕食は自宅だというのが普通の時代だっ
た。

水着のまま砂浜に居座って夕焼けを眺めるなんて、酔狂な人はま

ずいない。夕焼けを楽しむのなら、ほてった肌をシャワーで流し、サッパリとしたものに着替えてからというのが洒落た楽しみ方だろうが、そんな人も滅多にいない。

まして、この砂だらけの海の家で寛ごうにも雰囲気もなにもあったものじゃないだろうし、残念ながら須磨では太陽は海にではなく、鉢伏山の向こうに沈む。

その日、ビキニの女性と胸毛の男は、夕方ぎりぎりまで楽しんでいた。

男の方はさつさと着替えて、座敷に寝転び、片肘を突いて色味を増した海を眺めていた。

他にも数組の客が帰り支度をしている。すでに誰もが着替えを済ませている。まだ遊び足りない子供たちが走り回っていた。

生駒はカウンターの中で、客から返された網籠をタオルで拭いていた。

大將は銀行に売上金を振り込みに出て行った。

同僚の女子高生は、すでに上がっている。もうひとりのバイト君の姿は見えない。おおかた女子高生にまわりついて、駅まで送っていったのだろう。

大將の姿の見えないところで猛烈にアタックしているのだ。そういうこと疎い生駒でさえ、気がついていた。

潮騒が聞こえている。

昼間の、人と波と太陽が奏でた喧騒は消え、土間を吹き抜けていく風も、幾分湿り気を帯び始めていた。

網籠を拭き終えた生駒は、海を家の窓を閉めにかかった。

窓といっても、トタンを貼り付けた板を跳ね上げただけのものだが、まだ座敷にいる客に気を使って、裏側から閉じ始めるのが常だ

った。

つつかい棒をはずしてボタンと閉じるだけの作業だ。

長い汽笛が鳴った。

すぐ脇を通るＪＲの線路を、貨物列車が通っていく。

生駒は土間を抜けて更衣室の前を通り、裏の歩道に出た。

男がひとり駆けていく。駅とは反対の方へ。小道を右に折れて姿を消した。

地元の人だろう。海岸線に沿って走るＪＲの線路の下には、ところどころに人だけがくぐれる通路があつて、北側の住宅街や国道に抜けることができる。そのどこかに消えたのだろう。生駒もたまに、気が向いたら利用するルートだ。

海の家裏側だけ窓を閉め、正面に回ってアイスクリームの冷蔵庫にブリキの蓋をしたり、散らかった椅子などを片付け始める。砂浜に取り残されたパラソルも片付けなくてはいけない。すでに料金をもらっているし、食べるものもすべて鍵をかけたので、客は放っておけばいい。

生駒は折り畳んだ幾本かのパラソルをどさりと裏の小屋にしまい、海の家に戻って座敷を見渡した。

最後の仕上げは座敷の清掃だ。

しかし、まだ客がひとりいた。

胸毛がそわそわしていた。

腕時計に何度も目をやっている。

彼の位置から更衣室の入口は見えないが、それでも気になるのか、ちらちらと土間の方を見やっている。

目が合った。

意を決したように立ち上がると、まっすぐこちらに歩いてきた。

「すまないが、女子更衣室を覗いてきてくれないか。あんまり遅いから」

「はあ」

返答に困った。

いくらバイト生でも、女子更衣室に人がいることがわかっている限り、覗けるものではない。

「もう二十分にもなるんだ」

「はあ」

確かに遅い。

渋っている生駒を諦めて、胸毛は女子更衣室の前まで行って、声をかけた。

しかしビキニの女性は応えない。

「すまないが、見てきてくれ」

胸毛は心配そうな顔で頼んできた。

生駒は胸毛と並んで声をかけてみた。

「お客さん」

やはり返事はない。

「もう、入っているのは、ひとりだけだよな」

胸毛が更衣室に入っていこうとする。

「あ、じゃ、僕が」

いくら連れでも、男性客を女子更衣室に入れるわけにはいかない。

生駒は更衣室の扉を開けた。

温水シャワーの湯気がこもっていた。

裸電球が蒸し暑い。折れ曲がった短い通路。ビニールのけばけばしい色の暖簾。

「お客さん」

生駒は、手触りの悪いそのピンク色の布をそつと手繰り上げた。

濡れたベニヤ板に囲まれた狭い空間。

砂にまみれたスノコが乱雑に敷き並べられ……。

「うあ、あああっ！」

全裸だった。

崩れ落ちたように、スノコの床に倒れていた女性。

長い黒髪が、顔から肩に掛けてべったりとまとわりついていた。
転がった網籠。

裏返しになって放り込んであるオレンジ色の水着……。
出しっ放しのシャワーが裸体を打っていた。

ひと目見て、彼女がすでに死んでいることがわかった。

生駒は彼女を正視できなかった。

シャワーは止めた。

あの安全ピンは。そんなことが気になった。見当たらなかった。

生駒はパニックになっていた。

いつのまにか戻ってきていたもうひとりのバイト君が、警察に通報した。

23 現場検証の真似事

「警察によれば、後ろから首を絞められて殺されたということだった。覗き魔が見つかってしまつて、突発的に首を絞めたのではないか、ということになった」

「そんな事件があつたんかあ。でも、ノブは犯人を見たんやろ？」

「あれが犯人だったのかもしれない、というだけのこと。しかも上半身裸で、後姿だつたし、特徴がなくて」

「捕まらなかつたん？」

「ああ……」

裏の歩道を走つていった男が犯人だつたのかもしれない。

しかし、生駒はその男をよく見たわけではなかつた。髪型も体格も。短パンの色さえ。

その直後、全裸死体を発見するという体験がなかつたら、もう少し記憶に留まつていたのかもしれない。しかし、驚きのあまり、脳裏に残されていたかもしれないそんなデータのかけらさえ、消し飛んでしまつていたのだつた。

「実はあのとき、ふつと、もしかすると大将の息子じゃないかと思つたんだ。でも、ときばきと動くもうひとりのバイトを見ていて、こいつかもしれないとも思い始めたんだ。それくらい、わけが分からなくなつてたということなんだけど」

「それを警察には？」

「言わなかつた」

その後、自分のこの情けない混乱ぶりが、いつまでたつても心に重くのしかかることになった。

重要な手がかりを目撃しておきながら、情報として提供できなかったことを。

もともと、大将の息子を、常に目にしていたわけではない。

乱暴な男で、おとなしい生駒はできるだけ近寄らないでいたい相手だった。

雇い主の息子という立場を笠に着て、なにをされるか分かったものではない。そういう臭いをプンプンとさせていた。いわば生駒はプレッシャーを感じていたということだ。

「多感な年頃やからねえ。誰にだって……」

優は言いかけてやめ、海の家的事件に話を戻した。

「事件の後も海の家は営業してたん？」

「してたよ。ただ、もうひとりのバイトはすぐ辞めてしまったけどね。僕の印象ではクビになった感じだった」

天神橋筋を北に歩く。

路面の補修工事中だ。夜間工事なのだろう。昼間は、仮設の鉄板を敷いて通行はできるようになっている。

九月三日夜から十八日夜までと記された工事看板を横目で見ながら、ガソリンスタンドの角を西へ曲がる。

東行き一方通行の細い道。伊知のマンションは目と鼻の先にあった。

「ここね」

十一階建てで、ワンフロア数戸程度のペンシル型のマンション。

道の南側にあり、間口は小さく、奥行きは深い。

「伊知さんの事務所は何階？」

「二階。北東の隅の住戸。オートロックだから入れないぞ」

機械駐車場は建物の手前、天神橋筋寄りに設けられていた。ゲートチェーンが道路のすぐ際にあり、来客が駐車するスペースの余裕はない。

「どのあたりかな」

チェーンを跨いで入っていき、機械駐を眺める。

地上二段地下一段のパレットが九つある。突き当りになった最奥部に、少しばかりの植栽スペースが見えた。

「あそこだな」

高さ五メートルばかりのシマトネリコが三本。足元は、徒長枝を盛大に伸ばしたツツジの灌木で覆われている。

植栽帯の南側には、裏の建物との境界として白いネットフェンスが張り巡らされていた。

「ほら、あそこ、通り抜けられる」

植栽スペースの左端、コンクリートブロックの塀が回っており、塀とフェンスとの間に人がかろうじて通り抜けられるほどの隙間があった。

「なにかお探ですか？」

突然、後ろから声がした。

胡散臭そうな目でこちらを見ている中年男の姿があった。

作業服の胸元に名札をつけている。株なんとか住サービス。マンシヨンの管理人らしい。

「あ、いえ」

生駒は適当に退散しようとしたが、優は聞きたいことがあるらしい。

「私たち、伊知さんの友人なんですけど、どんなところでお亡くなりになったのか、見ておきたいと思ひまして」

「ああ、そうですか」

男は愛想笑いを浮かべたが、目に浮かんだ不審感は払拭されてはいない。

「この中で見つかったんですね……」

優はうなだれて植栽スペースに向き直り、手を合わせ、目を閉じ

た。生駒もあわてて黙祷する。

「バッグなんかも、この中で……」

優が独り言のようできて、管理人に問うような口ぶりであった。

「はあ」

「伊知さんの車は車庫に入っていたんですね……」

「そうです」

男は不審感を解いたようだ。

「車はどれですか？」

「あれです」

地下ピットの最奥のパレットに納まった車はアルファロメオ。

国産車に混じってその真っ赤な車体はひととき存在感を放っていた。

「入口のチェーンはいつも閉まっているんですね」

優が振り向きざまに聞く。管理人は振り返って、あのチェーンのことか、と聞き直す。

「駐車場を借りている入居者しか、リモコンを持っていませんから事件時も、もちろん閉まっていたはずだということだろう。」

「伊知さんのリモコンは車の中に？」

「それは……」

男の不審感がまた頭をもたげてきたようだ。

ちょうどそのとき、照明がついた。

タイマー設定がされているのだ。マンションの玄関周りやゲートチェーンの辺りが、明るく照らし出された。しかし駐車場の中は薄暗いまま。ブラケットがそれなりの間隔で設置されているのだが、点灯していないものが多い。

「夜になればここは相当暗くなりますねえ」

管理人は、自分の落ち度を責められると思ったのか、

「管理費の削減をオーナーさんのほうから要望されていてまして」

と、無点灯のブラケットにちらりと眼をやった。

これでは人目につきにくい。

前の道路にたとえ通行人がいたとしても、駐車場の中は暗がりで見えないだろう。

「では、ごゆっくり」

管理人はわけのわからない台詞を吐いて、姿を消した。

「ふん。じゃ、ゆっくり見させてもらおうとするか」

生駒と優が、伊知のマンションで現場検証の真似事をしているこ
る。

.....

立成清次は事務所に工事業者を呼び、芳川邸解体工事の打ち合わせを行っていた。土地売買契約が整い次第、工事にかかる予定だ。契約は近い。

業者とスケジュール確認をしながら、もっと工期を短縮できないかと希望を出した。

業者が帰ると、ソファに浅く腰をかけ直し、背もたれに首を乗せ、目をつぶって深くため息をついた。

ポケットから携帯電話を取り出し、アドレス帳を開いて瀬謡の番号を探した。

しかし発信はせず、メニュー画面に戻ると、溜め込んだ画像の中から亡くなった妻の写真を開き、再び吐息をついた。

.....

芳川了輔は神戸市灘区にある丸山のコンビニエンスストアを訪問していた。

店に顔を出すと、丸山がアルバイトの学生を怒鳴りつけている最中だった。

丸山は突然の芳川の訪問に驚き、思い切り気まずい顔をして店から連れ出した。

近くの喫茶店で、芳川は丸山と向かい合って座った。

丸山は緊張していた。汗をかき、パーティの日、金谷とひと悶着

を起こした拳句に挨拶もせずに戻ったことを、繰り返し詫びた。

芳川は須磨の海水浴場のことや、ミラーサイトなどの話を出した。丸山が飛びつきそうな話題だが、丸山は関心を示さず、ただただ神妙な顔をして、はいとか、いいえとか、そうですね、などとはぐらかすのだった。

・・・・・・・・・・

松任歩美は塊田瑠奈の自宅にいた。

新大阪にある高級マンションの一室。

ひとつずつピアノの鍵盤を叩きながら、専用のスパナで弦を締めこんでいった。

作業が終わると、広くて眺めのいいリビングに移動し、瑠奈が用意していたケーキを前にする。

瑠奈のこれ見よがしの自慢話に適当に相槌を打ち、さりげなく嫌味のひとつも返し、芳川の話題になったときには目に見えない火花を飛ばしあった。

ただ、心を占めていたのは目の前にいるふざけた女のことではなかった。

ずっと気になっていたこと。

それは、芳川に、伊知馨が自分の母親であることを言い出しそびれてしまったことだった。

隠す必要のあることではなかったのだが、黙っていたことで、元は秘密でもなんでもないことが、秘密になってしまっていた。

・・・・・・・・・・

塊田瑠奈は優越感に浸りながら、松任に嫌味を言った。

あなたの試みは失敗だったわね、あんな小細工をして、と。

向かいに座った女は、それこそ蛙の面に水で、しらっとしているが。

塊田はもうひとつ、嫌味な質問をした。

あなたがしていることを、芳川さんが知ったらどう思われるかな？

これにも、しらばつくれた顔。

ミラーサイトのことよ。あなたしかいないじゃない。

あんな腹黒い根暗な犯罪を思いつくって、どんな神経をしているの？と。

結果は同じ。

松任は予想通り、これもあつさり否定し、ケーキにもコーヒーにも口をつけず、席を立った。

瑠奈は今日のことをどのように芳川に報告しようかと、考えるだけでわくわくした。

・・・・・・・・・・

新婚の美咲は、家で夕食の支度があるからと帰ってしまい、瀬謡の店にはいつものように常連客がやってきた。

しかし瀬謡は、すべてのことに明らかに上の空だった。

聡い客の中には、どこか具合でも悪いのか、と心配するものもいた。そして注文を間違っていると叱られた。

髻があんな性格だからといって、親友であることには違いない。

あらためて寂しさが募ってきたのだった。

そして犯人への怒りがこみ上げてきていた。

客が途切れた間に、立成に電話を入れて会う約束をすると、今度は松任に電話を入れ、パーティ出席者名簿に記された丸山の連絡先を教えてもらった。

—————0809 芳川ブ로그インタビュー20

二十番目にご登場いただくのは松任歩美さん。

女性の辣腕税理士であり、弊社の社員でもある。

お題は「ミラノのドウオモの静寂」

海外旅行の経験は多くはないのですが、非常に印象に残ったところがあります。

それはイタリアのミラノの中心街にあるドウオモ。

ゴシック建築では世界最大の最高傑作として、有名な大聖堂です。

中に入ると巨大な広がりをもった厳肅な空間に包まれます。

高い天井を支えている装飾的な列柱。

美しい大理石のモザイクの床。

薄暗い中にろうそくの明かりが揺れ、ステンドグラスを通して厳かに光が落ちています。

暗い中で見てこそその光の存在、光の崇高さ、照らし出される空間の奥行き、そんなことが実感できました。

さて、大聖堂の中の音。

イコール賛美歌という答えが思いつかれますが、私の胸に響いてきたのは、パイプオルガンがお腹を揺する音ではありませんでした。

むしろ静寂という音です。

私たちが日ごろ、いかに多くの雑音に満ちた暮らしをしているか、ということを感じました。

大聖堂の中は全くの無音状態かというと、そうではありません。

人の歩く足音もしますし、観光客の話し声だつて聞こえます。でも、静寂。

あの空間だからこそそう感じさせるのかもしれませんが。

シーンと静まり返ったなかでの小さな足音と控えめな話し声。

あ、そうそう、カメラのシャッター音も聞こえますね。

そういった音があるからこそ、いつその空間の静寂さが際立つとでもいうのでしょうか。

じつとベンチに座って祈りをささげている人。

マリア様の彫像に見入っている人。

そういった人々から離れたところにひとり座って、正面ずっと奥の祭壇を眺めていますと、私の耳にある音が聞こえてきました。

耳鳴りのような音です。ような、ではなく耳鳴りなのでしょう。

アー――と長く長く引いた音。

はるか遠くに聞こえる列車の汽笛の音のような……。

本来、人の鼓膜が、外部からもたらされた振動によつて感じる音がないときでも聞こえている、つまり脳が常を感じている音、というものがあるのなら、こういう音なのでしょう。

それは、音程で言えばラの音でした。

そういえば、私の好きな時間のひとつに、コンサートの始まる前のチューニングの時間というのがあります。

あれはラの音を出して各パートの音を合わせるのですが、その期待感溢れる数十秒ほどの時間がとても好きです。

あの時間も同じように静寂ですね。

ざわついてはいるけれども、それがやがて静まり返り、そして瞬間に感動と驚きの時間が始まる。

その前触れである静寂の時間……。

静寂。

そしてそのとき、頭の中に響いてくるラの音。

それを感じることができる時間というのが好き、というお話をさせていただきました。

前の方が、自分の好きな曲のことを話されたので、私もひとつだけシヨパンのノクターンが好きです。

25 ガールフレンド

瀬謡は立成と向き合って座っていた。立成の事務所に近い本町にある珈琲専門店である。

「最近、忙しくてな。で、なんだ？ 話って」

瀬謡は鞆から一枚の写真を取り出した。

「これ、立成さん？」

数人の若者が写っていた。

「あ、わしだ」

意外にもあつさり、立成はそこに写った男性が自分の若かったころだと認めた。

「やつぱり」

瀬謡は思わずため息をついた。

これで馨の大昔の彼氏が立成ではないか、という疑問は解けた。

古いアルバムからこの写真を見つけ出していた。

当時流行っていたダンスパーティーでのボックス席で撮影したもの。大学生だったころの瀬謡や馨の顔が見える。

そして馨の姉、美弥子の顔も。

「この人はどなたか、ご存知？」

「ん？ これは……」

立成は言葉を切って、目を吊り上げた。

「なにが聞きたいんだ？」

「いいから、いいから」と、ことさらさりげなく促す。

「井畑馨さん」

やはり立成は、あつさり応える。

「じゃ、これは？」

ダメ押しだ。美弥子の胸に指を置いた。

「知っているんやろ。鎌かけなくてもいいぞ」

「やっぱり。馨の彼氏は、あんただったんだ」

「彼氏っていう言い方がふさわしいかどうかは別やけどな」

「あの事件のあった日、美弥子さんと海水浴に行った？」

「ああ」

瀬謡は肩の力が抜けていくのを感じた。

「お、これ、あんたか」

立成が無理にはしゃいだ声で、瀬謡の若かりし頃の顔を見ている。しかし、リラックスしていない証拠に、やたらとタバコを口にとっていく。

「ねえ、あのプレゼントさあ」

馨が死んだ今となっては、もうどうでもいいと言って欲しい。

「なんだったのさ」

しかし立成は黙ったまま。

それどころか睨みつけてくる。

馨が殺されたことによって、贈り物をしたこと自体が、触れて欲しくない誤算のひとつになってしまったのだろう。

「反応はどうだった？」

これにも無言。

「ふう。なんだか、気が抜けちゃったわね」

瀬謡は自分の気持ちとして言っただつもりだったが、これには立成も、ああ、と同調した。

「誰にも話してないだろな。……警察にも」

「もちろんさ」

三十年前、生駒の当時の観察が的を得ているなら、立成は馨のボーイフレンドでありながら、姉の美弥子にも手を出していたという

ことになる。

ただ、立成が美弥子を殺したわけではないし、今、馨を殺す動機にもならない。馨が立成を恨むことはあっても、その逆は考えられないからだ。

しかし立成はなぜ、当時の怨みを掘り起こすことになるかもしれないと分かっていて、プレゼントなど贈ったのだろう。

昔のプレイボーイ癖が出ただけだとしたら、気にすることもないのだが。

そんな漠然とした不信感を持って立成に臨んでいるのだが、瀬謡はその感覚が全く大きくなっていかないことに気づいていた。

「変な気分だよねえ」

立成はなんとなく怪しい。

しかしリアリティに欠ける。

そんな気分を持て余しながら、瀬謡の口は動いた。

「なにが？」

「あたしたち、三十年くらい前に会ったことがあるんだって思うと」

「ああ。でもあんたのことはあまり記憶にない。悪いけど」

「フン、あたしもさ。大学はどこだった？」

瀬謡と立成は、互いに相手を思い出すための話をした。

それはむなししい結果となったが、記憶を呼び戻す接点がたとえあったとしても、たいして楽しい気分になるようなことでもなかったろう。

「いつ知ったんだい？ 馨が大昔の恋人だって」

「だから、恋人っていうのは抵抗がある」

「そう？ そんな記憶があるけど」

「ま、向こうがそう言ってたんなら」

「で？」

「先日のパーティの準備をしていて。いや、正直に言うと、数ヶ月前から。ブログを読んで、もしか、とは思っていたんだ。バイク好きの変わった女の人。名は馨。実家は垂水で……」

「で、プレゼントを？」

「百分の自信がなかったから、わしの名前は言っただけで欲しくなかった」
「そんなもんかな」

生駒が言ったように、金谷からのワンポイント紹介がきっかけではなかったらしい。

「で、再会を果たした感想は？」

「そうやなあ。一言でいえば、驚いたな」

「おばちゃんになってた？」

「面影はそれなりにあるような、ないような」

「フフ。それで、パーティの日、なにか話したんだろ？」

二階の廊下で交わしたやり取り。立成、ぼそぼそと語る。

「ということだったのさ。名乗らない方がよかったかもな」
「なぜ？」

「振られたみたいだから」

「振られた、かあ……。あんた、まだそんなことを」

「わしは……」

立成が窓の外に目をやった。

「ま、いいさ。そういうことや」

御堂筋のイチヨウ並木が濃い緑陰をつくり、その間に車が列を作っている。

「あの頃さ」

「もう、聞くなよ」

立成にとって、触れられたくないことに違いない。

「青春の数え切れないほどの後悔のひとつ？」

「まあな。そういうことにしておいてくれ」

「今は、馨とは何の関係もないんだね」

「ない」

瀬謡は、再び立成の表情に意識を集中した。

「で、その後は？」

「後って？」

「馨に、わしがあの立成だつて言った後。娯楽室のバルコニーで涼んでいたんだろ。金谷さんは」

「ああ、その話か。あいつ、ぐつたりと手すりにもたれててな。あいつのを、痛恨の思いに打ちひしがれてっというんだろな。雨が吹き込んでいるってのに。声をかけたら、震えだしてな」

「なにか話した？」

「いいや。たいしたことはなにも。傷を負った男に野暮なことは言わなかったよ」

「傷ねえ。三角関係か……。いまどき、そんな言い方はしないか。

なんだかかわいそうだね。もういい歳なのに、酒に飲まれて昔の女がふたりもいる前で、みつともないところを見せてしまつて」

「自分で収拾もつけられんくせに」

「そうだね」

「もう帰ったほうがいいぞつて、下まで送つて行つてやつた」

瀬謡は伝票をつまんだ。

そろそろ美弥子との関係を聞くタイミングだった。

ところが、立成から、

「おつ、もう帰るのか？」

と、今までのぼそぼそ声とは別人のような張りのある声が出た。

「ごめんね。つまらないことで時間をとらせて」

「ええぞ、そんなことは。それより、もっと大事な話でもあるのかと思つたぞ」

「大事な話？」

「彼女が殺された事件のことに決まってるだろ」

声が喫茶店の中に響く。

「またお店に来てちょうだい。今日はもう急ぐから。ところで、昔、美弥子さんとはどういう関係だったんだい？」

立成の眼がギロリと動いた。

しかし、瀬謡の顔にその視線を当てた、ままなにも言わない。

凶星だった。

のそりと立ち上がる。

瀬謡の手から伝票を奪うと勘定を済ませ、近いうちに店を覗くと言っただけ言い残して去っていった。

26 給料を払え

翌日、生駒と優は、兵庫県立美術館で開かれている展覧会を見たついでに、丸山の店を覗こうとしていた。

国道二号線沿いにあるコンビニエンスストア「エムストップ」新在家店。

丸山がオーナーとして所有している店は他に数店あるが、いずれも父親の遺産として手に入れたもので、店の経営そのものは他人に任せてある。

ただ、この新在家の店は、丸山自身が脱サラして始めた商売であると聞いていた。

「あ、ここ、ここ」

交通量も多く、入りやすい広い駐車場を持っていた。いい立地だ。生駒は車を左に寄せて、駐車場に入ろうとした。

数人の若者が入口あたりにたむろしている。と、パラパラと車に近寄ってきた。数人が駐車場に入るのを阻むように立つと、そのうちのひとりが運転席の横まで回りこんでくる。大学生といったところだ。

「なんだ、こいつら。ん？」

用があるらしい。

手にビラのようなものを持っている。頭を下げつつ、ガラス窓をコツコツと叩く。

窓を開けてやると、

「すみませ〜ん」と、ビラを差し出してきた。

「この店に入られることを止めるつもりはないんですが、これを読んでいただけませんか」

受け取ると、若者たちはさっと進路を開けた。

生駒はビラを優に渡し、駐車場に乗り入れた。

「さ、いてるかな」

車を降りようとすると、優が、

「ちょっと待って。ほらこれ」と、ビラに視線を落としている。

ビラには「丸山店長は正規の給料を支払え！」というタイトルがついていた。

コピー用紙に白黒で印刷しただけの、にわか作りのもの。

細かい字でびっしりと埋まり、なにやら訴えているが、どうもアルバイト生と店長である丸山との間に給料支払いを巡っての争いがあるらしい。

「ふうん。さ、行こう」

丸山は店のレジに立っていた。

「あ、生駒さんじゃないですか」

「こんにちは。近くを通りかかったんで、覗きにきました」

生駒と優はくると店内を回る。お茶のペットボトルとチョコレート箱のレジに持っていた。

「ありがとうございます。先日はどうも」

丸山がにこりとした。

「こちらこそ」

「おい。生駒さんも来てくれた」

丸山がバーコードをスキャナーに読み取らせながら事務所に呼びかけると、祥子が顔を出した。

「どうも」とこちらも同じようににこりとする。しかし、なんとなくふたりとも表情が硬い。

生駒は代金を渡しながら言ってみた。

「表にビラを配っている人がいますよ」

きつと、そのことでイラついているのだろう。

「そうなんですよ。まったく困ったやつらです」

丸山は苦々しくいう。

「給料を払えつて、書いてありますよ」

ビラを見せた。

丸山はちらりと眼をやっただけで、レシートを切り、つり銭を差し出してくる。

「そうなんですよ。でもね、あんなやつらに払う金はないですね！」

と、突然、丸山は声高に言うなり、腰に手をやってふんぞり返った。大げさなりアクションに、思わず生駒は他の客がいまいかと振り返ってしまった。

「ここ数ヶ月、あいつらアルバイトのやることに、はらわたが煮えくり返る思いだったんです。どいつもこいつも、ルールを守らないやつばかり。もっとも許せないのは廃棄処分の商品を食べていたことです」

「はあ」

「おにぎりを」

なんとなくかわいらしい商品名が出て、丸山の剣幕とのギャップを感じてしまった。

生駒はビラに眼を落とした。

確かにその単語が行間に見えている。

「生意気な学生らでね。いい大学に入って、大きな企業に就職が決まっているからといって、なんでも自分の思い通りになるわけじゃない。そういうことを、僕は教えてやっているんですよ！」

「んー、でも、それとこれとは……」

「廃棄処分のもものといっても、僕の資産であることには違いがない

です。ちゃんと本部にも確かめましたよ。それを奪ったということ
は、れっきとした犯罪です。実は、あいつらには伝えていませんが、
警察に被害届を出してあるんです。そのうち出頭命令がいくでしよ
う。そうすればきつと肝を冷やすはずです。それがきつかけであ
いづらの他の悪事が暴かれてもしたら、それはそれでおもしろいし、
自分としても社会のお役に立てたというものです。このところ
頻発する万引きも、あいつらの仕業だと分ればなおいいでしよう」
丸山が一気にまくし立てた。

饒舌な男だということは分かっていたが、相槌を打たせる隙もな
い。

「それってやりすぎじゃ……」
優が口を挟んだが、耳に入らないのか、無視してアルバイト批判
を連発する。

「それくらいいしないと、あいつらは自分が悪いと思わないんです。
だいたいね。何かといえはすぐにつるみたがるのが、あいつらの悪
い癖だ。なんでも集団交渉に持ち込めば、こちらが折れると思っ
ている。大人をバカにしちゃダメだということも教えてやらなくちゃ
いけない。甘やかされて育っているから、こういうことになるん
でしょう。それに親も親で……」

祥子はいつのまにかドアの向こうに引っ込んでしまった。

「でも、丸山さん。いくらなんでも、それは」

優が少し大きな声を出した。

こちらも怒りに火がつき始めている。

生駒はまあまあと優を抑えると、

「廃棄処分のおにぎりって、賞味期限が過ぎたもののこと？」と、
確かめた。

「そうですよ。それでも、れっきとした僕の資産です！」

丸山は生駒に反論されたと思ったのか、叫ばんばかりの勢いだ。吹けば飛ぶような虚勢。

脆弱な神経。

生駒は、そんな印象を持った。

「ビラには、その分は反省して弁償したと書いてありますよ」

「当たり前じゃないですか！」

「廃棄処分となった瞬間に、資産価値はないんじゃないですか？」

「生駒さん、それじゃあ、なんですか。賞味期限切れのタダのものを僕が売っていたとおっしゃるんですか？ 違いますよ。あいつらは本来それを欲しかった」

「はあ」

「で、店員の立場をいいことに、賞味期限が切れた瞬間に自分のものにしたわけです。代金をとって、なにが悪いんです？」

「普通、廃棄のものは店の人が食べたりするんじゃないんですか？ 優が食い下がった。

「廃棄処分の直前までは、ちゃんと値段のついていたものです。それに、廃棄処分のものを従業員が食べるなんて、とんでもない！ そんなことは絶対にしませんよ。少なくともうちの店では！ そんなことが常態化したら、アルバイトが廃棄処分になった瞬間のものを仲間に横流しして、本来の商品が売れなくなってしまう」

ビラにはひとりの女性学生が、六百円そこそこを弁済したと書いてあった。

生駒と優は思わず顔を見合わせた。

「さっき、表には八人くらいアルバイトがいましたけど、全員が？」

「もう、うちのアルバイトじゃないです」

「はあ」

「正確に犯罪を犯したと分かったのは三人です。でも、どうせ全員が似たり寄ったり。あいつらはすぐに口裏を合わせるんです。一日

中携帯で連絡を取り合ってたね。全員一緒にクビにしました」

どうもこの男は、そのことも気にいらならしい。
アルバイト同士の仲がよいことに、いわば嫉妬しているのかもしれない。

「実はね。あのうちのひとりは大手銀行に就職が決まっているんですよ。あんなやつが就職したら、その会社の信用に関わるでしょうで、教えてやっただんです。その人事部にね。就職が内定しているこの男は、こんなことをするやつだって」

「そしたら？」

「もちろん感謝されましたよ。これが、正義ってものでしょう」
「ひどいことを」

優の堪忍袋の緒が切れかかっていた。

外の大学生たちが敷地内に足を踏み入れているのが目に入った。
丸山が飛び出していった。

生駒と優もそれに続く。「帰ろう」

丸山が走っていく。

「貴様ら！ 不法侵入だぞ！」

女子学生が驚いてぴょんと飛び上がった。

あわてて敷地内に入っていた足を引っ込める。

「いいか！ 今度その足を歩道から一步でも踏み入れたら、警察に通報するからな！」

肩を怒らせて睨みつける丸山。負けじと学生たちも睨み返す。
その様子を横目に、生駒と優は黙って車に乗り込んだ。

「くそつたれ！」

優が怒りに任せて、ドアを乱暴に閉めた。

「所詮、小さい男なんだ」

丸山が走り寄ってきていたが、見えなかったことにして生駒は車を発進させ、さっさと国道に出た。

優は収まらない。

「なにが正義や！ 自分の程度の低さを棚に上げやがって。ウグググッ、腹の虫が収まらへん！」

「やれやれ。海の家の話どころじゃなかったな」

「あの腐れマシールームの声なんか、二度と聞きたくない！ クソ！ あのボケ！」

そこへ、立成から連絡が入った。

「芳川さんの事務所にいるんだけど
今から来られないかという。」

「いいですよ」

パーティの日、途中から鳴り始めた音の正体を、一緒に突き止めるようにということらしい。

「たぶん、手すりじゃないかと思う」

生駒はそれはありうる、と応えておいた。

常に自在レンチとドライバーセットは車に積んである。それで間に合えばいいが。

「くそう。あのフニヤフニヤの低脳のカスめえ」

まだ怒っている優を乗せて、生駒は阪神高速に乗った。

「小さい奴ほど、正義なんて振りかざして、イキがるもんだ」

芳川のゲストハウスの異音調査など、生駒が出る幕ではないが、伊知の事件のこともあって、芳川の顔も見えておきたいという気持ちがあった。

27 固有振動数

土佐堀に着いた。

ゲストハウスに直行するエレベータには乗れない。それは表通りから奥まったもうひとつの小さくて豪華なロビーにあるのだが、暗証番号を入力しないとロビーの扉も、エレベータの扉も開かないシステムになっている。

携帯電話で立成に連絡を取ると、事務所用エレベータで上がって来いという。

上には立成と松任が待っていた。

「すみません。お忙しい中を。芳川は所用ができて」と、松任が恐縮した。

「では、参りましょう」

事務所の奥の非常階段を通って、二十二階に登った。

手すりは大量にあると思ったが、それほどでもなかった。

南側の手すりはいずれも強化ガラスの手すりで、緩んでガタつくというような構造のものではない。緩む可能性のある金属板の手すりが付けられているのは、北側のバルコニーだけだった。

ちょうど母屋の裏手にあたる位置で、南側のテラスのように「楽しむ」バルコニーではない。空調の室外機が並んでいた。

「あの、松任さん。このたびはご愁傷さまで」

生駒は松任に頭を下げた。

「あ、ありがとうございます。その節は、ご参列いただきまして……。ああいう場でしたので、お声を掛けることができなくて、失礼しました」

「松任さんは伊知さんの娘さんだったんですね。知りませんでした」
「はい……」

松任の口ぶりは、言わないで欲しかったというように聞こえた。

立成が眼を剥いていた。

「ん？ お、おい！」

立成の地声だが、こんなときの質問は、それだけで追及されているような気分になる。

立成は生駒を睨みつけていたが、これは松任本人の口から話すべきことだろう。

黙っていると、松任は仕方がないというように、

「私の母なんです」とだけ言って、うつむいた。

「……そうだったんですか」

松任の口が重いことに立成も気づいたのか、それ以上は聞かなかった。

黙ってしまったふたりを背にして、生駒は中腰になって手すりを確かめ始めた。

「あ、これ」

金属板ががたついているのが見つかった。

「これがあの音の原因じゃないかな」

立成もしゃがみ込んで板を叩いてみる。

金属板はアルミ製で、直径八ミリほどの小さな穴が規則正しく開いている。いわゆるパンチングメタル板。縦横約九十センチの正方形で、白い塗装が施されている。

それが手すりの柱や、横枠に取り付けられた金物にビス止めされているのだが、そのビスが軒並み緩んでいた。ところどころ抜け落ちてしまっているビス穴もある。

「これも」

立成が隣のパンチングメタルを叩く。

「次のもだ」

結局、連続して五枚のパンチングメタルのビスが緩んでいた。

「これだな。原因は」

立成が満足そうにうなずいた。

松任が不安そうに聞く。

「どうしてこれで、あんな音が鳴るんでしょう。笛のような原理で
しょうか」

立成が解説を始めた。

「笛とは少し違います。笛はいわば風切り音でしょう。このパンチングメタルの穴を風が通り過ぎるときに音を立てる、ということも考えられますが、その場合はもう少し甲高い音がするんじゃないかな。ピューとかピーンとか。でも、先日のはどちらかというと、ブーンというような唸り音でしたでしょう。しかも連続的に鳴り続けていた。風切り音なら、あんなふうに鳴り続けることはないと思うんですな。風向きが完全に一定ということはありませんか」

生駒はビスの緩み具合を丹念に調べた。

「ハハア。ほら、これを見てください」

パンチングメタルの左側を止めているビスは完璧に締め付けられていたが、上下のビスと右側のビスはいずれも緩んでいた。

立成に代わって、今度は生駒が説明する。

「この板そのものが風で振動して、音をたてていたんですね。固有振動数といって、どんな物体でもそうなんですが、この板ならではの一定の振動数があるわけです。あつ、調律をされているんですからその辺はお分かりですよ」

松任が微妙な顔つきをして頷いた。

「一本のピアノの弦は強く叩こうが弱く叩こうが、同じ高さの音、

つまり同じ振動数で震えるというわけです。もちろん張り方が変われば振動数は変わります。この板にも同じことが言えるんですね」「なるほど、そういうことですか」

「このパネルは、どれも同じ大きさと同じ材質、同じ厚みです。それがどれも同じように、左側だけでとめられていたことになります。現状から見る結果論ですよ」

「はい」

「いずれも上下と右側のビスが緩んでいた。ということは、その部分は完全にフリーになっていた。そして、この五枚のパンチングメタルの板は、同じ振動数の音を出した、ということですよ」

「へえ。そんなことがあるんですね」

「だから、あんなに大きな音がしたんでしょう」

「この5枚のパネルが同じ音を……」

「ということで、あの日、風向きとか風の強さとは無関係に同じ高さの音が鳴り続けた、というわけですね」と、立成が付け加えた。

松任は音が出る仕組みが理解できたのだろう。パンチングメタルを指で弾いて耳を近づけたりしている。

しかし、どことなく上の空だ。

「立成さんもお詳しいですね」

生駒は松任が気になりながらも、立成をとりあえずは喜ばしておいた。

「そうだろ。実は、わしのマンションでも同じ目にあっただ」

と言いつつ、立成も松任の様子が気になったようで、ちらちらと見ている。

「さ、二十三階も見に行ってみましょう」

こちらでも同じ症状の手すりを発見した。

二十三階の北側にある唯一のバルコニー、娛樂室に設けられたバ

ルコニーの手すりだった。

「やれやれ、同じ場所か」

バルコニーから身を乗り出すと、土佐堀川が真下に見えた。

「ほんとですね」

二十二階の五枚と二十三階の五枚はほぼ同じ位置だった。

「これは、今日直してしまうというわけにはいきませんな。ビスがない。業者を呼んで、全部のビスを締め直させた方がいいでしょう」
立成の提案に、松任が礼を言った。

「すぐにされたほうがいい。今度また強い風が吹いたら、音が鳴るというだけではすまないかもしれません。板が外れて落下すれば危険です」

「はい。分かりました」

そうしているうちに芳川が戻ってきた。

「どうも、すみませんでした。それで、音の原因、いかがでした？」
生駒と立成が説明を繰り返した。

「あるんですね。そういう手抜き工事が」

「あ、いや。手抜きというより施工不良ですね」

つまらないことに反応してしまった、と生駒は思ったが、やはり、「どう違うんです？」と、芳川に質問されてしまった。

「意図したのかどうか、という違いです」

生駒はさらりと応えて、ビス止め作業に専念した。

「クーラーを入れてきます」

松任がゲストハウスに戻っていった。優がトイレを借りたいと、松任についていった。

ふたりの姿が消えるなり、立成が声を落として聞いた。

「このゲストハウスには社員の方は誰でも自由に出入りできるんですか？」

芳川が怪訝な顔で見返した。

「いえね。少々変でしょう。このパンチングメタル。十枚とも全く同じ位置、つまり上下と右側のビスが緩んでいるわけで。それも二十二階、二十三階と、ほぼ同じ場所の手すりが」

芳川が少し憮然として応えた。

「事務所のものは誰でも自由に出入りできますよ。鍵は誰でも持ち出せるところにぶら下げているし、セキュリティの暗証番号もほとんどのものが知っています。業者が食材などを持ち込んだりするので、誰もが対応できるようにするためです。昼休みにここで昼寝をしているものさえいます。好ましいことではないのですが、うちの唯一の福利施設という意味で、目をつぶっています」

「しかし、うちの社員がこの手すりのビスを緩めた、とは考えられないでしょう。そうする意図が分からない」

「すみません。芳川さんがそう言われるのなら、違うのでしょうか。生駒は、立成の失礼な問いを緩和しようとした。

しかし、立成はお構い無しに芳川を質問攻めに行っている。

「出入りの業者はどうですか？」

手すりを眺めている芳川の視線は、驚くほど醒めているように感じた。

先ほどの松任と同じように、本当はもうこれ以上は関わって欲しくないのに、というようなニュアンスのある表情だった。

「いたずら目的で。手すりが外れたところで、下は川ですから、たいした惨事にならないかもと」

ここは外部犯行説にしておく方が気が楽だ。立成も微妙な逃げ口

を作りながら話している。確かに、社員に不信があるなら、芳川自身が管理を強化するだろう。

「そうかもしれません……」

思い当たる節があるのか、少し考えていたが、急に明るいい声を出して、

「あ、生駒さん、すみません。もう結構ですよ。後はうちの社員にやらせますから。どうもありがとうございます！」

と、腕を取り、立ち上がらせて、頭を下げた。

28 弁当箱のタイムカプセル

「アイスコーヒーでいいですか」

芳川が自分で冷蔵庫から紙パックを取り出した。

松任は何かを考え込んでいるのか、上司が給仕していることにもまるで無関心だ。

「あんな大雨でさえなければ、もう少しゆっくりもしていただけただろうし、テラスで夕涼みもしていただけたのに。それだけが残念です」

芳川の言葉に、このゲストハウスで行われたパーティの夜のこと 생각이出された。

「そうそう。誰もプールに入らなかったし」と、優が冗談をいった。

松任を眺めていた立成が、弾かれたように、

「芳川事務所の女性社員の水着ショーでもあれば、なお良かった」と、乱暴なことをいって笑った。

「うっ、それはセクハラに」

「ウハハハハ！」

大声で笑った立成の顔は、無理に作ったという感があった。

確かに、母を殺された娘の前でいう冗談にしては、品がなかったと自分でも思っただろう。

「いや、失礼」と、神妙に頭を掻いた。

芳川は、

「それはおもしろかったかもしれない。今後の参考にお聞きしておきます」と、まじめな顔で頷いている。

まさか、いい案だと本気で思ったわけではないだろうが、他に反応のしようがなかったというところだろう。

生駒は、気になっていたことを聞いてみることにした。

芳川が知っているはずもないと思うが、案外立成は知っているかもしれない。

「あれから金谷さんとはお会いになりましたか」

「いえ」と、ふたりとも首を横に振る。

「パーティの日、あれから金谷さん、どうされたんでしょうか。姿を見かけなかったけど」

重ねて聞くと、

「そついや、お開きするとき、おられなかったような」

芳川は、あくまで平静。

立成は、アイスコーヒーをストローでかき混ぜている。

「んー、待てよ。用意していた手土産は、きちんと人数分渡したと報告を受けているが……」

芳川の思案顔に、立成が声を重ねた。

「いやあ、すみません。ゲストハウスの玄関にそれらしいものがあったんで、差し出がましいとは思いながら、私が勝手に渡してやりました」

立成は、ストローをテーブルに置いて、グラスに口をつけた。

「いえね、あの体たらくでしょう。お開きになる前に、そつと帰ったほうがいいって、下まで送ってやったんですよ」

「そうだったんですか。それはそれは、お手間を取らせましたね」

「いえ、なんの。すっかりしてお話しするのを忘れていました」

「タクシーで？」

「いや、歩いて帰るって言うんで。あの雨の中を、地下鉄の駅に走っていききましたよ」

「うちの社員は、お見送りをしましたんですか？」

芳川は松任にちらりと眼をやったが、相変わらず、あらぬほうを見やっついていて、反応がない。よほど憔悴しきっているのだろう。

「いえいえ」

と言いながら、立成は松任が気になるのか、何度も眼をやっている。

「それはまた、失礼なことをしました」

「誰の目にもつかないほうが、彼も気が楽でしたでしょうから。お気になさらずに」

「さぞ……」

芳川は言葉を搜したが、あの状況の金谷に掛ける上手い言葉は、多くはない。

「さぞ、シユンとされていたでしょう」と、言うのがせいぜいのことだろう。

芳川がゲストに対して何とか礼を保とうとしていたが、

「ああいう男なんです」

と、立成は冷やややかな口調で吐き捨てた。

「まあまあ、そうおっしゃらずに……」

「以前、こんなことがありましてな」

騙されたという言葉を何度も使って、立成は数年前の金谷の不幸を責めた。

おでん屋でニュースを聞いて以来、生駒は彼らと顔を合わせるのは今日が始めてだ。

まずは情報交換といきたかったが、松任を前にしてそんな雑談めいた話をするわけにはいかない。

話題といっても、事情聴取の時に仕入れた話や、新聞やテレビのニュースを元に見聞きしたことを披露しあうのが関の山だろう。

新情報があるとしても、事情聴取にどう答えたのか、ということくらいなものだ。

立成と芳川が、金谷の話をしている。
昔のことだ。

松任は聞いているのかいないのか、黙って時々は頷いてはいるが、耳には入っていない風だ。

「そうなんですか。なかなか誠実そうな人だと私には見えるんですけどね」

芳川の反応に、相槌を打つ立成。

「誠実ですよ。見ようによってはね。しかし、脇が甘いというか、抜けているというか……」

しかし、立成にしても、単に場を繋ぐためだけの話題なのだろう。投げやりで、頭に浮かんだ言葉をそのまま放ったような話し方だ。

「一緒に仕事をするには注意が必要な男だ、ということですね。生駒さんも気をつけたほうがいい」

立成がいきなり生駒に向き直って、今更ながら口惜しいのか、成り行き上のポーズなのか、微妙にひょうきんな表情で、唇をかんてみせた。

しかしすぐに、暗い話は飽きたというように、

「芳川さん。例のブログ、どこまでも続くといいですね」と、朗らかな声で、話題を変えた。

「私がこういうのも変なんですけど、ああいうパーティ、私、好きでしてね。いろんな人が集まって、なんとも楽しい」

芳川自慢の話題に水を向けたのだったが、立成の当ては外れた。

「ブログですけどね。あれ、もうそろそろやめようかと」

苦笑いをしつつも芳川は、幾分ほっとした表情を見せた。

「そうなんですか……」

おもしろがって始めたブログだったが、熱は冷めてしまったとい

うことだ。

区切りという意味でパーティをしたのだから、ちょうどいい機会だ。

しかも、あのミラーサイトが芳川の作であれば、ブログを継続することが虚しくなっている証拠であるし、悪意の第三者の作であれば、なおさら継続する意欲をそぐものだ。

「なにもやめなくても」

と、立成も一応は口にしたが、本人がやめるというものを続けさせる理由はない。

「あのブログのせいで、例のその、伊知さんの事件が起きたというわけではないんですけどねえ」

立成がもう一度、未練がましい台詞を吐いたが、積極的に芳川に翻意を促すようでもない。

「どう？ 生駒さんが跡を引き継いでみたら」

と、コロリと矛先を向けてくる。

「え？」

「どう？」

なおも勧めてくるが、本気でないことは目を見ればわかる。

「考えておきましょう。……というのは冗談です。とても私はそんな器じゃありませんから」

あんな厚かましい企画をできるわけがない、とはいえない。そもそも、全く興味がない。

「おお、それはいい考えた。生駒さんが引き継いでくださって……」
芳川も乗ってきたものの、社交辞令であることは、こちらも一目瞭然。

「ところで、解体工事はいつからかかる予定ですか？」
と、さっさと話題を変えてしまった。

生駒もほつとし、立成も仕事の話になって、すつと背筋を伸ばす。

「三日後からを予定しています」

「はい。で、どんな段取りで？」

「まずはお部屋の中のを、すべて撤去します。それから内装部材の取り外し。カーペットや畳なんかもそのときです」

芳川が小さく頷いている。

「最近ではリサイクル関係がうるさくなりましてね」

「ほう」

「たとえば、木材は再生利用しますし、家電製品なども別に取り外します。いわゆる分別ですな」

「なるほど」

「で、がらんどうになった段階で屋根をはずして、構造材を壊します。そして最後に、基礎の撤去という運びになります。芳川さんのお宅は、一戸建てでは珍しい鉄筋コンクリートですから、それらの廃材もコンクリートと鉄とに分別して搬出します」

「なるほど。なかなか手の込んだことをするんですね」

芳川がニコリとしていった。

「あの、ひとつお願いがあるのですが」

「はい」

「実は、床下に壺があると思うのです」

「壺ですか」

「いえ、まあ、なんというか、いわばタイムカプセルです。私が子供時分に埋めたものでして」

芳川はよほどばつが悪いのか、下を向いて、手を揉んだ。

「当時、流行りましたでしょう。中に何を入れたのか、もう記憶にないのですが、実家の思い出の品ということで取り出したいのです」
「言ってしまうてすつきりしたのか、意を決したように毅然として立成に伝えている。」

「壺といっても、瀬戸物でできた駅弁の容器で、もう粉々になって

しまっているかもしれませんが」

面倒なことだ。

壊してはいけないものが、しかもそんなに深いところに埋まっているわけでもないものを気にしつつ解体するというのは。

しかし立成は、そんな表情は微塵も見せずに、

「お安い御用です」と、朗らかに言った。

「見つかりましたら取っておきますよ。どの辺りに埋められたんです？」

「いや、そんなお手間は取らせませんよ。自分で探しますから。床板はいつ外されます？」

「はあ。内装を外すときの最後に」

「じゃ、そのときに探しに行きます。お邪魔にならないようにしますから」

仕事の話といっても、おまけのような話だった。

解体業者に頼んでもいいのだろうが、万一見つけるのに苦労すれば、作業員から立成は嫌味のひとつも言われるだろう。

芳川自身が自分で探すと言うのだから、好きにさせておく方が気が楽だと思ったのか、立成はあっさり芳川の妙な申し出を受け入れた。

「では、正確な日程が決まり次第お知らせします。でも、どの部屋の床下とおっしゃっていただいた方が正確ですな。多分、床板の撤去は一日で済むとは思いますが」

「別棟の中央の部屋です。そこが私の部屋だったもので」

「ああ、木造部分の建物ですな。わかりました」

立成の方も、思い出したというように芳川に申し入れをした。
「お庭の木のことなんですが」

「はい？」

「生駒さんに見てもらって、切るものと残すものを判断してもらおうと考えています。芳川さんの方から、これは切らずにおいて欲しいというものはありますか？」

「そうですね。これといって……ないですね。お任せしますよ」

「立派なお庭ですし、思い出もたくさんおありかと思いますが」
重ねて問うたが、芳川はそれには関心がない様子だった。

短い茶話会は終了となって、手すり調査隊は事務所を出た。

「助かったよ」

立成がエレベータが下り始めるなり礼を言ってくる。

「なんの。僕が来なくても、立成さんが見つけられたでしょう」

「それにしても、あれは妙だったな」

「施工不良ではないですね。きちんと五枚ずつというのは、意図的な臭いがする」

「うむ」

「おっしゃったように、内部の犯行ですね」

「芳川さんに恨みを持っているやつが、社内にいるんだろうよ。あれほど一気に大きくなった会社だ。社外はもちろん、社内にもいろいろ軋轢があるんだろうな」

「かもしれませんね」

透明感のある秋の日差しとはいえ、大地に蓄えられた熱はまだ冷め切ってはいない。

三人は、せつかく冷ました体を灼熱の車内に入れることをためらうように、ロビーに立ち止まった。

「ところで、これまた急な話で申し訳ないんだけど、さっきの話。須磨の敷地の木」

「はい」

「残しておいた方がいいものを、選んでおいてくれないか」

立成が鞆から数枚の書類を取り出した。

「描いてもらっている計画に即した形で構わない」

「ええ」

「芳川さんはあのとおり。わしも生駒さんにお任せだ」

立成がよこしてきた敷地図には、手回し良く、めぼしい木にはすでに印が付けてあった。

「移植というのは無しにして、その場で残すものという目で選んで欲しい」

「了解です」

「で、その残す木を、解体業者に伝えておいてくれたらいい。業者にはわしから、生駒先生から指示があると連絡しておくから」

解体工事のスケジュールや業者の連絡先を記載した書類を手渡された。

「それでな、例のタイムカプセルってやつ」

立成が現況図にマークをつけた。

「もし時間があるようだったら、ついでに……」

「彼の口ぶりでは、見られたくないもののような」

「そうかな」

生駒は、単に面倒なだけだったが。

29 プッチンプリン

「社員のいらすらかあ……」
優が小首を傾げている。

事務所の打ち合わせ机には、プッチンプリンがふたつ。

「パーティの日まで、一度も鳴ったことがなかったのかなあ」
プチン。

「そこを聞いておかなくちゃ」
確かにそうだ。

「聞いてみてよ」

「ああん？ 誰に？」

「悪徳税理士に決まってるやん」

あのサービス調査で、生駒は自分の役割は十分果たしたと考えていた。

「そんなつまらないことを」

「つまらなくないやん。少なくともあの税理士にとっては」

「うっん。建築家の大先生が原因を究明してくれようとしているんやから、ありがたく教えてくれるんとちがう？」

「彼にとっても、どうでもいいことやろ。もし、大切なことだったとしても、それを僕がしつこく聞くのが変だつつうの。おまえは何でまた、そんなことに首を突っ込むんだ？」

やれやれというように首を振った優は、すでに黒いキャミソールに着替えていて、すがすがしい。

「忘れたん？ ルナが嫌いやっていう音」

「は？」

「もう！ 助手君！」

こういつ風に、ふたりで向かい合って座り、甘いものを口にしながら、他愛もないことを話すが、生駒は好きだ。

こういうときに、この娘を心の底から好きだと感じるのだった。

好きだというだけでなく、もしかして、幸せという感触も味わうのだった。

「なんやねん。どっちにしろ、それってどうでもいいことやろ」

目の前の姫は、プリン最後の欠片をツルリと吸い込むと、フンと鼻を鳴らして、早速、携帯を取り出した。

「ルナに、もう一度ちゃんと聞いてみる」

今のなんでもない穏やかな幸せとは、自分たちの今後のこと、ではない会話だからかもしれない。

瑠奈によれば、確かに鳴り始めは例の我慢ができない音だったらしい。

しばらく下の事務所で様子を見ていたが、頃あいを見て上がっていくと、音は同じように鳴ってはいるのだが、微妙に音階が上がっていたという。少しでも変わればなんともないそうだ。

「と、いうことなんやて」

「で、だから、それがどうした」

「そのパンチングメタルっていうの？ ノブはそれを社員の不良分子が落下させようとしたと思ってるんやろ？」

「わからないさ。でも、まあ、それっぽい」

優と向き合って、ここでこれまでどんな話をしてきただろう。

いろんなところに出かけたりもするが、わざわざ出かけなくても、ここで、自分の家で向き合って話すことが、ふたりの幸せの根幹をなしている。

それを生駒は最近つくづく思うのだった。

どこそこのスーパーの野菜は悪いよね、というような何気ない日常の話題であっても。

新聞の旅行の広告を見ながら、行きもしないのに、マチュピチュに行くのなら、まずはパリよね、というような話題であっても。

「違うかもしれないなあ。例えばさ、音を出すことが目的やとしたら？」

「はあ？ そんな話、聞いたこともないぞ」

「あり得ないことはないよ。ルナを困らせようと、とかさ。あの子、その音を聞いたら卒倒するかもしれないって、だれかれなしに話してるんやから」

「妙なことを思いつくなあ」

「とーぜん。真剣に推理してるからね」

「変なやつ」

「なんとでも。ノブなんて、もう推理する気なんてないんでしょ」

パパラッチで推理ごっこをしたときのことを思い出した。

そして瀬謡に呼ばれて話し合ったときのこと。

しかし、それらの出来事のリアリティは日経つことに薄れてゆくのだった。

「で、名探偵の推理によれば、どういう説が成り立つんだ？」

「そこが問題」

うーんと、唸ってから、優はペロリと舌を出した。

「あの音でルナに恥をかかせようとしたのか、ルナを追いつたのか」

「分かってないんだな」

「分かるわけないやん。でも、だいたいイメージできてる」

「はあ、くだらない」

こういう幸せ感は、いいところで切り上げることが肝心だ。だからだと続けると薄れる。

生駒は仕事に掛かろうとした。

「こら！ 芳川のおっさんへ電話。ほら」

「だから、聞けないって」

「だったら、その子分」

松任になら聞けるかもしれない。生駒のその一瞬の逡巡を、優が見逃すはずもない。

「彼女ならいいかなって、今、思ったやろ。ほらほら」

「へえへえ」

しかし、松任の返事はそっけなかった。

音の件については記憶にないという返事だけ。

「さ、この話は終わり。今日は忙しいんだ」

「忙しいくせに神戸までドライブしたり、手すりのビスを締め直しに行ったんだあ」

「教養活動と営業活動の一環」

「せいぜいグレイトな仕事を取ってきて、私にもいいめをさせてね。期待してるよん。でもさ、誰かさんは知ってたんやな、きっと。あのパネルをいじれば音が鳴るって」

「しつこいな！」

「どうすればどんな音階の音が鳴るかってことも、正確に知ってたんだな。特定音階嫌悪症 *specific phobia* タイプの人を苦しめる音を出すにはこうするって」

「そういうことにしておこう」

生駒はパソコンに向かった。

「こら、まだ続きがあるよん。というか、すばらしい情報があるんやでえー」

「はああ。僕も仕事をせにやなんのや」

優は容赦なく後ろから声を投げてくる。

「さつき、トイレにいくついでに松任さんに聞いてみたんよ。例の、ほら、あの立成さんの伊知さんへのプレゼント」

「え？」

優はあの話松任にしてしまったのか。

「なぜ？」

伊知の娘の耳に入れてしまうことに、どんな意味があるというのだ。

それは人として、していいことなのかどうか、まだわからない。しかも、吉と出るか凶と出るか、分らないではないか。少なくとも今は、いざというときの弾として取っておこうと話していたのに。

「プレゼントのことは言っていないよ」

「紛らわしいことを言うな」

「伊知さんと立成さんの関係について、思い当たることはあるかって聞いてみただけ。そしたら、どうだったと思う？」

見当もつかない。

「それって、ストレートに聞いたわけ？」

「当たり前やん。そういうことはあいまいに聞くことじゃないから」

「そうか？」

「松任さんはね、びっくり仰天、口パク状態」

「はあ……」

なるほど、それで今の電話の愛想がなかったわけだ。

「でね。冒険かなとは思ってたんだけど、ピアノの形をしたオルゴールっていう話も出してみたんだ」

「やっぱり言ってしまったのか」

「ううん。ポンと口にして反応を見ただけ。するとさ、なんだか怒ったみたいな顔になって、失礼しますって行っちゃった」

「はあ？ 要するに、どういう反応だったんだ？」

松任は頭は切れるが、どちらかといえば硬い感じを受ける女性だ。はあ？ なんなの、それえー？ と、笑って反応するのではなく、バカにされたと感じてビシリと背を向けてしまうような人だ。失礼しますって行っちゃった、というのは分かる感じがする。

「なんともいえない。私のぶしつけさに怒ったのかもしれないし、オルゴールに反応して不機嫌な顔をしたのか、あるいは反応したことを隠すために背を向けたのか。分からなかった。しっばいー」
「せっかくの弾だったのに。何のためにそんなことしたんだ？」
「へへ。ごめん。でもさ、いま撃つべき弾だと思ってん」

立成からのプレゼントということがどういう威力のある弾なのかは、生駒も目処がわけではなかった。

でも、最初に撃ってしまう弾ではなかったのに。そういう気持ち顔に出ていたのだろう。優は後ろから生駒の首に腕を回し、薄くなった頭頂部に顎を乗せてきた。

「誰もいないところで顔を見ながら話を聞く機会って、なかなかさそうやし。ええい、このチャンスに聞いてしまえって。彼女なら伊知さんと立成さんの秘密の関係を知っているかもしれないから、なにかボロツと」

「そんなに都合よくいくか！」

「そうよね」

「今日は気もそぞろって感じだった。親が殺されたんだから」

「うん」

「それになぜか、自分の親だということを、僕らに隠していたようだし」

「でも、気もそぞろって、それだけかなあ。私が受けた印象は、ちよつとニュアンスが違うかな」

「ん？」

「自分が伊知さんの娘だったこと、悪徳弁護士にも黙ってたりしてあの場でノブにばらされたらどうしようかって」

「隠したい相手は僕らじゃなく、芳川さん？」

「普通はそうでしょ。私達は彼女となんの関係もないもん」

「そりゃそうだ。でも、雇い主の芳川さんに隠しておくことにどん

な意味がある？」

「私に分るわけないやん」

「おいおい、ならなんで唐突なヒアリングなんぞ」

「だから、なにか口走ってくれたらおもしろいかな、と」

「はあ……、いつまでも弁解するな」

「はい」

30 中年OLの自慢

松任歩美。

要マーク人物ということで生駒と優の意見は一致した。犯人云々という意味ではなく、推理の糸口になるかもしれないという意味である。

ただ、気になるといえば、立成と芳川の関係にも不審が芽生えていた。

契約直前になって芳川は土地代金を大幅に下げたという。土地に瑕疵があったということを聞かされていないし、芳川は急に金が必要という様子でもない。

彼ら以外にも気になる人物はいる。

というより、容疑者候補一号は、雲隠れしてしまった金谷であることは変わらない。

丸山はいわば変なやつだが、現在進行形では伊知との接点がない。瀬謡と瑠奈については白、というのが生駒と優の立てた仮説だった。

「金谷さんからのファックスは今日もなし」と、優がファックス機を確かめた。

「電話もメールもなし」

「じゃ、事務所に行ってみよ」

いくらなんでもおかしい、と思い始めていた。

相変わらず金谷の事務所の電話は留守電のままだし、携帯は電源が入っていない状態。

もともと、ルーズさがあの男のキャラクターだといっても、さすがに不安になっていた。

警察は関心を持っているはず。だからといって生駒の不安が治ま

るものでもなかった。
「行ってみるか」

金谷の事務所は近鉄奈良線の高架の近くにあった。
下町である。まだ商店街に活気があり、多くの人が密集して住む
ことを楽しんでいるような街だ。
小さな雑居ビルの三階。

「なんともいえないよ、ここ……。埃だらけ。汚い……」
「しっ、聞こえるぞ」

安普請の雑居ビルの中廊下。塗装の剥げかけた玄関ドアが並んで
いる。

脂の浮いた蛍光灯に、イベントガラスという金谷の会社の表札が
照らされていた。

ドアノブを回そうとしたが、動かない。

「予想通りか」

「これ見て」

郵便受けに大量の郵便物や新聞が突き刺さっていた。溢れてしま
って、脇に転がっているビールケースの上にも積み重なっている。

「そうとう長い間、お留守のようやね。あ、ノブ、なに見てるん？」
「電気メーター。ほとんど回っていない。でも少しだけ回っている
ということは、電気が止められているわけじゃない」

「お、探偵ごっこ」

「ケッ」

「ちよつと、あんたたち」

突然、声がした。

「ここの事務所の関係者？」

と、中年の女性が近づいてきた。

「いえ、違いますけど」

「そんじゃ、ここの社長の知り合い？」

「はあ、そんなもんです」

ぼさぼさ頭の中年女性は、一応はOLなのだろう。よれよれの事務服を着ている。

ポケットに片手をつっ込みながら、

「じゃ、これ、なんとかしておくれ」

と、ビールケースに積まれた新聞やチラシの山を指差した。

「困るんやがな。こういうことされちゃ。整理整頓」

中年OLは、威圧するように腰に手をやって、睨みつけてきた。

「見てみ、どこの会社も狭いのを我慢してやりくりしているっていうのに、この人はいつもこんな調子や。勝手に捨ててしまうわけにもいかんし」

「はあ」

「だいたい、留守にするならするで、新聞を止めりゃあいいのに」

「はあ」

「ところでさあ」

中年OLの声がにわかに秘密ごとめいたかと思うと、すっと体を寄せてきた。

生駒は思わず後ずさり。

「この人、なんか事件に巻き込まれたんとちがつ？」

「え？」

「こないだ、警察が来てな。私が聞かれたんだよ」という。

警察に質問されたからといって、自慢するほどのことではないが、ここは驚いてやらねば失礼にあたる。

「え、そうなんですか」

すごいですね、と言いきりになったが、さすがにそれは思いとど

まった。

「なんでも、重要な事件の関係者らしいよ」

事務員は重要な、というところを強調する。殺人事件の捜査なのだから、それはそれはとても重要だろう。

「へえ、どんな事件なんです？」

生駒は興味溢れるもので、事務員の滑らかな口を期待する。

「さあ、それは知らんけど」

「はあ」

OLは、それだけでは受けないと思ったのか、

「この社長ね、社長といっても社員はいないんだけどね、いつから姿が見えないかってことをしつこく聞くんだよ。私に分らないと言うと、それでも何かを思い出せて。テレビの刑事とおなじことを言うんだね。なんだかおかしくなってるさ。それまでは緊張してたんだけど……」

そんなどうでもいい話を続けそうになる。

「この社長は金谷という人なんですけどね、僕も探しているんですよ」

「ふーん。でも、あんた、刑事や金貸しには見えないけどねえ」

事務員は初めて優に目を向けた。ハハア、という顔だ。最近やたらと出てくる消費者金融のテレビコマーシャルの可愛いオペレータか何かと勘違いしているのかもしれない。

「違いますよ。仕事の関係で打ち合わせをしたくって電話を入れているんですが、一向に出ないもんで、見に来たんです」

事務員は、また「ふうん」だ。

今度は値踏みするような目を向けてきた。

さ、そろそろ教えてもらおうか。

「で、いつごろからこの事務所は留守になっているんでしょうか」
「だから、それは知らないって言ったやろ」

「そうですか……」

「新聞を調べたら、分かるやん」

優の提案だ。お、それだ。

「ダメダメ。台風が来たとき散らばってしまつて、捨ててしまつたから。今そこに溜まつているのは、それ以降のやつ」

事務員は大げさに手を振つて、優の鼻をあかした喜びを表した。

「でも、私がここの社長を最後に見かけた日はいつか、ってことは言えるよ」

それを先に言えよ。

「警察の人にも教えてやつた」

はいはい。

「九月一日さ。台風が来るつからつてんで、回覧板を持ってきたとき」

回覧板？ この雑居ビルに？ 驚きだ。そんな所帯じみたものが回ってくる貸しビルつて。なんと庶民的な。

「そうなんですか。回覧板を……」

「いつもは郵便受けに放り込んでくだけなんやけど、至急回覧やつたからね」

至急回覧ねえ。なんともいいようなない響き。

「はあ。で、それは何時ごろです？」

「朝のうちさ」

「それ以降は誰も、金谷さんを見かけられていないんですね」

「他の人のことは知らんさ」

成果はそれだけだつた。

しかしまあ、大きな成果なのだろう。パーティの日の朝以降は見かけていない、というのだから。

「老人ホームも行ってみるか？」

金谷がいつもボランティアで絵を描いている特別養護老人ホームの名前は聞いていたし、だいたい場所は調べてきていた。

こちらの方には警察の手も回っていないかもしれない。

「オーケー」

「とはいいいながら、聞くのは電話でいいだろ。それともなにか？」

金谷さんのお母さんにも話を聞こうってか？」

「あ、そうやね、グッドアイデア」

「おい、あまり気が進まないぞ。神戸の垂水区だ。遠い」

「ホントは右に同じ」

「ということで、電話で済まそう」

電話口に出た老人ホームの職員は、金谷は今月に入ってから顔を見せていないと教えてくれた。そして、母親はとても心配しているので、会うことがあればそう伝えて欲しいと熱望された。

「なんだか、忙しくなってきたなあ」

そんな言葉と裏腹に、優が大きく伸びをした。

「へそが見えてるぞ」

31 卵とキスの南蛮漬

「先日はありがとうございました。暑い中をご参列頂きまして」

「このたびはご愁傷さまです。お力を落とされないうよう」

瀬謡は、松任を慰める言葉が見つからなかった。

「やつぱりあなた、馨の娘さんだったんですね」

お悔やみの言葉としては妙だとは思いながらも、他に声のかけようがない。

「はい……」

松任は悄然として下を向いたまま。

話があると来ておきながら、なかなか用件を切り出さない。

もちろん馨の、この女性にとっては母親の事件のことだろう。自分なりに犯人の目星をつけているのかもしれない。それを話してよいものかどうか、今になって迷っているのかもしれない。

そこへ、

「こんにちは」と、勢いよく店の戸が開いて生駒と三条が入ってきた。

松任が話をしに来るといので、誘っておいたのだ。

差し出がましいとは思ったが、もし事件の核心に迫る話を聞くのなら、ひとりでは荷が重い。

松任はもつと驚くと思ったが、意外にもさして気にとめていないようで、

「あ、こんにちは」

と、自分の隣に座るようにと、椅子の上に置いたバッグを棚に移してやる。

「生駒さんたちにも声を掛けたんだよ」

「いいですか？」と、生駒がさりげなく松任の顔を覗きこんだ。

「もちろん。皆さんが事件のことについて話し合われていることは、

塊田さんから聞いています」

「話し合うつてほどもないんですが、どうしても気になることがあつて」

生駒はそう弁解したが、松任はこれにもそれほど反応を示さない。

きつと、自分が今から話そうと思っている内容を反芻することで頭が一杯なのだろう。

それを先に吐き出させてあげたほうがいいようだ。

「じゃ、さっそくお聞きしましょう」

瀬謡はざつくばらんに水を向けた。

「はい。どうお話しすればいいのか、悩みまして……」

ようやく本題に入ったが、

「事件に関係するのかどうか分かりませんし……」と、なかなか前に進まない。

それに、松任の眼が潤んでいた。

「これからお話しすることは、警察にも話していません。取り乱していたということもありますが、母の、譬の、なんと云いますか、名誉に関わることもなとも思いましたので。でも、私は毎日悩みました。どなたかに話そうか。瀬謡さんは昔からの母のご友人ですから何かご存知かもしれない。お話ししようか。でも、これ以上、嫌なことは知りたくはない。そんな考えを行ったり来たりしました。そしてやっと、このままでは私の気持ちの整理がつきそうにないということに気がつきました。やはり誰かに聞いていただきたいと考えたのです。しかし、まさか祖父や父に話すことはできない内容なのです。ですから今日、瀬謡さんに連絡を差し上げたのです。生駒さんも母とご懇意だったとか。ぜひご意見を聞かせていただけたらと思います」

生駒が姿勢を正した。

「パーティの後半、私が疲れて二階の部屋で休ませていただいたときのことでした」

松任の口から出てきた話の前半は、馨と金谷のやり取りと、それを見聞きした松任の感想。

これは十分、想像できることだった。

後半は、馨と立成、あるいは姉の美弥子と立成のなんらかの関係について。

こちらにも、生駒や三条との無責任な想像話として、出ていた内容だった。そしてなにより、すでに立成自身から、三十年前、美弥子と海水浴に行ったのは自分だと聞いている。

「あの、いかがでしょうか？ この話、警察にしたほうがいいでしょうか？」

松任がおずおずと聞いてくる。

瀬謡はなんとなく違和感を感じた。

松任の暴露話はそれはそれで衝撃的だったが、結局のところ、馨と立成と金谷の関係について瀬謡らが想像し、立成に確かめたことを補完する意味合いしか持っていなかったからだ。

「そうだねえ」

と、言葉を濁して生駒に眼をやると、表情を変えまいと意識しているのか、こわばった顔をしている。三条は相変わらず、のほほんとおでんをつついているが。

松任に見つめられている。

その目には、切羽詰ったときに見せる光があった。

「話した方がいいんじゃないですか」と、奥から夫が声を掛けた。

「はい……」

松任は頼りなげな返事をして立ち上がった。

「あれ、もう帰るのかい？」

「はい。どうも今日はありがとうございました」

ますます違和感が募った。

たったあれだけのことを話すために？

いや、殺された母親のことだから慎重にというのも分からないではないが、どうも大げさではないか。

それに、唐突に帰ると言い出したことにも、なにか理由があるような気がした。

「もう少しゆっくりしていけば？」

「いえ、急ぎますので」

あわてたように財布を取り出す。

隠していることがある。話そうと思っていたが、やめたのだ。

瀬謡の直感はそのう告げていた。

「勘定はいいよ。今日は」

「そういうわけにはいきません」

それじゃ、と千円札を一枚、カウンターの上に置くと、松任はそそくさと表の引き戸を開けた。

「ちょっとお待ちよ。まだ話し足りないことがあるんじゃない？」

「いえ」

普通、そう言われたら、後ろ髪を引かれるような素振りのひとつも見せるものではないか。

しかし、松任は出て行くとする。

「お気をつけてね」と、言うしかない。

しかし、その声に、

「松任さん、あなた、たったそれだけを言いに来たの？」という、

三条の声が重なった。

松任の耳に聞こえていないはずはないが、一旦開けた戸を閉めようとはせず、振り返って誰にともなく会釈をただけで外へ出て行った。

「変なの。もっと大事な話があるのかと思ったのに」

「ちよつと三条さん、言いすぎよ」

瀬謡はたしなめようとしたが、その言葉に力はこもっていなかった。自分自身が拍子抜けしていたからだ。

「だってさあ」

三条は皿の卵を、箸でつついて転がしている。

「冷めないうちに食べなよ。さ、生駒さん、お皿が空っぱだよ。何か出そうか」

瀬謡は陽気に言つて、落胆を押し隠そうとした。

「てつきりもつと違う話が出ると思つてたんだけど」

と、三条が箸をぶつとりと卵に突き刺した。

「だよな」と、生駒もいう。

「ふたりとも、なぜそう思うのさ」

「スライド上映の少し前、伊知さんが瀬謡さんにこう話していました。あいつ、許せない。私たち家族をむちゃくちゃにして」

生駒は、コロとヒロウスとレタス巻き、と皿を出してきた。

「あれつて、どういう意味なんです？」

瀬謡も、その言葉はもちろん覚えていた。

あのとき、何の前触れもなく、唐突に馨はそう言ったのだった。

そして怒りのこもった目で会場を見渡していた。

独り言だった。ただ、その真意を聞くタイミングではなかった。

他人がすぐそばに来ていたから。そう、松任が。その後ろには芳川と立成も。

それに気づいて、あわてて馨は笑顔を作っていたが、松任だけではなく、芳川や立成の耳にも届いていたことだろう。そして、生駒と三条の耳にも届いていたのだ。

「どうつて……」

結局、馨が死んでしまった今となつては、その言葉の意味を確か

めることはできなくなってしまった。

立成に向けた言葉だったとしても、それははるか三十年も前、自分ではなく美弥子と海水浴に行ったことを指していたのだろうか。

「松任さんも聞いていたわけでしょ。母親の言葉を。その意味について、当然、聞かせてくれてもいいものだと思うない？」

三条が、キスの南蛮漬けを注文した。

「そうだね」

「だいたいの想像はしているけど」

「え！」

三条がニコリとした。

瀬謡の頭の中にも、勝手な想像が駆け巡っていく。

「瀬謡さんはもしかするとご存知かも、と思うんですけど」

質問を投げられた。

「伊知さんと松任さんは、親子でありながら、その素振りを見せなかった。理由はなんなんですか？」

傍聴席にいたはずが、いきなり検察から証言を求められたようなものだ。

もちろん、分からない。告別式で松任の姿を見るまで、自分も知らなかったことなのだ。

黙って首を横に振った。

「じゃ、私の仮説を聞いてもらえますか？」

32 姑息な

数日後、おでん屋に立成が姿を見せた。馨のニュースを聞いたとき以来だ。

「葬式、行ったんだろ」

幸い店に他の客はいない。瀬謡は丸椅子に座り直した。

「ああ、生駒さんも来てくれた」

「らしいな。わしにも知らせてくれたらよかったのに」

「そうだね。もっと早くに昔のことを聞いておくんだったね」

「フン。で、どうだった？」

告別式の様子を話して聞かせる。

「それにしても、かわいそうな姉妹だよね」

平板な表現だが、感想としてはそう言うしかない。

「犯人はまだ見つかりそうにないのか」

「のようだね」

「旧友として、思い当たることはないのか」

「悔しいんだけどさ」

まさか、立成がという考えもあるとは、「冗談でもいえない。

「実は」

立成がタバコをくわえた。

「単なる思いつきやとは思うんだが」

言葉とは裏腹に、声が幾分弾んでいる。

「なあに？」

「あんた、伊知さんと金谷がどうのこうのって、言ってたやろ。その線はどうや？」

順当な反応だ。

ただ瀬謡は、ことこの件に関しては立成に心を許すまい、と決めている。

「どついう意味？」

「仲はうまくいったのか？」

「さあ」

「丸山と言い争ったとき……」

「そうだね。あたしもそう思った。でもね」

「ふたりがすでに別れていたことは教えてやる。」

「そうか……」

「いったい、この店の周りに回ってるっていう人の輪は、どうなってるんだろね」

須磨の海の家。

三十年前の出来事。

馨、美弥子の姉妹。

立成もあの事件に立ち会っていた。

生駒と丸山はその店でバイトとして働き……。

「いくらなんでもできすぎや。誰かが画策したのか？ それとも偶然か？」

伊知馨を芳川に紹介したのは瀬謡自身だ。そこには、なにも意図したところはない。

「きつとんでもない偶然なんだよ。でも、馨を紹介したあたしにも責任があるのかも」

「なんの責任が？ 殺されたことの？ そりゃない。ブログもインタビューのリレー方式も、それに音というテーマにしても、おでんを食いながらの思いつきなんや」

ふと、この目の前の男が芳川をたきつけ、すべてを仕組んで、ということとは考えられるだろうかと思った。

立成が顔を近づけてきた。タバコの煙と共に口から出てきたのは、感情を押し殺した声だった。

「松任さんな。彼女、伊知さんの娘やそうやな」

「ああ、そうなんだよ。あたしもびつくりした」

「あんたも知らなかったんか」

「そうだよ。生駒さんに聞いたんだね」

「なんだ、生駒は。そんな大事な話を立成にべらべらしゃべってしまっただのか。」

「推理だとか言いながら、脇が甘いじゃないか。」

「三条から聞いた仮説が脳裏に蘇ってくる。ただ、今はまだ立成には絶対に話せないことだ。」

「瀬謡はなんとなく身構えた。」

「芳川さんも知らんのやないかな」

「言っちゃダメだよ」

「ん？」

「そりゃそうさ。あたしたち、顔見知り以上の仲だよ。立成さんも芳川さんもあたしも。なのに、今まで松任さんは話さなかった。話せない事情があるんだよ」

「そうか。そうやな」

「立成が了解したとばかりに微笑み、」

「アリバイ、聞かれたやろ。どう言った？」

「と、軽めの話題に変えてくる。」

「あんたはどうなのさ」

「わしか。九月四日の夜は八時ごろから得意先の接待で、北新地のラウンジ回り。一時頃タクシーで帰宅。で、朝までぐっすり。新地の店やタクシーは警察の方で調べたはずや」

「アリバイ披露という新鮮な話題に一息ついたところで、立成の表情が穏やかになり、口も回り始める。」

「立成だけでなく、瀬謡もそうだった。」

「ご自宅は箕面だったね」

「ああ。それからこっそり大阪まで出てきたんやろうと言われたら、」

どうしようもないけどな。いくらひとり住まいだからって、わしを疑うなよ」

「疑われているのかい？」

「まさか」

「警察は三十年前の事件のこと、馨と立成さんのことを知ってるよ。うだった？」

「いいや。そんな様子はまったくなかったな。単にパーティの参加者のひとりという扱い。で、そっちは？」

「三日も四日も、いつもと同じように十一時頃に店を閉めて、後はお風呂に入ってちよつとだけテレビを見て寝た。それだけ。ずっと旦那と一緒に。三日のことも聞かれただろ？」

「ああ。芳川さんと松任さんと一緒にパパラッチで夕食をして、八時頃に別れた。そのまま帰宅。後は久しぶりにビデオ三昧」

「そう。で、他の人はどうだったの？」

「芳川さんの四日のアリバイは完璧らしい。四日から七日まで札幌出張やから。三日は、パパラッチを出てから事務所に一旦戻ってから、芦屋の自宅に帰った、ということやったな」

「松任さんは？」

「四日の夕方から、新装になった梅田の百貨店や本屋をうろついて帰ったそうやが、アリバイになるようなことはなにもないらしい。

三日はわたちと別れてから家に直行」

「詳しいんだ」

「ああ。みんな関心があるからな。自然にこういう話になる」

話題が途切れたところで、立成からおでんの追加注文が来た。

「あら、今日は食が進むね」

代わりに酒は進んでいない。

事件のことを探りに来たという意味があるのかもしれない。口調も穏やかで、いつもと様子が違う。

信用しきれないという気持ちが顔に出ていたのだろう。立成がぼそりと言った。

「機嫌が悪いな」

「当たり前だよ」

「友達が殺されたんやからな」

「そうさ。でも、どうにも収まらないのは、あんたのせいもあるさ」
「ん？」

「立成さん、あれ、オルゴールだったんだろ。どういう意味なのさ。そろそろ聞かせてくれないと、あたしにも考えがあるよ」

「なんだ、警察に教えるぞってか」

「そうさ」

立成の大きな目が威圧してきたが、さほど迫力はない。むしろ、困ったというような表情で、すつと顔をそむけてしまう。

「どうなのさ」

瀬謡は様々なことをすでに思い出していた。

粉々になったオルゴールをきっかけに、蘇ってきた記憶。

古いアルバムを涙目で繰りながら手繰り寄せた記憶。

大昔のオルゴール事件のことも。

それは、瀬謡が大学二回生の春、馨と立成が知り合って一年ほど経ったときのことだった。

サークルの部室の郵便受けに、ひとつの包みが入れられてあった。立成から馨へのプレゼント。開けてみるとオルゴール。

それを、馨はみんなの前で床に叩きつけた。

今思えば、立成の裏切り、つまり美弥子への心変わりに激昂していたのだろう。

「どうって、ま、お近づきのしるしに。昔のよしみで、喜んでもらえるかと」

目の前の立成は、もう伏目がちだ。

「じゃ、なぜ隠す必要があったのさ」

「前にも言っただろ。隠すというより、五十男の照れだと思ってくれよ」

「あんたが、照れねえ。でも、おあいにくさまだよ。馨はさ、あのオルゴール、三十年前と同じように叩き壊してしまったよ」

立成が大きく息を吐き出した。

「そうか……」

瀬謡にはことの次第が見えてきた。

立成は三十年振りに馨と再会し、関係を修復したいと思ったのだ。きっかけになればとオルゴールを贈った。あわよくば付き合いを再開したいと。

しかし、馨はその期待に沿うつもりは全くなかったということだ。

「あんなことせずに、ちゃんと話したほうがよかったんじゃない？」

「……ああ」

三十年前と同じようなプレゼントを贈って反応を見ると、姑息で浮ついた手段。

真剣に好意を寄せているのではない、ちょっとした気晴らしですよという逃げを暗に打っているような。

結果として馨の反感を買い、まともに話もできないままになってしまった。

瀬謡は初めて立成が小さく見えた。

そろそろ三条の期待に応えて、あの質問を投げてやろう。

「そりゃそうとさ、あんたのインタビューに、渚に残した足跡って曲のことがあったでしょ。あれ、思い出の曲？」

「はあ？」

「自分で言ったことも覚えていないんだ」

「いや、覚えているさ」

「じゃ、どう？」

「思い出といえはそういうことになるかな。でも実は、なんというか、自分でも、なぜその曲に特別な思いがあるのか分っていない」

「海の家で？」

「……」

立成は口をつぐんでいた。

目を瀬謡の顔からはずすと、天井を仰いだ。

「須磨の海の家で、美弥子さんが死んだとき」

瀬謡は代わりに言ってやる。

「……。でも、よくそんなことを思いつくなあ」

また立成は大きなため息をついた。そして、「さ、そろそろ帰るか」と、立ち上がる。

「いつもありがとうね。今日はごめんね。言いたいことって」

「いいさ。気にしてない」

「うん。それが立成さんのいいところ。でさ、子供は今、どうしているの？」

「なんのことや？ また急に変なことを言っなよ」

と、立成は首を振りながら出ていった。

「そう。三条って子はとんでもないことを思いつくよ」

瀬謡の独り言は、すでに立成の耳には届いていなかった。

33 マッシュルームが

須磨。

生駒はマンション計画地に木を見に行くついでに、再び叔父を訪ねた。

叔父は海の家屋号を覚えていなかったし、大将の名前も覚えていなかった。もちろんもうひとりのバイト君の名前も。

「延治君、それなら浅岡さんに聞いてみたら？ 近くに住んどるし、呼べばすぐに来よると思うで」

叔父と当時の元銀行員は、今では仲のいい暮敵だという。それでは、ということになった。

元銀行員は叔父の言葉通り、すぐにやってきた。

生駒が当時のバイトの礼を言うと、意外にも覚えているらしく、懐かしがってくれる。

暮の勝負が始まる前に聞きたいことを済ませてしまうことにした。まずは屋号。

「カナヤです」

「カナヤ！ どんな字です？」

「屋号としてはカタカナでしたな。大将が金谷さんやから。漁師さんなんですけどね」

やはり。懸案がひとつほどけてホッとする反面、必然的に力んでしまう。

果たして同一人物だろうか。

「確か、息子さんがいましたよね」

生駒は、金谷健吾の職業や年齢などをかいつまんで説明する。

「たぶん、その人でしょうな。息子さんの銀行口座がそのまま残っているはずやから、調べればすぐにフルネームは分かるけど、プライバシーの問題があるから」

ブログを読み直した生駒は、金谷が漁師の息子であることをすでに知っていた。

そして生駒の海の家の大将の本業も漁師だった。

しかも、住まいは同じ垂水。もう間違いない。

金谷はあの海の家の大将の息子、生駒がかつて避けていたあの乱暴な男だったのだ。

「バンドを組んでみたり、雀荘に入り浸ったり。ディスコにもよく顔を出して」

元銀行員は、大将の息子の人となりを話してくれる。

「大将はいつもどやしつけてましたなあ。大人になってからは、広告関係の仕事についたとか」

最近の金谷の人物像とは若干ずれてはいるが、永い年月が金谷の社交性を奪っていったのだろう。

「でも、どうしてそんなことをお聞きになるんです？ 一昨日も、そんなことを聞きに来た人がいたけど」

生駒は驚いた。さすが日本の警察だ。

「刑事やないですよ。昔、そこでアルバイトをしたっていう人」
ええっ。

予想外の言葉に生駒は一瞬言葉を失った。

ということは、あの精神虚弱児が？

「もしかして丸山？」

「そう、その人」

元銀行員は頷いた。

「金谷の大将には、よく学生バイトを紹介しましたからなあ。生駒さんと同じ年の夏、丸山さんも紹介したんです。例の事件があった年ですなあ」

なんと、あの男もわざわざ確かめにきていたのだ。

元銀行員は懐かしさがこみ上げてきたのか、まぶたをすつと細めた。

「それにしても、おふたりともお互いの名前をよく覚えてますなあ」ということは、丸山も生駒の名を出してこの元銀行員に聞いたということだ。

暮の勝負が始まった。

駅までの坂道を下りながら、生駒は物思いにふけった。

金谷と付き合ってもう何年にもなるが、今まで、かつてそんな接点があつたということを知らないできた。

人と人の出会いはほとんどの場合が偶然だが、金谷とはその偶然が二十年ほどの間をあけて、再び巡ってきていたということになる。たまたま須磨の海水浴場という話題が出て、ふと記憶の壺を覗きこむと、なんとなく予想していた通りの仕掛けが放り込んであつた。

絡みあい、よじれた釣り糸。

今、それをようやく解いた。そんな気分だ。

金谷はあの海の家の大將の息子だつた……。だから……。

しかし、だからどうだというのだ。

生駒はいつもの堂々巡りの思考に落ち込んでいく。

現在進行形の伊知と金谷の関係からは、伊知を殺した動機はさほど見えてはこない。

そして、三十年前の接点が明らかになったからといって、やはり金谷が今になって伊知を殺す理由には結びつかないのだった。

もし、三十年前の事件が金谷の犯行だつたとしたら……。

当時、一瞬でも金谷があ的事件の犯人ではないかと思つたのだ……。

三十年後の今になって、金谷と親しくしていた伊知が、なにかの

弾みでこの男が姉殺しの犯人だと気づいたのだとしたら……。

金谷の方でも、伊知に気づかれたと知り、口封じをしようとしたのだろうか。

そう、あのとき。

テラスで盛り上がっているとき、金谷は海の家が話題が始まるといつのまにか姿を消した……。

しかし、とつくに時効になった事件なのに？

金谷には、伊知を殺すという新たな罪を犯す必要などあっただろうか。

そうまでして守りたいものがあつたのだろうか。

それに、丸山の存在。

なんだかややこしい話になってきた。

単にパーティでの雑談であればそれで済むものを、丸山もわざわざ元銀行員を訪問したという。

いったい、なんのために？

同じように推理を？ まさか、生駒と親交を深めるために？
現実的ではない。

いや、丸山が三十年前の人殺しを……。

まさか……。

生駒はため息をついた。

そして立成まで絡んできた。

あの胸毛の巨漢は立成だったという。

立成は伊知にノクターンのオルゴールを贈り、伊知はそれを叩き壊した。

様々な人間関係が浮かび上がっては来た。

しかし、枝葉ばかりが茂る。一本の明快な幹の在り処が分かっていない。

幹はどこにあるのか。

一本ではなく、複数の幹があるのか。

須磨駅に着いた。

いつもと様子が違う。

あわただしく行きかう人。

タクシー乗り場にパトカーが数台。

赤色灯を光らせ、サイレンを鳴らした警察車両がまた一台到着。バクリとドアが開く。警察官らしき男が飛び出すと、コンコースへの階段を駆け登っていった。

須磨から帰ってくるなり、丸山から電話が架かってきた。至急会いたい、という。

生駒はすぐに優に連絡を入れた。

「今から丸山が来る」

「カーツ！　なぜもっと早く言ってくれないん！　すぐ行く！」
というなり、電話を切ってしまった。

世の中、なんでも自分の思い通りにはいかないぞ、とまるであの日の丸山のような台詞を携帯メールで送っておく。

もちろん、叔父の家で聞いてきたことも記しておいた。

「すみません。急に押しかけてきて」

丸山は土産だといって阪急百貨店の紙袋をテーブルの上に置くと、ぐるりと事務所内を見回した。

生駒はもうこの男にいい印象を持っていない。

コンビニのアルバイトの件がその主な理由だが、今こうして事務所を眺め回す様子も傍若無人で、いい気はしない。

「狭いでしょう」

「いえ、手ごろな広さじゃないですか。しゃれているし、いかにも建築家らしい事務所ですね」

「建築家らしいって、どういふところが？」

聞き流せばいいものを、つい聞き咎めたような口調になってしまふ。

先日のパーティの時には感じなかった胡散臭さが、この男のふざけた風貌から発散しているようだった。

細い指先で、赤茶色に染めた髪とピアスを交互にいじり、落ち着かない目をしばたたせている。

生駒は冷たい視線を隠すこともせず、丸山を観察した。

「なんとなく。建築雑誌とかいろんなカタログが、そう感じさせるのかなあ」

目が合った。

思わず、あの学生たちに給料を支払ってやったのかと聞きそうになったが、それより早く、丸山が改まった調子で口を開いた。

「ところで、伊知さんの事件のことなんですが」

やはり海の家と同僚だったことを喜び勇んで話しに來たわけではないようだ。

この男のことだ。それなら開口一番、懐かしさは本物でしたよ、などと言っだろう。

「生駒さんはなにか情報をお持ちでしょうか」

唐突な切り出し方だ。

「情報というと？ まだ犯人は捕まっていないということくらいしか知りませんが」

「そうですか」

声が弱々しい。

「実は、変な感じなんです」

数日前、芳川の訪問を受けたという。

芳川は単なる挨拶だといって世間話をして帰ったという。

「もしかすると税理士の仕事のことで、さりげなくうちの店を見に来られたのかなとは思いましたが、それにしても唐突な感じがしたんです」

それはない、と生駒は思った。

税理士が、まして超多忙な芳川が、仕事を頼まれてもいない相手の店や事務所の様子を自らチェックに行くとは考えられない。

「インタビューのときにお会いしたきりで、パーティのときにもろくすっぽお話もしなかったのに」

と、まだこの自分中心のお坊ちゃまは首をかしげている。

「僕にも分かりませんね」

「はあ。でも、それだけではないんです。瀬謡さんという方からは電話をもらいました」

探るような目で、ちらちらとこちらを伺っている。

「乾杯の音頭をとられたおでん屋のママさんですよ。インタビューもその店で受けられたんでしょう？」

「ええ。それは知っているんですが……」

「それがどうしたんです？ なにか気に障ることも言われましたか？」

さすがにきつすぎる言い方だと思ったが、生駒はこの男がますます嫌いになっていた。

「いえ、そういうことではないんですが」

マシユルムの愛想笑い。

いかにもそれだとわかる稚拙な笑顔。色白で女性的な物腰。

同僚の女子バイトを追い掛け回していた男。大将にクビにされた男。

親の遺産を受け継いでコンビニエンスストアを何店も持っている
資産家。

金谷と祥子を取り合い、勝ちを収め……。そんなことはどうでもいい。

「じゃ、瀬謡さんはなんと？」

「はい。須磨の海の家のことなどを……」

「はあ？」

生駒はとぼけてみせる。

「そうなんです……。そんな変なことを……」

丸山もとぼけている。

あの日、その変なことを楽しそうに話していたことを忘れたわけではあるまいに。

しかも、すでにこの男は、自分と生駒が同じ釜の飯を食ったバイト仲間だということを知っているはずなのに。

「そうそう。僕が働いていたのはカナヤっていう屋号の店でしたよ。丸山さんは？」

こいつの反応を確かめたくなった。

なぜ丸山がわざわざ元銀行員に会ってそれを聞いたかったのか。そしてそれをなぜいの一審に口にしないのか。

「へえ。そうなんですか」

丸山はそう言ったきり、考え込むふり。

至急会いたいと訪ねてきておきながら、なにをしたいのか、まだ意図は見えない。

「僕のところは違うような……。たぶん浜脇とかなんとか……」
驚いた。

明らかに嘘をついている。

「残念！ 違いましたかあ」

半ば予想していた驚きではあったが、オーバーアクションだったためか、丸山があわてて付け加えた。

「もう三十年も前のことですから、よく覚えてなくて」
「どうということなのだろう。」

この男はカナヤで働いていたことを隠しがつている。
突然、汗をかき始めたようで、ネクタイを緩めてハンカチを出した。

「暑いですか。すみません。ちょっとクーラーをきつくします。あ、お茶も出さず、失礼しました。気がつかなくて」

生駒は厨房に立った。考えを整理する時間が必要だ。

「一緒のところだったからおもしろいな、と思っていたのに」
と、投げかけておく。

暖簾の隙間から見る丸山は、背を丸めてしきりにハンカチで顔を拭っていた。

こうなったら、元銀行員からすでに聞いているということは伏せておこう。

丸山に思う存分話をさせてみるのだ。

アイスコーヒーをテーブルに出し、エアコンのリモコンをいじってから、生駒は話の続きを促した。

「瀬謡さんはなにを聞きたかったんでしょうね」

努めて優しく声をかけた。

「それが、ある事件のことを覚えているか、というようなことでして」

「ある事件？」

「女の人が殺された事件があったそうなんです……」

「どんな？」

「ぜんぜん知りません」

刑事ならこういふときどう追い詰めていくのだろう。

明らかな尻尾を出すまで泳がせておくのだろうか。黙っていると、「いったい、どういうことなんでしょう?」と、またあいまいな質問を投げてる。

自分勝手なやつだ。テラスで、こいつ自身が最後に出した話題がその事件のことではなかったのか。

「さあ」

「さあって……」

丸山は困惑したように口ももぐもぐと動かしたが、突如として血相を変えた。

そしてなんと、ヒッと笑った。

34 偵察

「そうか。やっぱり生駒さんも僕を疑っているんだ。いったいどういうこと？ さっぱり分からない」

「疑っている？ なにを？」

「伊知さんの事件のことに決まっているじゃありませんか。どんなふうにてだめを考えたら、僕が怪しいってことになるのかな？」

興奮してきたのか、先ほどまでのおどおどしたところは影を潜め、けなげに睨みつけてくる。

「誰もそんなことは言っていないんでしょう？」

やんわりと返すと、案の定、目つきが険しくなった。

「じゃ、どうということ？ 芳川さんが来たことも不自然だし、瀬謡さんは訳の分からない昔のことを詮索している」

「そうかなあ」

「あなたは、ふたりがなにを考えているのか、知っているんじゃないですか？」

「なぜ僕が？ 知りませんよ」

「知らないはずがないじゃない！ あんた自身も、店までわざわざ偵察に来たじゃない！」

「偵察？ それは心外だな」

「じゃ、なんなの！」

丸山が妙に女性っぽい言葉で一気にボルテージを上げたとき、玄関ドアが勢いよく開いた。

優だった。

「ただいま！」

一応は社員らしく入ってくるかと思ったら、違った。顔がこわばっている。

「ちよっと！ 聞いた？」

バタバタと駆け込んでくるなり、かばんを肩に掛けたまま、机の上にあった新聞をバサリと広げる。

テレビ欄とラジオ欄に目を凝らし、ニュースは六時までないわね、と放り出した。

丸山をまるで無視している。

「おい、何が起きたんだ。それに、丸山さんが来てくれているぞ」それでも優は、丸山に目もくれない。

机に両手をつき、

「金谷さんが死んだって！」と、叫んだ。

「なんで！」

丸山が椅子を倒してガバツと立ち上がり、うわずった声をあげた。

「どういうこと！」

「ラジオニュースでやってた！」

今日の午後一時、須磨浦海岸で男の死体が打ち上げられているのが発見された。

腐乱が進み、半ば白骨化していたが、東大阪市に住む金谷謙吾であることが確認されたという。

さつき、須磨駅で警察官が集まっていたのはそれだったのだ。

生駒はめまいがするほど驚いていた。

しかし、今は思考停止になってはいけない。

目の前に、真っ青になり、血の気の引いた唇を震わせている男がいる。

「殺されていたのか？」

首を横に振る優。

詳しいことは不明だという。

「大変なことになりましたね」

生駒は丸山に声をかけた。

懸命の努力をして、おだやかに。

「あ、三条さん。ちよつと席をはずしてくれないか」
優が目を剥いた。

「ちよつ、ノ」「さ、すまないね」「どういう」「さ、さ」
あくまで部下への厳命として押し通す。

優はくるりと背を向けると、乱暴に玄関ドアを押し開けて出て行った。

ついに丸山に一瞥さえくれなかった。

「丸山さん、もう少しゆっくりしてってください。さ、座り直して。ちよつとメールを送る約束がありますので、少しだけ待っていてください」

生駒は丸山を椅子に座らせてパソコンに向かった。

優に、丸山がシラをきっていることを伝えておかなければならぬ。

丸山さんは同じ海の家で働いていたんですってね、生駒も例の元銀行員に聞いたそうなんですよ、なんて言われたらおもしろくない。二十分ほどしたら、様子を見に来たという感じで戻って来いと書き添えた。

優の携帯のメルアドを、パソコンに入れておいてよかった。

「すみません。それにしてもなんというか……、驚きましたね。伊知さんに続いて金谷さんまで」

丸山は眉間に皺を寄せて、机の縁を見つめている。
応えようとはしない。

「丸山さん、いいですか？ 立ち入ったことをお聞きしますが、怒らないで聞いてください。パーティの日、金谷さんに絡まれていますね。あれ、どういうことだったんです？」

丸山はいよいよ辛そうな表情を見せた。

どんな反応を見せるか、なかば楽しみにしていたが、予想外にも応え方はしっかりしていた。

「それは……、他愛もないことなんです。彼はどうやら、僕の妻と付き合っていたことがあるらしくて。彼が失礼な言い方をしたものですから、ちよつとカツとしまして」

こちらが下手に出るより、ビシリと聞いてやった方が自分の立場が安定して対応しやすいのだろう。どんな相手とでも必ず上下関係をはっきりさせておき、自分が下の方が楽、という人がいる。丸山はその部類に入るようだ。

「そういうことだったんですか。とんだ災難でしたね。死んでしまった人にそんな言い方をするのは、すまないような気がするけど」

「芳川さんや他の方にも申し訳ないことをしました。せつかくの雰囲気を台無しにしてしまつて」

「あなたが気にすることじゃありませんよ」

生駒の心臓は平静を取り戻しつつあるが、丸山も落ち着いてきたようだ。

「金谷さんは殺されたんでしょうか。それとも自殺なんでしょうか」などと言い出した。

「すぐにはつきりするでしょう」

「殺された可能性もあるわけですよ。そうだとしたら、一体どうなんでしょう？」

言葉遣いも元に戻っている。そろそろ追求再開だ。

「さつき、あなた、疑われているとおっしゃってましたよね。どうしてそう思われるんです？」

今度は丸山も声を荒げることはない。

「実は先日、芳川さんが見えになったとき、海の家のことを話題にされたんです。おかしいでしょう。瀬謡さんもそう。いつのこと

だったのかとか、なんていう屋号の店だったのかと。伊知さんが殺されたというのに、そんな昔の話を、まるで世間話でもするみたい

に」

「単に、パーティの続きみたいな話じゃないですか？」

「でも、そのパーティの参加者が殺されたんですよ。なにか意図があつて、おふたりはあんな話を僕に聞いたんだと思うんです。まったく見当もつきませんが」

生駒は小さく頷く。

丸山が居住まいを正した。

「さつきはすみませんでした。興奮してしまつて」

「いいんですよ」

「なぜ僕が疑われているのか、生駒さんはご存知だと思ったものですから」

「警察にマークされているということはないんですよ。だったら、いいじゃないですか」

「それはないと思いますけど」

丸山の顔にまた不安が浮かんだ。

「僕も、アリバイとか聞かれましたよ。丸山さんも聞かれたでしょ。どうでした？」

この問いには逡巡するかと思いきや、

「ああ、それは完璧なんですよ」と、ほつとした表情を見せた。

「ありがたいことに」

笑みまでこぼれた。

「三日から、妻と二泊三日で信州の別荘に行きまして」

生駒も合わせて、口元をほころばせた。

「二晩とも、夜は麓の料理屋で食事をしました。その店の方が証言してくれまして、事なきを得ています」

優が戻ってきた。当然のように険しい目つき。

それを恐れたように丸山は帰っていった。

金谷の死亡原因は不明だった。

死因が水死なのかどうかについても明らかにっていない。

長い間、大阪湾に浮かぶ大小さまざまなゴミと一緒に波に揉まれていたため、無数の傷に覆われていた。

かろうじて着ているものは身につけていたが、眼鏡はなかったし、靴さえも履いていなかった。

死亡日時は九月八日の午後八時以降と推定されていた。

根拠は、その時点で生駒の携帯にメールを入れていることによる。ただ、金谷の携帯は発見されていない。

入水した場所の特定も困難だった。

八日の午後から発見されるまでの十日間、瀬戸内海の潮流は様々な動きを見せていたためである。

ただし常識的に考えれば、大阪湾ないし播磨灘のどちらかであろう。友ヶ島水道や鳴門海峡以南の太平洋ないし直島諸島以西の瀬戸内海で入水した可能性は、ゼロではないが極めて小さいということだった。

また、死体が発見直前に打ち上げられたのであれば、大阪湾の内奥部から流れ着いた可能性が高いということだった。

35 刑事への質問

刑事の事情聴取にも、もう慣れたものだ。

近況についての質問がいくつか繰り返された後、刑事はこんなことを言い出した。

「殺された金谷さんとのご関係なんですがね。耳に挟んだところによれば、生駒さん、おたく、金谷さんの親父さんがやってられた須磨浦の海の家でアルバイトをされていたことがあるそうですね。大昔のことですが」

ようやく警察もこの事実に行き着いたらしい。誰かが話したに違いない。

「そのときに金谷さんとも会ってられた可能性がありますなあ。先日のパーティ参加者の中の丸山さんも同じ海の家で同時期に働いていたとか。このことについてはどう思われてます？」

「どうって。とんでもない偶然が働いたんだなとしか」

「偶然ねえ」と、刑事は上目遣い。観察されている気分だ。

「僕はそう思っているんですけどね。警察の方では、意図されたものでもあると？」

「ま、ありうるなと」

「たとえば？」

「それをお話することはできません」と、厳かに言い渡す。

「僕は警察に協力を惜しみません。でも、そちらが考えておられることを説明していただかないと、なにを話せばいいのかも分かりませんよ。僕自身がこの偶然に驚いているんですから。なにしろ三十年前のことですよ」

「おっしゃるとおりですがね」

「では、なにを話せと」

「ですから、どう思われるかと」

「それは偶然だと申しました。他には？」

「では、おたくがその偶然とやらに、気づかれたいきさつをお聞かせ願えますか」

生駒はパーティでの丸山との会話、叔父の家で元銀行員に確かめたことを話した。

丸山が嘘をついていることについても話してしまうことにした。刑事の訪問を受けて、丸山が話してしまっているかもしれない。あの嘘に何の意味があるのか分からないが、それは必要とあれば警察の方で調べるだろう。

いずれにしろ、たった今、この刑事は丸山も同じ海の家で働いていたと明確に言ったのだから。

刑事は少し興味を持ったようだ。

なるほどねえ、と言いながらメモをとると、

「ところで、そのことをどなたがご存知だったのか、申し訳ないけど列挙してもらえますか」と、聞いてくる。

三十年前のあの事件について聞いてくるのかと思ったが、今のところは肩透かしだ。

刑事はあの海の家で起きた事件には気づいていないのかもしれない。それは後のお楽しみに取っておくことにして、生駒は質問に答える。

パーティでその話が出たとき、近くにいたのは丸山徹と祥子夫妻、伊知馨、瀬謡佐知子と美咲の親子。そして芳川了輔と立成清次。金谷謙吾も一部は聞いていたはず。

「でも、それ以外にも知っている人は何人かいると思いますよ。現に、塊田瑠奈さんには私たちが話しましたし」

そのテーマについてはこれ以上の進展はないと思ったのか、刑事は質問を変えてきた。

「ところで、丸山さんと芳川さんの間にいざこざがあったことをお

聞きになっていませんか？」

「はあ？」

「あ、ご存じないならその件は結構です」

結構ですといわれて、そうですか、では引き下がれない。

「どういうことなんです？」

刑事がニヤリと笑ったような気がした。これも話す気はないようだ。

「ハハア」と、ここで頷いたのは優だ。

「それって、ブログの件じゃないですか？」

刑事の顔が少し引き締まった。

間髪をいれずに優が畳み掛ける。

「丸山があのもラーサイトを作っていたんじゃないですか？」

刑事は頷こうとはしなかったが、否定もしなかったし、驚きもしなかった。凶星だということなのだろう。

いわれてみれば、ありえないことではない。

自分が数値まであげて話したことの半分も紹介されていないことに腹を立てて、芳川の足を引っ張ってやれと考えたのかもしれない。あの男ならそんな陰湿な腹いせの方法を考えつきそうだ。

くだらないことに振り回されてしまったものだ。

ミラーサイトの謎をいともあっさりで見抜いてしまった優は、調子に乗ってリラックスモードだ。刑事に質問を投げ始めた。

「伊知さん自身の言葉によれば、金谷さんとは幼馴染みたいなものだったらしいんです。どんな幼馴染だったんでしょうか。小学校が一緒とか？」

差支えがないと思ったのか、刑事は意外にもこれにはあっさり説明してくれた。

「おっしゃるとおりですな。小学校、中学校が一緒。家が近いので

それ以降も顔を合わせることはあったでしょう」

「へえ。じゃ、大学は？」

「伊知さんは関海学院大学へ進学し、金谷さんは演劇関係の専門学校ですな」

「金谷さんの友人関係とかも、お調べになったんですね」

「ええ、まあ」

途端に刑事の口が重くなる。

「クラブとか趣味とかの関係は？」

金谷にはたくさんの交友関係があったらしい。しかし刑事はその具体的な例は挙げずに、質問者は自分だといわんばかりに逆襲してきた。

「そこで、生駒さん、当時の海の家でのことを思い出して、金谷さんの交友関係についてご存知のことを教えてください」

そうは言われても思い出せそうなことは皆無だ。

「そんな昔のこと、無理ですよ」

刑事がにやりと笑った。

「それはそうですな。失礼しました」

生駒も笑った。

どうやら、刑事は三十年前の事件のことも念頭において捜査しているらしい。それが分かっただけで十分だ。あの事件はもう時効が成立している。警察もいまさら蒸し返しはしないだろうが、それに気がついてくれただけで満足だ。

そこでまた優の質問。

「教えていただきたいことがあるんですが、よろしいでしょうか」
刑事はしぶしぶでも、どうぞ、という。

「伊知さんが札幌から乗った飛行機の便は、お調べなんですよ」

「もちろんです」

「いつですか？」

「それは重要機密ですな」

「三日の夜ですか？」

刑事はニヤリとしたものの、応える気はないようだ。

「では、金谷さんが入水したのは何日ごろだとお考えなのでしょう。本当に、生駒の携帯に連絡が入った、八日の夜以降なんでしょうか。死体は白骨化し始めていたと記事にありましたが、たった十日ほどでそうなるものなんでしょうか」

「いいところを突かれますな。大阪湾の水温が高いとはいえ、とだけお答えしておきましょう」

生駒も優に勇気づけられて聞いてみた。

「彼はいつも懐中時計を使っていました。それは動いていましたか？」

刑事はすつと眼を細めた。ここでこのふたりを味方にしておくほうが得策かどうか、と考えているのかもしれない。

答えは、「上着から見つけられました。それは九月二日の朝で止まっていました」ということだった。

優が微笑んだ。

しかし、いくらなんでも次の質問は調子に乗りすぎだった。

「それから、もうひとつ。伊知さんの携帯電話の指紋のことですが」

「それはお答えできませんな」

刑事が憮然とした。

「厚かましくいろいろお聞きしてすみません。さらにもうひとつ。

ある人の過去について調べていただきたいことがあるんです」

さすがに刑事は本気で眼を剥いた。

しかし優は、臆することなくその名をあげた。

刑事が帰っていきなり、須磨の叔父から電話が架かってきた。

丸山が海の家を辞めた理由を晁敵が思い出したのだという。

店の売上金をくすねていたことが大将に見つかり、放り出された

のだということだった。

「と、いうことなんだと」

生駒はその情報を優に伝えたが、反応は冷たいものだ。

「ふん。所詮、小物。臆病な奴ほどよくしゃべる」

一蹴して終わり。

「そうそう。小さいやつに限って偉そうに振舞うし……」

「そんな解説、聞きたくもない」

優が机に突っ伏して考え始めた。

「前に言ったやんかあ。音というのは、色や臭いと違って」

髪の毛の中から声が聞こえてくる。

「なんだ、また、その話かよ」

「ルナの特知音階嫌悪症はg i sタイプ」

「それがどうした」

「g i sっていうのはドイツ音名なんやて。ドレミでいうとソのラの半音下の音。瑠奈が気にならなくなったのは微妙に音程が上がったから。ラの音に近づいたということやね」

「なんのこっちゃ」

「ね、ね、三十年前の夏、流行っていた音楽ってどんなん？」

「また、もう、わけのわからんことを」

「海の家で有線とか、かかってたやつ」

「覚えているか、そんなこと」

「ハッスルは？ てか、どんな曲？」

「ドウ・ザ・ハッスル！」

生駒は節をつけて叫んでやった。

「あ、覚えてるやん。流行ってたんやね」

「ん？ 待てよ。あ、そうか。あれが流行ったのはあの年だ。僕が高校二年生のときだぞ……。でも、それがどうした」

「立成さんのインタビュー記事に出てたやん。渚に残した足跡とか」
「ん、そういや」

「例の事件のあった日、海の家でも流れていたかも」

「だから、なんなんだ！」

「よかった。瀬謡さんに間違ったこといわなくて」

「あー、もう！ なにか教えたのか？」

「だからあ。立成さんに会うつて言うから、ちょっとだけ電話でア
ドバイスしてあげた」

「おい、瀬謡さんはまだ」

「そう。犯人候補のひとりってことに変わりないよ。少なくとも彼
女の話聞いた限りでは、はずす根拠はない。今はまだね」

36 私、実は。娘の独白

瀬謡のおでん屋は重苦しい空気に包まれていた。松任自身の口から、ひとつの真実を聞く日だ。

金谷が死んだ今となつては、松任が先日言い残したであろうことを聞いておかねば気が休まらない。

そう考えて、瀬謡は生駒や三条と相談して松任を呼んだのだった。

「実は私、私生児でして」

おでんの湯気までも一瞬凍りついたようになった。

松任は口に出してしまったことで、胸のつかえが取れたのか、すらすらと話し始めた。

松任歩美は比較的裕福な家庭で幸せに過ごしてきたのだが、高校二年生のときの交通事故で少しずつ歯車が狂い始めてきたという。

「音楽大学への進学はもちろん、ピアノストの夢を断念することになった忌まわしい事故でした。入院生活も……」

生駒と三条が居住まいを正した。

「実は、入院中にお見舞いを頂きました。サング礁の写真集でした。私はそれがとても気に入り、暇さえあれば眺めていました。でも、それが誰からのものなのか知りませんでした。しかし、やがてある日、親戚の人が、とうとう教えてくれました。私の実の父親からの贈り物だと。そして、譬も本当の母親ではないのだと」

瀬謡はテレビを消した。

「それ以降、私の目に入る世界はすっかり様変わりしてしまいました。退院後、すぐに家を飛び出しました」

松任は言葉を切り、今から言うことを整理するかのようになり、ピアノから立ちのぼる泡を見つめた。

「ピアノは断念せざるを得なくなりました。それだけでも落ち込んでいるときに、今日まで両親だと思っていた人が実は違う、ということを知かされてしまったのです。自分は馨の姉、美弥子の子かったです。美弥子はいわゆる未婚の母だったそうです。しかし、私がひとつになるころに、不幸な事件で命を落としてしまったのです。そして残された子供を引き取り、自分の子として育てたのが、妹の馨夫妻だったのです」

実は、瀬謡にとって松任のこの話は予想外ではない。

それは、三条がひとつの仮説として披露してくれていたものだったからだ。

三条はそれをこう説明してくれていた。

そもそも、松任さんと伊知さんには、母と娘の間にあるはずの愛情とか親しみや信頼、といったものが感じられなかったよね。けんかしていて知らん顔しているというより、もっと冷めた他人同士のような関係……。

しかもね、先日ここで松任さんは伊知さんのことを「本当の」母親と呼んだでしょ。それってどうもおかしいなと。

あえて「本当の」と表現したことで、もしかすると本当の母親じゃないのかもしれないって感じられるのよね。

ところで、松任さんはいくつでしょう。実はルナに聞いてあるのよ。

三十一です。昭和四十九年九月生まれ。例の事件の一年前に生まれたのね。

ねえ、瀬謡さん。その頃は伊知さんと親しくされてましたよね。

瀬謡さんが大学三回生、伊知さんが四回生の夏、念願の北海道ツーリングをしたとおっしゃいましたね。その年なんです。

ほら、おかしいでしょ。

伊知さんのおながが大きくなってました？

そう。松任さんは伊知さんの子供じゃないのよ。
ここまでの話のどこかに嘘が混じっていない限り。

瀬謡の話に嘘はない。

瑠奈にしても恋敵の年齢をきちんと芳川に確かめていただろうから間違いはないだろう。

三条の推理はまだ続きがあった。

じゃ、誰の子か？

亡くなったお姉さんの子を引き取ったと考えられるのよね。普通に考えて、その可能性が高い。

殺されたお姉さんとは井端美弥子さん。 姓は井畑のまま。
当時のことなんだから、結婚すれば姓は変わるのが一般的よね。
美弥子さんは未婚の母だったのよ。

結婚していないんだから、父親は生まれた子を引き取らなかったということなのね。

そしてその父親とは、美弥子さんと海水浴に来た男性……。

ノブの記憶によれば、明らかに恋人同士だったんだから。

美弥子さんが稀に見る奔放な女性だったら分らないけどね。

その男性はもともとは妹、つまり伊知馨さんの恋人ってことになってはいたけど。

三条の推理には説得力があるようなないような。

ただここまで説明されて、瀬謡にもいろいろなことが見えてきたような気がしていた。

しかし仮説を聞くのと、本人の口から真実を聞くのでは、断然重みが違う。

瀬謡は固唾を吞んで松任の次の言葉を待った。

松任の話は続く。

父と、母の聲は大変な決断をしたと言います。彼らの結婚直前のことでした。

父と母は、自分たちの子供を産まないと決めたということです。私をたったひとりの実の子として育てるためにです。

母は自分の姉の子ですからまだしも、父にとつてはいわば全く血の繋がりのない子です。自分の子を作らないというのは、辛かったことだろうと思います。それでもずっと、他人の子である私を可愛がってくれました。それは今でも変わりません。私にとって、甘えることのできる本当の父親なのです。

でも、母の方は……。

正直に言いますと、あの交通事故にあう以前から、私は母を疎ましく思うようになっていました。厳しいことを言うくせに自分には甘いというか、ずるい女性だと思い始めていたのです。

いわば何回目かの反抗期です。コンクールでの優勝という栄冠で、恥ずかしながら自信過剰にもなっていました。

そして実の子でないということを知ってから、徐々に母の顔を見るのもいやになってしまいました。母の私に対する厳しさはそのせいだと思ってしまうたのです。

その反動もあって、私は実の両親のことを知りたいと思いました。実の母はそれまでも何度か耳にしたことのある伯母で、顔を覚えていなくても、写真などを見てそれなりに親しみを抱いている人でした。私はなんとなくうれしく思いました。

でも、実の父親の名前は誰も教えてくれません。

戸籍には養子と書かれているだけです、出生届の父親の欄は空白でした。

その父親も、唐突に写真集を贈ってはきたものの、それ以降はまったく接触はなし。

私はいつまでも、くよくよとそのことを考えていました。

育ててくれた父への愛情は変わりませんでした。名前も知らない実父への関心も少なからずあったのです。

悶々とした気持ちを抱えて、私はとうとう家を飛び出してしまいました。そして一年ほどの間、知人や友人の家を転々としてしました。

やがては家に戻り、結局は進学することになりました。

ところが、私が家を空けている間に、父と母の関係がまったく冷え切ってしまったのです。

私は自分を責めました。私のことで両親の愛情に亀裂が入ってしまったのだと。

生まれてきたことによって両親を、特に父を苦しめ、家を飛び出したことによってふたりを引き裂いてしまったのです。

とはいっても、母への反抗心はなかなか収まりませんでした。大学には通うものの、私は殻に閉じこもっていたのです。バカな人間だったと思います。

それでも社会に出てからは、私も少しずつ変わり始めました。

母へのわだかまりが薄れていきました。家出をしたときのような憎しみもなくなっていきました。

でも、もはや以前のように自然に母や父と接することはできませんでした。

そしてやがて、母は家を出て行き、仕事場で暮らすようになってしまった。父や私と顔を合わせることに、いたたまれなくなったのでしよう。私もそれを機に家を出て、ひとり暮らしを始めました。

こうして私たちの家族は、完全にバラバラになってしまったのです。

私が両親との関係を修復する前に、たった三人の家族は、もう家族とは言えない状態になってしまったのです。そして両親は半年前に正式に離婚しました。

ひとつの家庭の、なんの変哲もない幸福とは、なんともろいものなのでしょう。

わずか数年ほどの間に、ガラガラと音をたてるように崩れ去ってしまった幸せ。

忌まわしい交通事故がひとつのきっかけではあります。

事故で私が入院している間に届いた匿名のお見舞いの品……。

あれがなければ、私が両親の子ではないということを耳にすることもなかったでしょう。

あのふたつの出来事さえなければ、幸せなひとりっ子として愛され続け、音楽大学に進み、もしかするとクラブ活動でもして、楽しい学生時代を過ごしたことでしょう……。

ピアノストになるという夢を成就していたかもしれません。

もちろん両親も、私のことで頭を悩ませたり、攻撃的に相手を責めたりすることなく、互いの愛情を今もなお育み続けていたことでしょう……。

今、私は芳川さんのところで雇っていただくことができました。

芳川さんはとてもよくしてくださいます。私は幸せです。

ただ、そんな小さな幸福を感じて、ようやく遅ればせながら、両親がいかに辛い気持ちでいたかということが身に沁みてきたのです。そして、すべての責任は、私の弱さ、身勝手さにあったのだということに気がつきました。

両親に申し訳ない気持ちで一杯です。

今にして思えば、子供の頃も、あの反抗的だった頃も、そして現在も、父や母が私を愛してくれていたように、私も両親を本当に愛していたのだということに気づきました。

先程も申し上げたように、実の父に対して、どんな感情もないか
といえば嘘になります。正直に言えば、知りたいと思います。

でも、今、知りたいというのは、当時の漠然とした興味からでは
なく、きつと怒りの気持ちからなのでしょう。

捨てられた娘としての怒り。

私の家族をむちゃくちやにした原因を作ったことに対する怒り。

伯母の美弥子に私を産ませておきながら、亡くなるやいなや姿を
隠してしまった男……。

私にとって、無責任で憎むべき男なのです。

先日のパーティ、実は私、始まる前からとても緊張していました。
久しぶりに母と会うから。

お客様のひとりとして親しく接しなくてはいけないということが
プレッシャーだったのです。

それに、母を、娘として皆さんにご紹介してもいいものかどうか
……。

母からは、そのことについて連絡はありませんでした。私の方か
らもしませんでした。そんなことさえ、どうしていいか分からない
くらいに、母と私の関係は疎遠なままだったということなのです。

でも私、あのパーティの日、自分の方から今日こそは謝ろうと思
っていました。

しかしそれは…… かないませんでした。

松任はようやく口を閉じ、眼を閉じた。

掛ける言葉もないまま、瀬謡は松任のまぶたが震えているのを見
つめていた。

そんな辛い出来事が、あの家で起きていたとは……。

馨と親友だと言いながら、なにも知らなかった。彼女の行動的な

性格がその不幸を外部からは見えなくしていたとしても、自分も
う少し気の利く女だったら、それに気づいて少しでも譬を癒してあ
げることができたかもしれないのに。

瀬謡は自分の鈍感さと思いやりのなさに、やりきれない思いがし
た。

「母が殺されたときになっても、私は皆さんに、伊知が私の母だとい
うことをお伝えしませんでした。実家の方から瀬謡さんに案内が
いき、生駒さんにも出席していただくことが出来たのですが、私自
身は情けないことに……。でも、先日、事務所で生駒さんがそのこ
とを話されて、ようやく芳川さんにも伊知が母親であることを話せ
ました……」

松任が眼をあげた。

「すみません。先日はどうしてもこの話をする事ができませんで
した。私、犯人を捕まえるのに大切な話ではないと思い込もうとし
ていました。身勝手な私を許してください」

謝ってもらう筋合いではないし、むしろ慰めの言葉を掛けてあげ
る立場なのだが、瀬謡はなにもいえなかった。

27 ぜひお力を

三条が鋭い声を出した。

「ということだったんですね」

生駒と三条とはすでに様々なことを話していた。言い忘れていることはないくらいに。

このふたりにしても、あの推理に自信を深めていることだろう。

ここからは三条に任せるしかない。

それに瀬謡は、自分がこの会合をリードしていく自信もなかった。

三条がパーティの日の譬の不可解な言葉の意味を松任に問うた。

松任は少し間を取ったが、この質問が出ることを予期していたのだろう。淡々とした口調で再び話し始めた。

「海の家で母の姉、つまり私の実の母、美弥子を守れなかったことを許せないと言ったのだらうと思いました。そしてその男とは、立成さんのことだと思いました。二階で盗み聞きをしたとき、立成さんが深々と頭を下げたからです」

話は核心に近づいていた。

「でも、後になってよくよく考えると、とんでもないことに気がついたのです。母は、私たちの家族を、と言いました。そうです。バラバラになったのは私たちの家族です。美弥子が殺されたことで当時の井畑家がむちゃくちゃになった、ということは聞いたことがあります」

瀬謡は固唾を吞んで松任の言葉を待った。

「とうとう私は気がつきました。立成さんがあの交通事故の加害者なんだと」

「なんだって！」

瀬謡は思わず叫んでいた。

全く予想もしていなかったことだった。
生駒や、そしてさすがの三条も口をあぐり開けている。

「最も憎むべきはあの事故の加害者なんです。私はその人物が男性だったことを覚えているだけです。母はその名を記憶していたのです。それをあのパーティの日、思い出したのでしょうか」

「それが立成さんだと？」

「確かめるすべはありません。母にはもう聞けません。父や祖父は私と同様、すでにその男の名を忘れてしまっていました。母だけが覚えてくれていたんです。私は……、本人を問い詰めようかとも思いました。しかし、それが分かったからといって、どうなるものでもありません……」

とんでもない話が展開されていた。

三条の推理にも、このくだりは全く含まれていなかった。

その仮説は、立成が松任の実の父親であるというものだったのだ。仮説の根拠は……、ない。演繹的な理屈はある。立成が松任の父親だとして、なぜ、そんな事態になってからも立成が馨の友人とされていたのかという点だ。

三条はこう解説してくれていた。

美弥子は妹の馨の恋人を奪い、子をもうけた。しかし立成は認知しようとしなない。怒りが極限にまで達していた美弥子の両親は、生まれてきた女の子の父親がこんな血も涙もない男だということさえ許せなくなっていた。

だから、美弥子が殺されたとき、立成が美弥子の恋人なんかではないと断言したのだ。

結果的に、馨の「かつての友人」というかすかな記憶だけが、周囲の人々の中に生き延びることになった。

松任は言葉を詰まらせている。嗚咽が漏れ出した。

瀬謡の頭に松任の言葉が沁みこんでいった。
腑に落ちた。

立成の馨へのあのプレゼント。贖罪のつもりだったのか。だから、
公言するなと……。

三条がなにごとかを呟いた。

眉間に皺を寄せ、睫毛を撫でている。

この先の展開は……。

立成が父親だという仮説など、もはや松任に聞かせられるような
ことではない。

松任の瞳に宿った怒り。

「私には見えてきそうで見えてきません。正直に申し上げると、もしあの人が交通事故の加害者だとしたらという気持ちで、母の事件の解決とはまったく違う方向へと思考を導いてしまっているのかもしれない。もう、うまく考えることができないのです。ですから、今お話したことをお含みいただいて、皆さんにお考えいただきたいのです。どうかよろしく願います」

松任の眼から涙が溢れ出していた。

頭を下げた拍子に、カウンターの上にポタポタと落ちた。

瀬謡は黙って頷いた。

「ありがとうございます」

松任はカウンターを拭い、安堵のため息をついた。

ところが、三条は松任にぴたりと険しい目を当てている。

そして、はつきりとした声でいった。

「いいんですか？ 立成さんが交通事故の加害者だっという前提で、こんなことに念を押すのも変ですけど」

なかなか言える台詞ではない。

三条はあの仮説にまだ自信を持っているのだろう。

「ちょっと待って。三条さん、あの話はなかったことに、ね」と、瀬謡は思わず止めにかかった。

しかし三条はニコリと笑いかけると、今度はふんわりと言った。「私はさあ、松任さんの実のお父さんが誰かってことに関心があったんですけどね」

ああ、言ってしまう気だ。

「えっ」

松任の顔がさつと厳しいものになった。

「そんなことを……。いったい……」

「今、議論したいのは、かわいそうに殺された伊知さんのこと。あなたの不幸な交通事故のことじゃないわ」

三条が諭すように、そして半ば怒ったように言う。

「あなたの人生にとっては、その事故が最も重要で、すべてのことをそこに結び付けたい気持ちは分るけどね」

松任は黙っていた。

「さつき、ご自身でもおっしゃったように、あなた、見えなくなっているのよ」

三条は容赦ない。

瀬謡は自分まで責められているような気がしてきた。

しかし、聡い松任は三条が言わんとすることに気づいたようだ。あるいは、自分でもその可能性に、本当は気づいていたのかもしれない。

「つまり、それは……」

松任の顔がみるみるうちにこわばっていく。

瀬謡は迷っている自分を感じた。

三条の推理と、松任の発想。

三条の推理が当たっているのだらうとは思うが、それではその先

にある答えは、松任にとって……。

「立成さんも、あの日、美弥子さんと海水浴に行ったのは自分だと認めましたよ」

と、生駒が落ち着いた声を出した。

「その……、やはりあの人が……私の本当のお父さんだと……」

三条はゆっくり息を吐き出すと、

「松任さん、いずれにしろあなたの交通事故のことは、伊知さんや金谷さんの事件とは無関係です」

と、確信に満ちた声で宣言したのだった。

「……」

松任の指先が震えていた。

しかし、気丈にもすつと顔を上げた。

「あの人とは先日も事務所でお会いしましたが、実の父親としての実感は全く沸きませんでした。これは本当です。父はやはり育てていただいた父ですし、母はやはり母です。今となつては両親に申し訳ない気持ちで一杯です。実の父親には……、ぜひ、罪を……、償わせたい。でも、根掘り葉掘り警察に母の過去や伯母の過去を暴かれることは好みません。決して私の保身からそう言っているわけではありません。私たちの家族がこれ以上バラバラになることに耐えられないのです」

三条がすつと目を細めた。

つまり松任は、やはりこれ以上、この事件に関心を持たないで欲しいと言っただろうか。それでは譬が……。

「松任さん」

瀬謡が思わず口にした呼びかけに、松任の言葉が重なってくる。

「聞いてください。でも、犯人に間違いないということになれば、話は別です。それが私の実の父親だとしても。捕まえることが優先

されるべきですし、父も母も、そして金谷さんも、それを望むと思います。長々とお話ししましたが、皆さんにしかこんなことをお願いできる人は私にはありません。ご迷惑なことだとは思いますが、母のご友人として、ぜひお力をお貸しください」

瀬謡は深く頷いた。

生駒は神妙な顔で松任を見つめ続け、三条はグラスに手を伸ばしてニコリとした。

38 おでん屋の静寂

「ふう！　なんと来ても緊張するなあ。警察署の面談室っていうのは。ノブ、まだ時間ある？　お昼でも食べよか」

「おまえも緊張することがあるのか。飯は、そうやな、パパラッチ以外で」

「ええよ、どこでも。でも、すっかり食べなあかね。今日の晩御飯、喉を通らへんかもしれへんから」

大阪駅の近くにある曽根崎警察署の前だ。伊知の事件と金谷の事件の合同捜査本部が置かれてある。

先日頼んでおいた調査結果を聞きに来たのだ。結果は想像していたとおりだった。

そしてもうひとつの依頼をしていた。ある品物の鑑定を頼んでいたのだ。

「ん？　今日の晩？」

「瀬謡さんのところへ行くんやんか。言ってなかった？」

「聞いてない。このところ二日に一回のペースだぞ。おでん屋も警察も。精が出るな」

「他人事みたいな言い方するやんか。いよいよ大詰めやのに」

そう。基本的な推理の骨格は完成しつつあった。もう幹は見えている。

「大詰めか。おぼろげに見えてはきたけど」

「そう。後は、若干の物証が欲しいだけ」

「でも、今夜はだめだ。大切な打ち合わせがある」

「ええのん？　私に任せておいて」

「任せられるかい」

「今夜、あの薄汚い頭を叩き割ってやる」

「おいおい、早まるなよ。まだ……」

「ノン。今夜よ。巧遅は拙速に如かず。新しい被害者が出る前に」

「仕事が……」

「行かれへんの？ ええやん、打ち合わせなんかほったらかして」

「くそ！ くそ！」

「どうするん？」

阿倍野区の工事現場で打ち合わせをしている最中に、優から連絡が入った。今すぐ来いという。

「例の鑑定は？ 彼女は無事？」

「両方とも丸。詳しいことは今は話せない」

施工図の打ち合わせの続きは明朝ということにして、生駒は「すみよし」に駆けつけた。

「本日貸し切り」と書いた紙切れが引き戸に貼り付けてあった。

「よう！」

と、ことさら陽気に入っていくと、当然のことながらいつもと様子が違う。

優と並んで立成が座っている。

丸山と松任はカウンターの反対側に離れて座り、瑠奈は一番奥の席にひとりで座っていた。

なるほど、携帯で詳しいことは話せなかったはずだ。

「みんなに来てもらった」

と、優が笑ったが、さすがに参加者の表情は硬い。

「もうすぐ税理士センセも来るよ」

なんだか楽しそうな言い方ではないか。パーティの二次会でもあるまいし。

「それまでしばし、ご歓談を」

と、冗談めかして言うが、どんな歓談をすればいいというのだ。

そう言った優自身が眼を閉じてうつむいた。

瀬謡もいつものようにおしゃべりをする気はないようで、丸椅子に座って眼だけでテレビを見ている。

「とりあえずビール」

立成が生駒に代わって注文してくれる。

「飲むだろ？」

「とうぜん。立成さんはもう飲んでるじゃないですか」

しかし、立成の焼酎のグラスもまったく減ってはいなかった。

気まずい沈黙はあまり長くは続かなかった。

引き戸をがらりと開けて最後のゲスト、芳川が入ってきたからだ。皆さんおそろいですな、と笑顔を見せたものの、声に喜びはない。

もちろん、今からここで始まることの内容を理解しているのだ。ちよつと悩んで、入口に近い席にひとりで座った。

「お待たせしました。始めましょうか」

優が顔を上げて宣言する。

「なにが始まるんです？」

丸山はおどけているのか、本気で不安なのか、泣き出しそうな顔をしている。

「犯人探しですよ」

優のシラツとした声。

「じゃ、ノブ。始めて」

なに！ 僕がやるのか？

それにノブ？

優と眼が合った。

もう微笑みのかけらもない。

やがてその瞳が催促するよつに揺らめいた。

やれやれ。やれるところまでやってみるか。

優と、それなりの推理は展開してある。最後の仕上げの結果は正確に聞いてはいないが、勝算はあるのだろう。

「伊知さんが殺された事件を僕たちが知ったのは、ここで飲んでいた九月八日のことでした」

生駒は話し始めた。

伊知馨の死亡推定時刻は三日の夜から四日の深夜にかけて。雨が降り続いていたおかげで、絞りきれなかった。

しかし、傍らに落ちていたバッグの中から、伊丹空港の近くの駐車場の領収書が発見され、その結果、四日の夜十時過ぎから四日の深夜にかけて、と犯行時刻は絞られる。死体に新しいピクニックス・ートが掛けられていたことから、断定はできないまでも、計画的な犯行だと思われた。

犯人は比較的見つかりにくい植栽帯の中に伊知の死体を隠したが、より見つかりにくい、つまり発見を遅らせられるところはほかにもあった。機械駐車場の地下ピットである。

機械に向かつて一番右端。伊知の車が停めてあるパレットの下。

伊知のアルファロメオは左ハンドルだが、他の車はすべて国産車。また、この機械式駐車場はバックして駐車させる。

すなわち、地下ピットの一番奥の隅なら目に付きにくいわけである。車に乗り込むときや降りるときにピットの中は目に入るだろうが、国産車なら右側から出入りするため、車の左側の下には視線が届かないというわけだ。

なぜ犯人は、死体を隠すに好都合なそんな地下ピットが目の前にありながら、植栽帯の中に隠したのだろうか。

その理由は簡単だ。

後で比較的早い時期に、死体をより見つかりにくいところへ運ぶつもりだったからではないだろうか。

ひとつ疑問点があった。

伊知は二日と三日は札幌出張。三日の夜には大阪に帰ってきて、四日の昼には瀬謡の娘の結婚披露宴に出席する予定が入っていた。ところが伊知は飛行機に乗り遅れたからと、会社にメールを入れた。永年の友人である瀬謡にはなんの連絡も入れずに。

そして犯行は四日の夜。

そこにどこか釈然としない気持ちが残った。その点については、とりあえずひとつめの課題として置いておく。

乱暴な言い方をすると、あの時点で、犯人候補はそれほどいなかった。

端的にいうと金谷だけ。

伊知と金谷は、いつてみれば交際関係にあった。しかもふたりは、小学生のころからの幼馴染。互いのことはよく知っていたに違いない。

ところが、パーティの日のふたりの様子は他人行儀なものだった。丸山とのいさかきを伊知が仲裁したことで、ふたりが親密な関係にあるかもしれないということを誰もが知ることにはなったが、それまでは互いに知らん顔。

後に、ふたりが別れていた話が瀬謡からもたらされたが、そのことでますます金谷が怪しいと思われた。

しかしその仮設には疑問な点もあった。

金谷は丸山祥子を愛していて、どうせ殺すなら丸山を、ということだ。

つまり、伊知の事件は単純な交際関係の清算などではないのでは、という疑問だ。

ただ、いずれにしろ伊知と金谷との関係にスポットは当たった。もうひとつ、気になっていたことがある。塊田瑠奈に聞いたところ、金谷はインタビューのとき、海の家のことを話していたという。

「そこで私は、三十年前に海の家のアルバイトを紹介してくれた銀行マンに会いに行きました。確かめたかったのは、その店の屋号がなんだったのかという点と、丸山さんが同じ海の家で働いていたのかどうかという点です。そして金谷さんがカナヤという屋号の海の家の子であるということ、そして同じ夏に私と丸山さんがその店でアルバイトとして働いていたということが分かりました」

生駒は丸山を横目で見たが、うつむいたままだ。

ここで反論されると、事件とは関係のなくだらしない解説が必要になるが、その心配はないようだ。

「話をややこしくするつもりはないのですが、わたしたちが考えた様々な仮説を織り交ぜながらお話しますので、あまり神経質にならず、我慢して聞いてください。ここからは反論もあるでしょうが、黙って最後まで聞いてください」

生駒はビールを口にし、一息入れて、再び話し出した。

しかも、思いもかけないことも判明した。

実は、生駒と丸山が働いていた三十年前の夏に、ひとりの女性とその海の家で殺されるという事件があった。若い女性が首を絞めて殺されたのだが、死んだ女性は伊知馨の姉だということが分かったのである。

ということで、伊知の姉、美弥子が殺された三十年前の事件と、今回の事件には関連性があるかもしれないという思いが強くなった。生駒と丸山、金谷には、偶然というにはあまりにもできすぎた伊知との関係があったということである。

ところが金谷も死んでしまう。

他殺か自殺か、はたまた事故死か、ということだが、ここで事故死とは考えにくい。

いくらなんでも偶然に過ぎるからだ。最も飛びつきやすい結論は自殺。伊知を殺した拳句に自分の命も、というわけである。現に金谷は、四日の夜に会いたいというメールを伊知の携帯に送っていた。『ちよつと話はそれますが、そもそも、三十年もの時を隔てたこのたくさんの人の輪を、全くの偶然と片付けてしまってもいいものだろうか。誰かに仕組まれた、と考えるべきではないか。そういう思いがありました。まず、こう考えました。あくまで仮説としてです』

インタビューの二番手は伊知馨。

数人おいて丸山、そしてまた数人おいて金谷と続く。

ここまでは明らかに偶然だったのでしょう。

ただ金谷が生駒を芳川に紹介しようとしたとき、ある人から立成さんを推薦されたのだが、と言ったのです。

そのとき、それは金谷の作り話だろう、次は立成を、という生駒への示唆のつもりだったのだろう、立成との関係をなんとかして修復したかったのだろう、そう考えたのです。

そう、事件が起きるまでは。

しかし今は、金谷に立成を推薦した人物は実際にいて、なんらかの意図を持っていたと考えています。

たとえば、そのものずばり、迷宮入りとなった「三十年前の事件のある関係者を集める」という意図を持った人物がいたと。

推理の後半に明らかになったある事実によって、ますますその人物とその意図が見えてきたように思うのです。ただ、この問題も少し先延ばしにしておきます。二つ目の課題というわけです。

とはいえ、こういうことは、推理を展開する上でのちっぽけな要

素にしかすぎなません。

当然のことながら、もっとも大きな疑問は、なぜふたりは殺されたのかという点です。

逆に言うと、誰がどんな理由でふたりを殺したのか、ということです。

仮設が必要でした。

まずその前提として、金谷が不倫関係の清算のために伊知を殺し、自ら命を絶ったという説は破棄します。いろいろな部分で辻褄が合わず、説得力がないからです。

「その最大の理由はもう少し後で言います」

聴衆に反応はなし。

生駒は小さなため息をついて、話を前に進めた。

「つまりふたりとも殺された、しかも同一犯によって。そう考える方が無理がない。もちろんその根元には、三十年前の事件、あるいは海の家での出来事、もっと広く言えば過去、に関係するなにかがあるということです」

生駒の声が、狭いおでん屋の店内に流れては、参加者の耳に吸い込まれて消えていった。

テレビの音は小さいが聞こえている。店の前を車が通っていく音も聞こえる。

しかし静寂。

まるで松任の話に出てきたミラノのドオオモの静寂のように、生駒の落ち着いた声がおでん屋の静けさを際立たせていた。

39 稚拙な工作

「現在進行形の事象についても一応は整理しておきます。過去ではなく現在起きている何かが原因で、ふたりが殺されたのだとしたら、誰がいったいどんな理由を持っているのだろう、あるいは得をするというのだろう、ということですよ」

立成はどうか。

金谷を恨んでいた。金谷のちゃらんぽらんな情報のせいで多額な金銭的損失を被ったから。しかし今になって殺すほどのことではない。

しかも、ほぼ同時期に伊知と連続して殺す理由などない、と言いきってしまっている。

それを逆手にとって、などとアクロバットのような思考は当てはまらない。そんな危険な賭けに出る必要はないからである。

丸山はどうか。

丸山は祥子を金谷から奪うことに成功したが、不安を募らせていたことだろう。

酔った勢いとはいえ、衆目のあるところで金谷に詰め寄られたのだから。金谷が今後どんな行動に出るか分かったものではない、と恐怖を感じたかもしれない。

しかし、伊知を殺す理由はない。

松任はどうか。

母親とその交際相手を殺したのか。この推論にも説得力があるとは思えない。

養父への愛情があるとしても、ふたりを殺してしまうほどの怨みにまで、突如気持ちが高じていったとは思えないからだ。

そしてもちろん彼女が犯人ではありえない。松任は車と名の付くものが大嫌いで、そもそも運転免許を持っていない。その点がなぜ松任犯人説を排除するのかは後で説明する。

最後に、芳川や瀬謡にいたっては、思いつきさえも浮かばない。

もちろん彼らとなんの利害関係もない瑠奈は、事件とは無関係だ。

「以上は推論です」

生駒は金谷も殺されたのだと断定した。

誰も反論するものはいない。

「いいですね。犯行の動機を現在進行形の事象に探してみても、これといったものがありませんね。やはり、三十年をさかのぼる過去の出来事にその根元はある、という考えに立つ方が説得力があるわけです。なにしろ三十年前の出来事も、殺人事件。しかも、殺されたのは伊知さんのお姉さんだからです」

瀬謡がテレビの音量を一旦さらに小さくしたが、結局は消してしまった。

店内はますます静まり返った。

おでん鍋からたち昇る湯気が、音もなくレンジフードに吸い込まれていく。

「次に、伊知さんの事件における、関係者のアリバイについて整理してみましよう。犯行が警察の推察どおり、四日の夜十時過ぎ以降から深夜にかけてとした場合の、皆さんのアリバイを検証していくところになります」

立成。五日の午前一時にかけて北新地を練り歩き、タクシーで自宅に直行、就寝。ラウンジのママとタクシー運転手の証言がある。

芳川。四日から札幌にいて七日に東京に移動。新幹線で帰阪し、

立成と落ち合つて生駒の事務所で打ち合わせ。

瀬謡。四六時中旦那と一緒に、四日もいつものように午後十一時頃に閉店、テレビを見て就寝。

丸山。妻と共に、三日から二泊三日で信州の別荘へ旅行。麓のレストランに証人がいる。

松任。大阪市内徘徊で、アリバイはなし。

立成さんが一旦帰宅してから、四日の深夜、正確に言うと五日の午前二時頃に車を飛ばして天神橋まで来ることは容易ですが、そんな夜中に伊知さんがマンションから出てくるとは思えません。

しかも、マンションの防犯カメラには、二日の朝以降、伊知さんが帰ってきた映像も、出て行った映像も残されていません。

ということは、ふたりはどこかで会う約束をしていたということになります。深夜のことで、あまり現実的ではない。

で、まずは白に近いグレーゾーンに立成さんを置いておきます。

芳川さんと丸山さんについては、札幌、信州と、遠方でもあり、一応は圏外です。

瀬謡さんは最も家が近い。夫と共謀するという可能性はゼロではないので、候補からはずせません。

松任さんはもっとも具合が悪く、全くアリバイがない。ということになります。

今話したのは、犯行が四日の夜十時過ぎ以降から深夜にかけて、の場合です。

しかし、もし犯行が三日の夜だとしたら、様相はがらりと異なってきます。

立成さんと芳川さんと松任さんは、夜の八時まで梅田で食事。その後、芳川さんは事務所で残業してから帰宅。立成さんと松任さん

はそのまま帰宅。どなたか正確な帰宅時間を証明することはできませんか……。

はい、返事がありませんね。そのまま続けますよ。

瀬謡さんは四日と同じ状況ですから、一応の候補のまま。

ということと結局、丸山さんを除いて全員のアリバイはないという事になります。

生駒はここでゆっくりと間を取った。

今更犯人が名乗り出るとは思えなかったが、情けを掛けたというところだ。

丸山は両日共に圏外だといわれて、安心しきって座っている。結局、この男が海の家で働いていたことをなぜ隠していたのか、分かんずじまいだ。

しかし、もうどうでもいいことだ。

海の家の売上金をくすねていたことを生駒に知られなくなかった、知られてしまえばあのアルバイト学生たちの耳に入るかもしれないとちっぽけな保身を図ったなどというくだらないオチだろう。

のんびりとビールを口に行っている丸山を横目で見ながら、生駒は話を再開した。

でも、なぜ警察は三日の夜のアリバイも確かめたのでしょうか。

これは時間差を利用した簡単なアリバイ工作が可能だからです。

それは、伊丹空港近くの駐車場の領収書で可能になります。犯人はその駐車場に車を停めておき、四日の夜、札幌からの便が到着した後に出庫する。そして手に入れた領収書を、カード支払いの控えとひきかえに伊知さんのバッグに忍ばせ、死体の傍に転がしておけばいいのです。

このアイデアに私が気づいたのは、伊知さんの性格から考えて、

妙だと思ったからでした。

伊知さんはどんな小さな額でも必ずカード払い。駐車料金は二泊三日ですから、四、五千円くらいにはなっていたでしょう。きつとカードで支払うはずです。しかもその駐車場は係員が常駐。カードを利用することに不便はないのです。

それとも伊知さんはカードで支払った上に、領収書をもらったとでもいうのでしょうか。変ですよ。

これはやはり、伊知さん以外の誰かが入手した領収書だと考えた方がいい、と考えたわけです。

それを刑事に確かめました。

刑事は、伊知さんが三日の夜に飛行機に乗ったということを認めはしませんでした。否定もしませんでした。

私は、伊知さんが四日ではなく、三日の夜に大阪に帰ってきていたのだ、と確信しています。

つまり犯人は、自分が手に入れた四日夜の領収書を使って警察の捜査をミスリードしようとした、と考えられるのです。

犯人は三日の夜に伊知さんを殺し、そのまま死体を運び出すつもりだった。ところが天神橋筋は道路工事中。こうこうとした明かりの中に、たくさんの作業員やガードマンがいます。その目と鼻の先で、伊知さんの亡骸を車に積み込まなくてはいけない。その危険を避けて、犯人は工事の進捗を見ながら後日運び出すともくろんだのです。

ただ、死体を運び出す前に発見されてしまうかもしれない。その場合を考えて、犯行日時に眼くらましをかけようとしたわけです。結果はそうだったわけです。一応そういう仮説を立てておきます。

他方、金谷さんの死亡日時にも、気にかかっていたことがあります。

彼から私宛てに最後のメールが来たのは、八日の夜、ここで飲んでいたことなのです。したがって、金谷さんが死んだのは一応は八日の夜以降ということになっていますが、十九日に須磨浦海岸に打ち上げられた死体の腐乱具合から見て、少し遅すぎるという判断が警察にはあるようでした。

そしてもうひとつの証拠は彼の懐中時計です。

発見された死体の上着に、懐中時計が入っていました。それは九月二日に止まっていました。止まったままの時計を一週間以上も持ち歩いていたとは考えられないでしょう。

しかも、あのパーティ以降、彼に連絡を取ろうにも、携帯にも出ないし、事務所も留守のまま。

金谷さんとの接点は、唐突に来たその一方的なメールだけだったのです。

これも、犯人が時間差を狙ったのではないかと考えれば、容易にその工作に気づくことができます。

犯人は金谷さんを殺害するとき、携帯電話を奪っておいたのです。それを使って、伊知さんへは今日の午後に会いたいと四日に、私にはファックスが届いたと八日にメールを入れさえすればいい。

もっと以前に殺害されていたにもかかわらず、八日の夜まで生きていたと思わせるために。

非常にチープなアリバイ工作です。

そうなってくると、伊知さんの携帯電話も怪しくなってきます。

犯人が伊知さんの携帯電話も手に入れていたとしたらどうなるか。三日の夜、伊知さんの携帯電話から会社に、飛行機に乗り遅れたので四日の夜に大阪に戻るというメールが届いた。ところが、四日の昼の瀬謡美咲さんの披露宴に出席の予定なのに、それに対しては何も連絡がない。メールも、もちろん生の声での断りも。

それは、犯人がそんな予定があることを知らなかったからです。

また、本来返信するなり、電話なりをする必要のある仕事上のメールに対しても、なんら返事をしていません。まだ生きているはずの四日の日中にもかかわらず。

発見された伊知さんの携帯電話。

犯人は手袋をするなりしてそれを操り、先程のトリック、つまり会社にメールを入れるという仕掛けを施してから、すでに死んでしまっている伊知さんの指紋をつけ直してバッグに戻した。きっとそういうことなのでしょう。

すると、こういうことが分かります。

伊知さんの携帯電話から会社にメールが入ったのは、三日の夜十時四十三分。つまり、この時点で、すでに犯人は伊知さんの携帯電話を手に入れていた、ということです。

生駒はここでも間を取った。

そうです、それをしたのは私です、とここで言うてくれなければ、もう後がない。

一気に結論まで突き進むことになる。

しかし、誰も名乗りをあげようとはしない。
しかたがない。生駒は腹を決めた。

40 スキンヘッドの嘘

今の話の中に、少し考えるとおかしい点がありましたね。

伊知さんがどの飛行機に乗ったか、こんなことは調べればすぐに分かります。警察は必ず調べるでしょう。なのに、なぜ犯人は駐車場の時間差などという稚拙なトリックを施したのでしょうか。

死体が、発見されることなく安全に他所へ運び出せばそれがベスト。しかし、発見されたとしても誰かに濡れ衣を掛けさえすればいいのです。

つまり、すぐにはれることも想定した上での仕掛けだったのです。もちろんその濡れ衣を掛けられるのは金谷さん。四日の夜に金谷さんの携帯からメールを入れ、あたかも彼らが会っていたかのように見せかければいいのです。

伊知さんの携帯電話が発見されたとき、マナーモードに設定されていました。死体を植え込みの中に放置していくわけですから、音が鳴ると困ります。犯人は、金谷さんの携帯から四日の夜、植え込みに放り出されたバッグの中の伊知さんの携帯にメールを入れた、というわけです。

この仮説が正しいとすれば、金谷さんの携帯は四日の夜には犯人の手の中にあつたということになります。

さて、アリバイの話に戻しましょう。

三日の夜のアリバイ。丸山さん以外は、どなたもありませんでしたね。

松任さんや瑠奈さん、そして丸山さんは、先ほどの理由で除外しましょう。

残ったのは芳川さん、立成さんと、瀬謡さん。

芳川さんと立成さんについては、夜八時にパパラッチを出てから、

偽のメールが発信された十時四十三分までの間のことです。

いかがです？

瀬謡さんはまだ店の営業時間中ですから、大丈夫かな。

一歩たりとも店から出ていないというお客の証言がありませんか。

あ、そうですね。大丈夫ですか。それはよかった。

じゃ、立成さんと芳川さんは？

「事務所のセキュリティに人の出入りが記録されているから、私はその時間は事務所にいたことが証明できますよ」

そう言ったのは芳川だ。

「そうですね。立成さんは？ 三日のアリバイはなく、四日の夜はアリバイがある。その人が、時間差トリックをする資格があるということですよ」

立成が異議を唱えた。

「今の話じゃ、四日の夜に駐車場の領収書を取りに行かなくちゃならない。わたしにはそれはできないぞ。北新地の行きつけのラウンジにずっといたんだ」

「そうですね。その点、芳川さんのほうはどうです？ 四日の夜は、ずっと札幌のホテルに缶詰で作業していたということでしたが」

「そうですね。そんなことは不可能です」

「ふむ、ま、それは置いておきましょうか。もう一度、立成さんに質問しますよ」

「なんだ！」

立成が、スキンヘッドを真っ赤にして吼えた。

「立成さん、嘘をつきましたね。パーティの夜、金谷さんを下まで送っていき、彼が地下鉄の駅まで走っていくのを見たよ」

「それが嘘だとお！ わしの潔白は証明されたんじゃないのか！」

「なぜ、そんな嘘をついたんです？ 金谷さんが地下鉄の駅まで走っていくのを見たということは、表通りにあるメインロビーまで出

で行ったということですよね。ゲストハウスの専用エレベータには、暗証番号を知らないと下からは乗れませんよ。金谷さんを見送ってからどうしたんです？ 社員の誰かに下まで迎えに来てもらったんですか？ それとも下の事務所から非常階段を通って？ それなら金谷さんが帰ったことが芳川さんの耳に届いているはずですよ」

「なっ」

「違いますね。あなたは、金谷さんを送ってなどいない」

「なっ」

「送ったと嘘をついたのは、金谷さんがあの夜、あのゲストハウスで殺されたのではない、ということにしたかったからじゃないですか？」

「なんと！」

「つまり誰かを庇うために。そして結果として、須磨の土地売買について、土壇場になって大きな値引きを勝ち取った。これは繋がる話ですよ」

「なんということを！ でたらめだ！」

「まだ、でたらめな臭いがしますか。いいですよ。でも、あなたの嘘に気づいたことで、ことの真相がはつきりと見えてきました。さ、芳川さん、いかがです？ …… お声がありませんね」

立成の視線は相変わらず痛い。

しかし、瞳にはすでに迷いがあつた。

立成がチラッと芳川に眼をやったが、こちらは無然としたまま目を細めて、あらぬ方を見やっている。

伊知さんは四日の昼には披露宴に出席する予定が入っていたのに、永年の友人である瀬謡さんにはなんの連絡も入れなかった。

なぜか。とりあえずひとつめの課題として提示しておいた件です。もうお分かりだとは思いますが、再度整理してみましょう。

芳川さんが四日の夜、札幌から帰れないかどうか。これを検証し

てみましょう。

いいですか。

札幌を十八時三十分発伊丹二十時二十五分到着の日航機で大阪に帰ってくる。すると、かろうじて二十時四十七分に空港近くの駐車場を出ることが出来ます。翌朝、関空朝八時十分発札幌九時五十五分着の日航機であれば、十一時からの札幌でのパーティに滑り込みで間に合いますね。

その間に伊知さんの死体まで舞い戻って領収書を。

さすがに芳川の表情が変わった。

「そんな……。私は朝市で……」

市場はパーティ会場のホテルのすぐ近く。

カニ味噌の瓶詰めなんか、朝一番じゃなくても売ってますからね。

芳川さん、あなた、四日の夜、瀬謡さんに予約の電話を入れたでしょう。札幌からですね。あのすぐ後、携帯は繋がらなくなった。

五日の朝、塊田瑠奈さんがあなたに電話を入れた。それも繋がらなかった。

あなたはそれぞれ、適当な理由をこしらえていたけど、それも嘘でしょう。

実際は二回とも飛行機に乗っていて繋がらなかったということですね。瀬謡さんのときは札幌から伊丹への、瑠奈さんのときは伊丹から札幌への機中だったわけです。

「なんの証拠があつて……」

それにですね、この店へ打ち合わせの後で来たとき、そう、伊知さんの事件をこのテレビで見た日のことです。

あの日ここへ来る途中、芳川さん、あなたは言いましたよ。

天神橋筋は工事中だって。

あの工事、三日の夜からの夜間工事ですよ。

三日の夜は事務所で残業して、まっすぐ帰宅したんですよ。

梅田のパラッチからあなたの事務所のある土佐掘通へは、天神橋筋は絶対に通りません。もちろん、あなたの家がある芦屋へも方向が正反対。

どこへ行つてたのかな？

四日からは札幌、続いて東京へと出張。そのあなたが、天神橋筋が工事中だと、なぜ知っていたのかな。

「ちょっと、待ってください。さっきも言つたように、事務所のセキュリティが」

生駒はピシヤリと芳川の言葉を遮った。

事務所のセキュリティは、作動させなければ役に立たない。

一旦事務所に戻り、天神橋筋の伊知さんのマンションに向かい、また戻ってきたとしても、施錠しなきゃセキュリティなんてお構いなし。

芳川の顔から血の気が引いていった。

「言いがかりです。所詮、仮説に基づく話じゃないですか。しかも、私がなぜ伊知さんや金谷さんを殺す理由があるというんです。それを全く説明していないじゃないですか」

言葉はまだ丁寧だが、目は吊り上がり、口元が震えている。

「でも来月になれば、JCBから伊知さんの会社へ、三日の夜の駐車場料金を引き落とす旨の明細が届くと思う。それは伊知さん自身が支払ったもので、あんたが用意した領収書と矛盾する内容のものがね」

「そんなことは私には関係ないですし、そもそも」

「伊知さんや金谷さんを殺す理由を聞きたいんでしょう。それはあ

なた自身から、お話になつたらいかがです？」

「めちやくちゃだ！」

「ふう。じゃ、しかたがない。では、今からそれを話しましょう。推測がふんだんに含まれていますが、基本的な筋にぶれはないはずです」

金谷と芳川の接点は三十年前にもあつた。

警察の調査によつて、ふたりは同時期に同じ自動車運転教習所を卒業したという事実が明らかになっていた。

生駒は、冒頭にその事実を披露した。

芳川が目を剥いた。

41 冷めたひろつず

芳川了輔、当時、二十四才。金谷謙吾、当時、二十二歳。

芳川は遊び仲間となった金谷にそそのかされて海の家更衣室を覗いた。しかし気づかれてしまい、思わずその女性を殺してしまう。金谷は芳川が犯人だと言い出せなかった。共犯にされたらたまらない、ということだったのか、漁師である金谷の父親と大手の海産物加工業であった芳川の父親の力関係が作用していたのかもしれない。

あれから三十年。

ふたりの関係も、あの事件以降は切れた。

順風の人生を歩んできた芳川。そして思いつきで始めたブログ。ただ、これがつまずきの元だった。思いもかけない人の輪が形成されていくことになる。

伊知のインタビュー記事には、娘時代は垂水に住んでいてバイクに凝っていたと記されている。

この時点で、芳川は自分が殺した娘の妹だと気がついたかもしれない。

しかしもし気づいたとしても、まだその偶然は芳川にそれほどのダメージを与えることはなかった。

インタビューブログは連載を続けていく。

丸山の番になった。丸山は雑談の中で、須磨の海の家でアルバイトをしたことがあると話した。芳川の実家が須磨にある、という話を受けてのことだ。ただ、この話はブログには掲載されていない。

そして、金谷健吾が登場した。

金谷は話のテーマを潮騒とし、自分が海を家の経営者の息子であ

ると匂わせた。

三十年前の事件であっても、その犯人は、忌まわしき海の家の屋号がカナヤだったことを、そして昔の自動車教習所時代の友人の名前が金谷であることを覚えていたに違いない。

金谷健吾という名が、昔の記憶の中に現れてきたのだ。

伊知、そして丸山を挟み、今度は金谷。

不安にはなつたろう。少なくとも気分はよろしくない。

しかし芳川は、そんなことをおくびにも出さない。まだ、偶然の域だと考えたのだ。

もちろん海の家のくだりをブログに載せるつもりはなかった。

追い討ちを掛けるようなことが起きた。それはパーティの日。豪華なプールサイドのことだった。

生駒までもが、あの海の家の関係者かもしれないと分かったのだ。しかも生駒は、金谷から紹介された人物。

芳川は急に不安になった。実は金谷は、すべてを知っているのではないかと。

つまり今、目の前にいる芳川が、昔の遊び仲間であり、また海の家の事件の犯人である芳川と同一人物であることを知っているのではないかと。

もし、元は知らなかったとしても、バーでの会話、つまり、生駒が芳川邸の現場は須磨の関守町だと言ったときの金谷の反応は……。あるいは、自分は気づいているぞという脅しに見えなくもない反応は……。

実際、その時点で金谷の方も、目の前の税理士があつた芳川了輔だということに気づいたことは間違いない。

現に金谷から、とんでもないことに気がついた、あんたにも関係

したことや、おもしろいことになるぞ、という電話が生駒に掛かってきている。

芳川はバーでの金谷の反応を見て、猛烈に不安になった。

しかも、テラスで生駒と丸山が海の家の話題で盛り上がっているとき、金谷が、へえ、須磨の海の家でバイトかあ、と言って、芳川に眼をやった。

気づいているぞというように。

さらに、芳川にとって驚くべきことが起きた。

伊知に向かつて、立成がとんでもないことを言い出したのだ。

芳川が殺した娘、井端美弥子の名を出し、当時は云々と。

芳川の記憶の中には、立成という名前もあった。

ニュースで見た名。

立成は三十年前、井畑馨、今の伊知馨の恋人としてあの事件に立ち会っていたのである。

もう偶然でもなんでもない。何かが仕組まれている。

芳川はそう信じ込んだ。

そしてトドメともいえるような伊知の一言。

あの男を許せない。一日たりとも忘れたことはない。

それは立成に向けた言葉だったが、芳川はそれを自分に向けて放たれたと受け取った。

伊知と金谷が、情報を共有していることを確信したのだった。

ことは急を要する。

すぐに金谷と伊知の口を封じなくてはいけない。

芳川はそう考えた。時効になっているとはいえ、あの悪事が公け

になれば己の今の地位や名誉は瓦解してしまう。

それは耐えられないくらいに恐ろしいことだった。

あるいは金谷に強請られるかもしれない。

そうなる前に。

一瞬の迷いもなく、芳川は一気に金谷と伊知を殺してしまう決断をした。

まずは金谷。もっとも危険な人物。

スライドショーが始まり、客の関心がそちらに向いた。

頃合を見計らって二階の娯楽室のバルコニーに急行し、気持ちを冷やしていた金谷に襲い掛かった。そして、身元の判明を遅らせるために携帯電話や免許証などを奪い、そのまま土佐堀川に投げ落とした。大きな水音がしたが、幸い豪雨の夜。

次は伊知。

三日の夜、北海道出張から帰ってくる伊知をマンションの駐車場で待ち伏せた。

そして携帯電話や領収書を使っただけで、あわよくば金谷に罪を擦りつけようとした。

三十年前に金谷から聞いて、彼らがいわば幼馴染だということは知っていたろうし、パーティでの出来事によって、今も彼らが全く見知らぬ仲でもないということを知っていたから。

そして芳川は、立成と生駒と丸山にも注意を払わねばと思ったはずだ。

しかし、立成にはそんな必要はなかった。

札幌から帰るなり、金谷を突き落とす様子を見ていたぞ、と告げられたからだった。

その場で土地代金の値引きを了承させられてしまったが、強請ってくる間は放っておいてもいい。いつか始末を付ける必要があると

しても。

次に気になるのは丸山と生駒だ。

特に、聞こえよがしに海の家のことを話していた丸山。

とりあえず、自分で感触を確かめに行った。強請ってくるようなら、それはそれで立成同様の扱いでいい。取り急ぎ困るのは、三十年前の事件を警察に垂れ込まれることなのだから。

しかし丸山は、そのことに気づいている様子はなかった。今のところは、まずは安心だ。

生駒はどうか。瑠奈の話によればこちらも気づいている節はない。しばらく放っておいてもよい、と芳川はそう判断した。

そして、もうひとり。

芳川が気になる人物がいた。

生駒は喉の渴きを感じた。

しかし、一瞬たりとも話を途切れさせたくはなかった。

今話したことが穴だらけの仮説であることは十分承知していた。ただ、名指しをした限りは、ここで反論をされたくはなかった。ビールに口もつけず、一気に話を進めていった。

「そもそも、ブログに例の事件の関係者がなぜ集まることになったのか、と芳川も考えたはずです。先ほど保留にしておいた二番目の課題です」

今、生駒の顔を見て話を聞いているのは、誰もいない。優さえも、空になった皿を見つめている。

「すなわち、ある人物が、インタビューを受けた伊知さん、丸山さん、金谷さんの関係に気づき、なんらかの意思を働かせたと考えてみましょう。その結果、生駒そして立成さんへと続きます」

瀬謡の視線がちらりと立成を見やった。

「それを画策した人物とは誰か。もちろん三十年前の事件について詳しく知っている人です。私や丸山さんや金谷さんや立成さんが、あの事件の関係者であると予測でき、金谷さんに対して立成さんをインタビューにと示唆できる人。それは誰でしょう」

瀬謡の視線が生駒に向いた。

「可能性として、四人の名前を挙げることができます。伊知さん、立成さん、瀬謡さん。そして、もうひとりには松任さん」

瀬謡の視線は松任に流れていった。

「そうです。旧姓、伊知歩美さん、殺された伊知馨さんの娘さんです。この答えは芳川にとつて、考えるまでもなかったでしょう。松任歩美さんは、以前は旧姓の伊知という名前で芳川の元で働いていたのですから」

優が目を上げて、芳川を見据えた。

「私は焦りました。もし三条や私の推論が間違っていなければ、いえ、間違っているとは露ほども思っていないませんが、次は松任さんが狙われるかもしれない、と」

芳川がグニューという妙な唸り声をあげた。

もう、声も出ないのか。

罪を認めてさっさと頭を垂れる潮時だというのに、そこまで腹は座っていないということだろう。

「どうです？」

返事はない。

生駒の解説は推論だらけで、その欠点をつけるはずだと、まだ必死に考えているのかもしれない。

生駒は最後の解説を試みることにした。

ただ、もはや芳川に聞かせるものではない。

松任に、そして立成に向かって話すことだった。

「保留にしておいた課題の二つめ。この人の輪を結んだのは松任さんだと思いましたか？」

返事はない。

「ふむ、何のために？　そう、松任さんではありません。それは伊知馨さんです」

立成の目がずっと細められて感情の動きを隠した。

「伊知さんは三十年前の事件の関係者の名前をフルネームで覚えていました。ブログが丸山さん金谷さんと続いた時点で、三十年前の事件のことに思いが至りました。もちろん、幼馴染である金谷さんがあの海の家の子であることは元から知っています。丸山さんのフルネームを見て、海を家のバイトではないかと思っただけです」

立成が目の隅で丸山を捉えている。

「伊知さんの想像が膨らみ、思いがけないことに気づきました。私も、そして金谷さんから以前紹介された立成さんも、そうではないかと」

生駒は話しながら、自分のこの長い解説がなんになるのだろう、と思った。

「バイトであつた私はともかく、当然のことながら伊知さんは立成さんに関心を持ちます。彼女は金谷さんに立成さんの人となりを確認したことでしょう」

冷めてしまったひろうず。おでん鍋からむなしく立ち上る湯気。何も映さないテレビ。

急にむなしさを感じた。

しかし、最後まで話さずにはいられない。

怒りの感情を押し殺して生駒は話す。

「間違いない。あの男だ、ということになりました」

立成の細い目は閉じられてしまった。

「そこで、ひとつのアイデアが浮かびます。伊知さんは、金谷さんに伝えます。立成さんに次のインタビューを頼んではどうかと。しかし、金谷さんはその意図に気がつかず、私にインタビューを頼みます。立成さんとはすでに疎遠になっていたからでしたが、立成さんという人もいたんだが、と私に言い添えたのです。ただ、私が次のインタビューを立成さんにバトンタッチしたことで、結果として伊知さんのアイデアは実現することになりました」

生駒は松任を見た。

宙に視線をさまよわせている。

「さて、伊知さんの意図とはいったいなんだったのでしょうか。たくさんの新しい人の輪が結ばれました。消えかかっていた人と人の繋がりが浮き彫りにされました。こんな愚劣な事件が起きてしまったブログでしたが、伊知さんはこれを利用して、あるひとつの人の輪が結ばれることを目論んでいたのではないかと私は思うのです。つまり、松任歩美さんに立成さんを引き合わせようとしたのではないのでしょうか。立成さんをブログに登場させることによって、芳川の部下として働いている娘と出会う機会が生まれるかもしれないと母として……」

松任の瞳が揺らめいた。

立成が不安そうに目を開けた。

「しかし、今、私がこう申し上げたからといって、その繋がりを手放しで歓迎しているわけではありません。あの男を許せないといった伊知さんの言葉。それは相手の気持ちを逆撫でするオルゴールを遊び半分で再び贈ってきた立成さんの無分別に対する言葉でしょう。立成さんがどういう考えだったのか、私は知りません。しかし、伊

知さんの気持ちに立ってみれば、その品は忌まわしい記憶を呼び起こすものだったのです。深く傷つけられた大学生時代の思い出。自分への裏切り。決して許すことのできない行為……。彼女にとって、その品はそれらを思い起こさせるものだったのです」

生駒は大きく息を吐き出した。

「では、私の話はこれくらいにしておきます。詳しいことは申し上げませんし、正直に申し上げると、すべてが推測でしかありません。後は、松任さんの個人的な思いを尊重したいと思います」

疲れを感じた。

投げやりだとは思ったが、こう言って、推論を締めくくりたいと思った。

「それから、最後に松任さんにお知らせしておきます。あなたをはねた加害者は、立成さんではありません。警察に調べてもらいました」

間髪いれず、優が口を開いた。

「音っていうテーマがおもしろかった」

松任の目が、ずっと優に移動した。

「インタビューの中ではどんな話が出たのかなあ。ブログに掲載されていることもされていないことも含めて。私はすべてを把握することはできないけど、誰かさんの心を締めつける話題が出たんやろね。普通なら、たまたま偶然に出た茶飲み話として済ませておける程度の話。聞き流しておけばいい。でも、その男はじわりと囲い込まれていくような気持ちがしたのよ。その話は……」

42 手紙（エピローグ）

優の闊達な声が、生駒の推論を引き継いだ。

「それは海の家の話。そしてインタビューのテーマは音。具体的な音の話。海の家関係者たちの数々の話の中にも、誰かさんの気持ちを波立たせる内容が含まれていた。丸山さんの列車の轟音、金谷さんの潮騒、生駒の走る靴音、立成さんの話に出てきた渚に残した足跡という曲、松任さんのドウオモの静寂に出てきたラの音の話。これらの音は、三十年前の事件を取り巻く音の世界の一部を切り取ったものだったんじゃないかな」

潮騒が間断なく聞こえている須磨浦海岸。

海の家ではその年爆発的に流行った渚に残した足跡が流れていた。犯人はシャワーを浴びている美弥子を覗いていた。暗い欲望に支配された恍惚感が、その曲のリズムによって増幅され、酔いしれていた。

それ以降、一種のテーマ曲のように、犯人の汚れた心に特殊な効果をもたらす音楽となったのかもしれない。

覗かれていることに気づかれ、叫び声をあげられそうになったとき、逃げればいいのに、思わず美弥子の口を塞いでしまった。

しかし、それからどうすることもできなくなってしまう。

手を放したとたんに美弥子は叫び声をあげる。

じりじりとした時間が過ぎていく。それは高々数秒のことだろう。わずかそんな短い時間で、犯人は美弥子や己自身、そして多くの人間の一生を決めてしまうおぞましい決断をしてしまった。

ただただ自分の保身のための、愚劣な決断を。

列車が近づいてきた。汽笛が鳴り響く。

それを合図にしたかのように、犯人は美弥子の首を絞めた。その間、長く尾を引く汽笛が鼓膜を振るわせ続けていた。

犯人はそれ以来、生涯その音が苦手になった。

苦手というより、精神を歪ませる音、正気を失わせる音となった。汽笛のように鳴り続けるラの音が。

線路の下の抜け道を通って犯人は逃げた。

列車が頭上を通り過ぎていった。轟音を響かせながら。すでに張り裂けそうになっていた心臓を更に震わせて。しかし、走る。逃げる。バタバタと足音をたてて。

「どうです？ 海の家関係者がインタビューで話したことは、三十年前の殺人犯に、どうしてもあの事件を思い出させる音の仕掛けとなっていたのよ。関係者が揃ったのは偶然なんかではない、仕組まれているんだと思わせるに十分な内容だったのよ」

優が芳川を見据えながら話していく。

「そして、パーティのお開きのころ、どこかで音が鳴り続けていた。最初はソのに近い音階だった。だけど、徐々に気温が下がったためにパンチングメタルの振動数が変化し、ラの音に近づいていった。そう、犯人にとって呪われた音階に」

ただでさえ追い詰められていた不安定な精神状態に、鳴り止まないブザーの追い討ち。

面子、理性、そんなものがみるみるうちに、しかも確実に壊れていった。

そして正気さえも失い、つまり、音の圧力に胸を押しつぶされて、再びもはや人とは呼べない殺人鬼の道へと転がり落ちていった……。

もう、芳川は両手で耳を塞いで眼をつぶっていた。

しかし、最後の力を振り絞るように、震える唇から言葉がこぼれ落ちた。

「仮定の話ばかりだ。なんの証拠もない」

生駒の胸の内では、もう制御できなくなるのではないかと思うほどの怒りが、なんらかの形を伴って口から飛び出そうと暴れまわっているようだった。

しかし、これを押さえ込める余裕が生駒にはある。

誰にでもあるのだ。人としてのまともな理性があれば。

松任が、もう真っ青な顔をしてうつむいていた。

塊田瑠奈を芳川から遠ざけるために画策した卑怯な行為。瑠奈の嫌いな音を、パーティ会場で鳴り響かせるという異常なアイデア。

それは思いもよらない結果をもたらしてしまったのだった。

崇拜して止まない芳川の心を狂わせ、母を殺させるという悲劇を生んでしまったのだ。

松任の体が震えだしていた。

生駒の視線を追って、立成も事情を察したかもしれない。

しかし立成には、どうすることもできない。ゆっくりと天井を見上げ、まぶたを瞬かせた。

生駒にしても、今、松任に必要なものがなになのか分からなかったし、分かったところで生駒が用意してやれるものでもない。

すみよしの中には、恐ろしいまでの様々な思念が渦巻いていた。張りつめた空気の中で、一箇所だけ、腐臭を放っているところがあつた。

そこに、もはや哀れな外道に成り果てた芳川了輔が座っていた。「なんの証拠もない」と、うつろに繰り返している。

立成が立ち上がった。

「売買契約は成立しているが、破棄したい。弁護士と相談する。芳川さん、あんたの土地は汚らわしい。事業化する気は全くなくなってしまった」

そして立成は、生駒に、すまないといった。

「ええ」

もちろん生駒も、この仕事を請け負う気は失せていた。

芳川は立成には応えず、

「特に、今この女が言った音の話は、お笑い種だ！」

と、こちらもガタリと椅子を蹴立てて立ち上がった。

「どっちにしろ、私が犯人だということに結びつかない！」

優ががっくりと肩を落とした。

「あーあ。特定音階嫌悪症って変な病気かもしれないから、せつかく、そうでしたって言わせてあげようと思ったのに。救いようがないな、こりゃあ」

「なんだと！」

芳川の体のどこから、ブチッと何かが引きちぎれる音がしたようだった。

「このメス豚！」

「ハハッ。本性が出てきた」

「言わせておけば！」

「いいかげんにしたらどう？ 見苦しい」

芳川が椅子を蹴飛ばし、カウンターを回りこもうとした。黙って立成が立ちほだかる。

「そこをどけ！」

優はビクリともしない。

「証拠は上がってるのに」

「なんをぬかす！」

「警察の取調室で見せてもらえるよ」

厨房の暖簾が、たくし上げられた。

「ここでお見せしますよ」

男が出てきた。

「警察です。すべて聞かせていただきました。で、これですがね、生駒さんと三条さんのおふたりから預かったものです」

背広の内ポケットから、茶封筒を取り出した。

中からビニール袋を引っ張り出す。白っぽいけらがばつんと入っていた。

「こんなものを家の床下に隠し持っていた気持ちを、お聞きしたいものですな」

刑事が、芳川の目の前にその袋をかざした。

「なんなんだ、これは！ ふざけるのもいい加減にしろ！」

外道の言葉にはもう関心を示さず、優が柔らかい声を出した。

「さすが日本の警察。変なところで手間を省くんやね」

「違いますよ。生駒さんと三条さんに敬意を表してつてところです」

「ハハ。じゃ、それがなんなのか、私から説明しましょうか。タイムカプセルを自分で取りに行くという話。駅弁の容器に入れたタイムカプセル。子供っぽい遊び」

芳川が真っ青になっていく。

「それをいまさら掘り出しに行くってさ、とってつけたような話。ノブは先回りしてそれを手に入れた。それがこれ。すぐにピンと来たわ」

芳川の体が、ぐらりと揺れた。

「戦利品……なんや。こんなものを後生大事に。ふざけやがって……。くつ、この」

芳川がその場に崩れ落ちた。

「この男は、伊知さんのストラップと金谷さんの携帯も、汚らわしいコレクションに加えるつもりやったんやろ」

生駒は、怒りとやるせなさに体の震えが止まらなかった。

「どこに隠してある？ ストラップと携帯。日本の優秀な警察に手間を取らせる前に、白状したらどう？ 他人様の役に立てるとしたら、もうそれくらいしかないよ、あんた」

白いプラスチックのかけら。

色は抜け、針は錆びて溶けてなくなっていた。

警察の鑑定によれば、あの夏の日、生駒が美弥子のブラを止めてやった緑色の安全ピンの残骸だった。

ユウが生駒の腕に、柔らかい手に乗せた。

生駒は、泡を吹いているのではないかと思うくらい、怒りで声が出なかった。

「ノブ、こんなやつに腹を立てること自体が、あほらしいよ。空耳に支配されちゃう男だよ、こいつ」

後日

生駒は瀬謡の店を覗いた。

「よお」

「あ、今日はひとりなんだ」

「あいつもたまには、歌の仕事があるんだってさ」

カウンターの中の松任が、ちよつと残念そうな顔をした。

「なかなか、そこもサマになってますね」

「そうでしょー」

芳川事務所は解体し、松任はひとりで税理士事務所を開くことになった。

ただ、それだけで食えるはずもなかつたと、夜はおでん屋すみよしでアルバイトを始めたのだった。

「これ」

「わ！ 私に？」

「そう。僕らふたりから。選んだのはユウだけだね」
たまご色のエプロン。

松任は早速それを首に掛けた。

「うれしい！ ありがとう！」

「それとこれ」

茶封筒を出し、松任に渡した。

「拘置所から送られてきた」

封筒には立成と署名があった。

長い手紙だった。

「読んでいい？」

「どうぞ」と、瀬謡が笑った。

「僕宛なんだけど、松任さんのことも書いてある」

生駒は、耳は甲子園で始まった日本シリーズに傾けながら、眼は松任の瞳の動きに注いでいた。

松任は読み初めのうちこそ厳しい顔をしていたが、やがて顔つきがほぐれてきて、読み終えると懐かしむように一部を読み返し、穏やかな顔をして便箋を元通りに畳んだ。

生駒はなにもいわなかったが、一瞬絡んだ松任の潤んだ瞳が、かすかに笑った。

「瀬謡さん。立成さんの例のプレゼントさ、あれ、実は自分の娘に渡してくれないか、ということだったらしい。ノクターンのオルゴール」

「なるほどね」

「でも、立成さんは松任さんのことを……、まさかね」
瀬謡がポツリといった。

「まさかじゃないかも。立成さんはこの店で、結婚前の松任さんと

顔を合わせているんだから

「ん？」

「だって、松任さんの旧姓は」

了

42 手紙（エピローグ）（後書き）

皆様、いかがでしたでしょうか。

このお話、実は自分自身の須磨での海の家でのアルバイトの体験、
というかその時の空気や匂いみたいなものを書きたくて、書き始め
たものです。だから、ストーリーには無理があると思います。そんな
ことで人は狂うかい！

しかしまあ、自分としては楽しんで書いたものでございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7147/>

ノブ、それって空耳

2011年9月20日03時24分発行